鹿角市文化財調査資料87

特別史跡

大湯環状列石

発掘調査報告書(23)

2007. 3

鹿角市教育委員会

序

北東北の中央部に位置する鹿角市には、縄文時代から近世にかけての埋蔵文化財や地域と自然のなかから発生した民俗文化財が多く、秋田県内でもその宝庫として知られています。

特に大湯環状列石は、野中堂・万座環状列石を主体とする縄文時代の遺跡で、二重の環状に整然と配置された配石遺構と規模から昭和26年には国史跡に、さらに31年には特別史跡に指定されております。昭和６年に発見され、調査研究の歴史も永く、環状列石・配石遺構研究の原点となっています。

鹿角市教育委員会では、文化庁・秋田県教育委員会のご協力を得て、昭和59年度から発掘調査を実施し現在も継続しております。また、平成10年度からはそれまでの調査成果をもとに第Ⅰ期環境整備事業を、15年度からは第Ⅱ期環境整備事業を行っており、遺構や自然環境の復元、大湯ストーンサークル館建設等を行っております。

本年度は、第Ⅲ期環境整備計画地の資料収集のため史跡東端の発掘調査を行いました。この地域には一本木後ロ配石遺構群が存在することが知られており、今回の調査は配石遺構群の東側への広がりを調査するものでした。調査によって新たに縄文時代の配石遺構や平安時代の竪穴住居跡が発見され、遺構の分布状況や性格を考察する上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書は本年度の成果をまとめたものであり、環状列石の研究資料として、また、平安時代の集落研究の資料として活用くだされば幸いに存じます。最後になりましたが、発掘調査並びに環境整備事業、報告書作成に対しご指導・ご協力いただきました関係機関・各位に厚く感謝を申し上げます。

平成19年３月

鹿角市教育委員会

例　　言

1．本報告書は、平成18年度に国庫補助金を得て実施した「特別史跡大湯環状列石第２３次発掘調査」の成果をまとめたものである。調査の概要については大湯ストーンサークル館事業「縄文に学ぶ」などで発表してきたが、本報告書を正式なものとする。

2．本報告書の執筆と編集は、生涯学習課文化財班長　藤井安正、文化財班主事　三浦貴子が行った。

3．石器類の石質鑑定は、秋田県立十和田高等学校長　鎌田健一氏にお願いした。

4．土層や土器などの色調の記載には「新版　標準土色帖（日本色彩研究所）」を使用した。

5．本報告書に使用した地形図並びに図面は次のとおりである。

国土交通省国土地理院発行「毛馬内（１/2500)」・「花輪（1/2500)」・「湯瀬（１/2500)」

6．遺物の実測・採拓・清書などの一連の作業は調査担当者、調査補助員、作業員が行った。

7．本報告書に掲載した実測図などには各々に示した。なお、写真図版については任意の縮尺とした。

8．本文中において用語の主たるものは統一するように努めた。使用が数度にわたるときは簡略している場合もある。

9．実測図・表・写真図版などで下記のような記号、スクリーントーンを使用した。

ＳＸ（Ｓ）…配石遺構、ＳＫ…土坑、ＳＩ…竪穴住居跡、ＳＸ（ｆ）…焼土遺構

▨…遺構確認面下の層　　▩…焼土

10．発掘調査並びに環境整備事業、報告書作成にあたり下記の方々よりご指導とご助言をいただきました。心から感謝申し上げます。

斎藤　忠、小林達雄、冨樫泰時、沢田正昭、安村二郎、熊谷常正、阿部義平、村越　潔、葛西　励、小野健吉、本中　眞、岡村道雄、平澤　毅、坂井秀弥、遠藤正夫、稲野裕介、児玉大成、榎本剛治、石神　敏、岩田貴之、大野憲司、高橋忠彦、榮　一郎、三嶋隆儀、五十嵐一治、糸谷和憲、吉川耕太郎、熊谷太郎、櫻田　隆、児玉　準、柴田陽一郎、小林　克、高橋　学、利部　修、武藤祐浩、宇田川浩一、栗澤光男　（敬称略・順不同）

本　文　目　次

序
例言
本文目次
図版・表・写真図版目次
第Ⅰ章　遺跡の環境
1　遺跡の位置と立地…… 1
2　周辺の地形と地質…… 2
3　周辺の遺跡…… 4
4　遺跡の層序…… 11
第Ⅱ章　調査の概要
1　調査要項…… 12
2　調査の目的…… 13
3　調査方法…… 13
4　調査経過…… 16
第Ⅲ章　A_6区、A_7区検出遺構と出土遺物
1　縄文時代の遺構と遺物
(1)　配石遺構…… 18
(2)　焼土遺構…… 21
(3)　遺構外出土遺物…… 25
①　土器…… 26
②　石器…… 26
2　弥生時代の遺構と遺物
(1)　遺構外出土遺物…… 39
3　歴史時代の遺構と遺物
(1)　竪穴住居跡…… 43
第Ⅳ章　分析と考察
鹿角市内の奈良・平安時代の
竪穴住居…… 48
第Ⅴ章　調査のまとめ…… 107
参考文献…… 109
写真図版…… 110
報告書抄録

図版・写真・表目次

図　版　目　次

第１図　遺跡位置図(1)…… 1
第２図　鹿角市の地質図…… 3
第３図　周辺の遺跡…… 8
第４図　基本層序図…… 10
第５図　調査区位置図…… 14
第６図　トレンチ配置図・遺構配置図… 15
第７図　第１号配石遺構実測図…… 18
第８図　第２号配石遺構実測図…… 19
第９図　第３号配石遺構実測図…… 20
第10図　焼土遺構実測図(1)…… 22
第11図　焼土遺構実測図(2)…… 24
第12図　出土土器(1)…… 27
第13図　出土土器(2)…… 28
第14図　出土土器(3)…… 29
第15図　出土土器(4)…… 30
第16図　出土土器(5)…… 31
第17図　出土土器(6)…… 32
第18図　出土土器(7)…… 33
第19図　出土土器(8)…… 34
第20図　出土土器(9)…… 35
第21図　出土土器(10)…… 36
第22図　出土土器(11)…… 37
第23図　出土土器(12)…… 38
第24図　出土土器(13)…… 39
第25図　遺構外出土土器分布状況…… 40
第26図　出土石器実測図(1)…… 41
第27図　出土石器実測図(2)…… 42
第28図　第１号竪穴住居跡実測図…… 44
第29図　第１号竪穴住居跡・炭化物出土状況… 45
第30図　第２号・第３号竪穴住居跡実測図…… 46
第31図　元慶の乱当時の蝦夷の村…… 50
第32図　北の林Ⅰ遺跡…… 53
第33図　遺跡位置図(2)…… 54
第34図　遺跡位置図(3)…… 55
第35図　柱配置模式図…… 64
第36図　調査区北東部竪穴住居跡分布状況… 107

表　目　次

第１表　発掘調査の経過と成果…… 5
第２表　周辺の遺跡一覧表…… 9
第３表　鹿角市の風向…… 52
第４表　鹿角市内の奈良・平安時代の集落(1)…… 56
第５表　鹿角市内の奈良・平安時代の集落(2)…… 57
第６表　鹿角市内の奈良・平安時代の集落(3)…… 58
第７表　鹿角市内の奈良・平安時代の集落(4)…… 59
第８表　鹿角市内の奈良・平安時代の集落(5)…… 60
第９表　鹿角市内の奈良・平安時代の集落(6)…… 61
第10表　竪穴住居跡長軸分布…… 62
第11表　竪穴住居跡床面積分布…… 63
第12表　柱配置ごとの数量…… 64
第13表　住居跡の規模と柱配置…… 65

第14表　カマドの位置…… 66
第15表　竪穴住居跡観察表(1)…… 68
第16表　竪穴住居跡観察表(2)…… 69
第17表　竪穴住居跡観察表(3)…… 70
第18表　竪穴住居跡観察表(4)…… 71
第19表　竪穴住居跡観察表(5)…… 72
第20表　竪穴住居跡観察表(6)…… 73
第21表　竪穴住居跡観察表(7)…… 74
第22表　竪穴住居跡観察表(8)…… 75
第23表　竪穴住居跡観察表(9)…… 76
第24表　竪穴住居跡観察表(10)…… 77
第25表　竪穴住居跡観察表(11)…… 78
第26表　竪穴住居跡観察表(12)…… 79
第27表　竪穴住居跡観察表(13)…… 80
第28表　竪穴住居跡観察表(14)…… 81
第29表　竪穴住居跡観察表(15)…… 82
第30表　竪穴住居跡観察表(16)…… 83
第31表　竪穴住居跡観察表(17)…… 84
第32表　竪穴住居跡観察表(18)…… 85
第33表　竪穴住居跡観察表(19)…… 86
第34表　竪穴住居跡観察表(20)…… 87
第35表　竪穴住居跡観察表(21)…… 88
第36表　竪穴住居跡観察表(22)…… 89
第37表　竪穴住居跡観察表(23)…… 90
第38表　竪穴住居跡観察表(24)…… 91
第39表　竪穴住居跡観察表(25)…… 92
第40表　竪穴住居跡観察表(26)…… 93
第41表　竪穴住居跡観察表(27)…… 94
第42表　竪穴住居跡観察表(28)…… 95
第43表　竪穴住居跡観察表(29)…… 96
第44表　竪穴住居跡観察表(30)…… 97
第45表　竪穴住居跡観察表(31)…… 98
第46表　竪穴住居跡観察表(32)…… 99
第47表　竪穴住居跡観察表(33)…… 100
第48表　竪穴住居跡観察表(34)…… 101
第49表　竪穴住居跡観察表(35)…… 102
第50表　竪穴住居跡観察表(36)…… 103
第51表　竪穴住居跡観察表(37)…… 104
第52表　竪穴住居跡観察表(38)…… 105
第53表　竪穴住居跡観察表(39)…… 106

写真図版目次

ＰＬ１　配石遺構(1)…… 110
ＰＬ２　配石遺構(2)…… 111
ＰＬ３　竪穴住居跡(1)…… 112
ＰＬ４　竪穴住居跡(2)…… 113
ＰＬ５　竪穴住居跡(3)…… 114
ＰＬ６　調査区西側…… 115
ＰＬ７　調査区南側…… 116
ＰＬ８　調査区北東側…… 117
ＰＬ９　盛り土調査…… 118
ＰＬ10　出土土器(1)…… 119
ＰＬ11　出土土器(2)…… 120
ＰＬ12　出土土器(3)…… 121
ＰＬ13　出土土器(4)…… 122
ＰＬ14　出土土器(5)…… 123
ＰＬ15　出土土器(6)…… 124
ＰＬ16　出土土器(7)…… 125
ＰＬ17　出土土器(8)…… 126
ＰＬ18　出土土器(9)…… 127
ＰＬ19　出土土器(10)…… 128
ＰＬ20　出土土器(11)…… 129
ＰＬ21　出土土器(12)…… 130
ＰＬ22　出土土器・石器…… 131

第Ⅰ章　遺跡の環境

１．遺跡の位置と立地

鹿角市は北東北のほぼ中央に位置し、北に十和田国立公園、南に八幡平国立公園があり、日本海に注ぐ米代川上流域の花輪盆地を中心とした農業と観光を主産業とする都市である。

鹿角市は、東に岩手県八幡平市、西に大館市、北に小坂町、南に仙北市というように県境並びに市町境を接している。古代から交通の要所となっており、岩手県盛岡市に通じる「鹿角街道」、青森県三戸町に通じる「来満街道」、青森県平川市碇ヶ関に通じる「濁川街道」がある。鹿角市内の主要国道である国道２８２号線は、鹿角街道とほぼ同じ道筋で盛岡まで通じている。また、ＪＲ花輪線は大館駅を基点に、十和田湖への玄関口となっている十和田南駅を通り、岩手県好摩駅との間を結んでいる。

奥羽山脈の懐に抱かれた盆地に発達した鹿角市には、奥羽山脈の四角岳に源を発した米代川、十和田湖外輪山を源とした大湯川やその支流によって形成された舌状台地が多く発達している。

これらの台地上には縄文時代や歴史時代等の416遺跡の所在が確認されており、大湯環状列石は国の代表的な縄文遺跡として昭和31年に「特別史跡」に指定されている。

大湯環状列石は、大湯川と豊真木沢川・根市川の浸食によってつくられた南西方向にのびる

第１図　遺跡位置図(1)

全長5.6km、幅0.5～1.0km、標高185m～144mの中通台地（通称　風張台地）のほぼ中央に位置している。

平成10年度からは史跡環境整備が進められ、遺構や自然環境の復元、縄文文化を学び・体験できる施設「大湯ストーンサークル館」が建設されている。

本年度の発掘調査対象地は史跡北東側、一本木後ロ配石遺構群の北側隣接地にあたり、公有化以後は牧草地となっている。

鹿角市は707.34km²の面積を有し、人口37,433人（2005年11月末）である。

2　周辺の地形と地質

周辺の地形と地質については、鹿角市文化財調査資料85『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書㉒』を参考に、その概要を述べる。

鹿角市内の地形

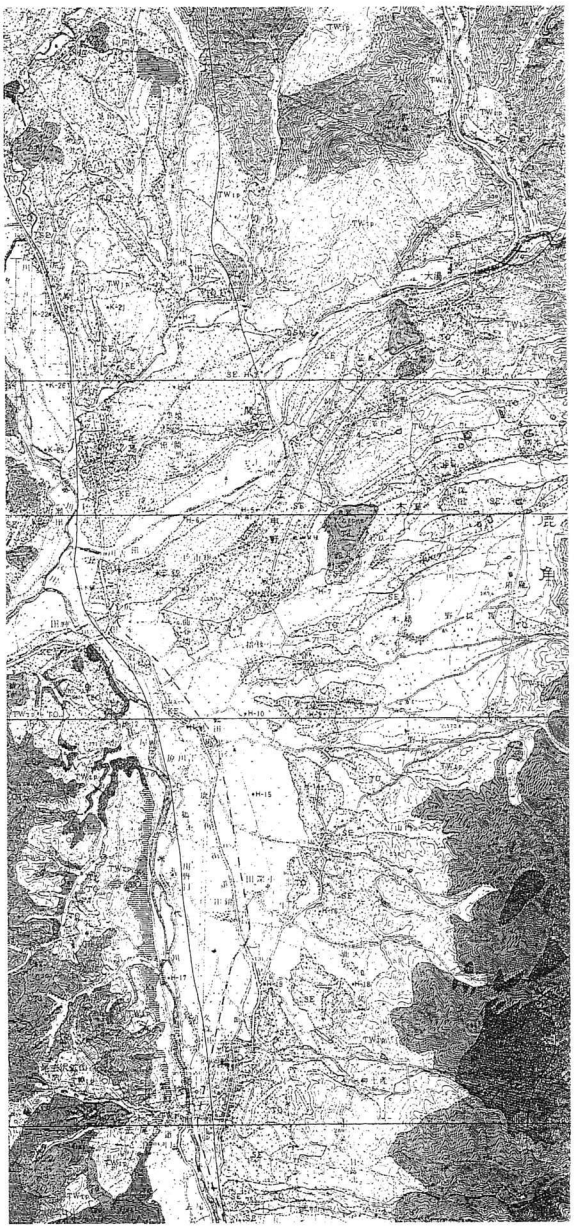
鹿角市内の地形は、東西の山地、盆地内の段丘地形及び沖積低地より構成されている。

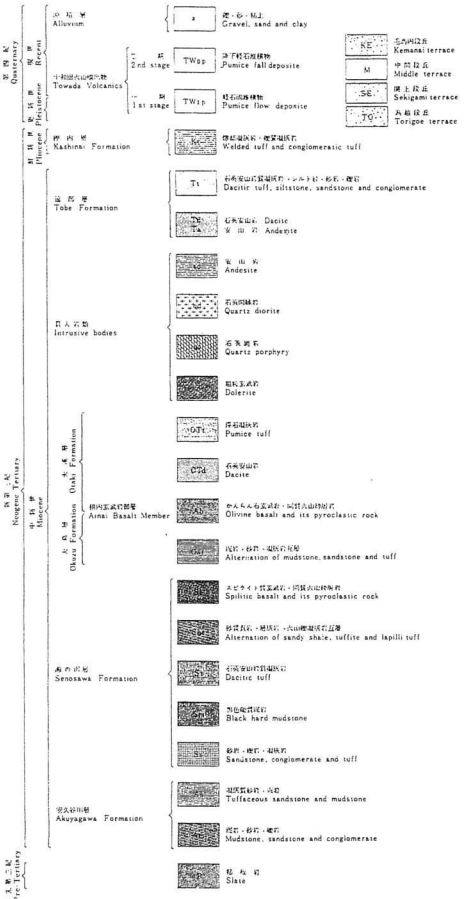
東側に連なる山並は800m～1,100mの標高で、四角岳（1,003m）、皮投岳（1,122m）、五ノ宮嶽（1,115m）等を中心とする急峻な壮年期の山である。地質は下位より安久谷川層、瀬の沢層、大葛層、遠部層等の新第３紀の堆積岩類や火山岩類より構成されている。

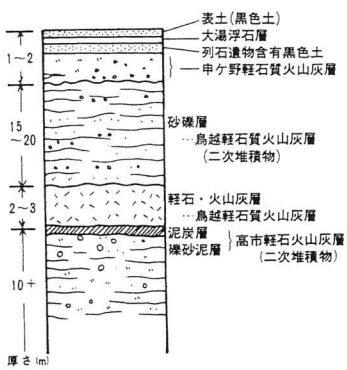
一方、西側の山地は、標高400m～600m程の丘陵性の穏やかな山並で、東側山脈と同様、下位より新第３紀中新世の大葛層、大滝層、遠部層、樫内層で構成されている。

鹿角盆地は、東の奥羽山脈、西の高森山地に囲まれ、大小の河川によってつくられた台地・段丘とともに低地がいたるところにみられる。特に鹿角市北部には十和田火山由来のシラス台地が分布し、東部や南部は奥羽山脈を源とする河川によって形成された扇状地地形が特徴的である。

盆地内の段丘は４段に分けられる。最高位の面は浦志内川や歌内川等が盆地に注ぐ付近に扇状地状にみられる面で、標高270m～330mと傾斜がやや険しい。かなり解析され、主に河成の亜角礫～角礫からなり、風化が著しい。２段目は標高180m～250mで、南部では扇状地状の地形を残すものの、大里地区以北では厚い火砕流堆積物に覆われ、「関上面」・「鳥越面」と呼ばれ、盆地内ほぼ全域に分布している。３段目は標高180m～250mで、主に米代川左岸に沿って尾去沢から松館・荒町にかけて分布している。「松館面」と呼ばれており、夜明島川、黒沢川等による扇状地の解析された面と考えられている。４段目は米代川右岸沿いに大里付近まで分布する面で「大里面」と呼ばれている。標高は150m～155mと低く、上部は砂礫層を主体としている。




Alluvium
Gravel, sand and clay
Towada Volcanics
2nd stage
1st stage
Pumice fall deposite
Pumice flow deposite
Kemanai terrace
Middle terrace
Sekigami terrace
Torigoe terrace
Kashinai Formation
Welded tuff and conglomeratic tuff
Tobe Formation
Dacitic tuff, siltstone, sandstone and conglomerate
Dacite
Andesite
Intrusive bodies
Quartz diorite
Quartz porphyry
Dolerite
Pumice tuff
Dacite
Ohzaki Formation
Ohzu Formation
Ainai Basalt Member
Olivine basalt and its pyroclastic rock
Alternation of mudstone, sandstone and tuff
Spilitic basalt and its pyroclastic rock
Alternation of sandy shale, tuffite and lapilli tuff
Senosawa Formation
Dacitic tuff
Black hard mudstone
Sandstone, conglomerate and tuff
Akuyagawa Formation
Tuffaceous sandstone and mudstone
Mudstone, sandstone and conglomerate
Slate
Quaternary
Neogene Tertiary
Pre-Tertiary


表土(黒色土)
大湯浮石層
列石遺物含有黒色土
申ケ野軽石質火山灰層
1～2
砂礫層
…鳥越軽石質火山灰層
(二次堆積物)
15
～20
軽石・火山灰層
…鳥越軽石質火山灰層
2～3
泥炭層
礫砂泥層
高市軽石火山灰層
(二次堆積物)
10＋
厚さ(m)

第２図　鹿角市の地質図

沖積低地は標高100m～120mで、主に砂礫層からなり、花輪や毛馬内の市街地がのる。

発掘調査周辺の地質は大きく分けて、４枚の火山灰層から構成される。最下部は高市軽石質火山灰（25,850±1,360）の二次堆積物で、軽石や砂礫から構成され、地層中に平行ラミナやクロスラミナが発達している。この上に薄い泥炭をはさんで、厚さ２m～３mの鳥越軽石質火山灰層（12,000±250）が重なっている。さらにこの上に水の作用によって堆積した鳥越軽石質火山灰層の二次堆積物である軽石質段丘砂礫層がのる。この層の上に風化の進んだ大形の軽石質軽石礫を含む申ヶ野軽石質火山灰層（8,680±130）が重なっている。

最上部は黒色土層で、黒色土と黒色土の間に十和田ａ降下火山灰層（大湯浮石層）がみられる。

十和田ａ降下火山灰の降下時期については、これまでの発掘調査例から平安時代中頃、10世紀前半とされていたが、滋賀県比叡山延暦寺の僧侶が残した『扶桑略記』の記事から、この降下（噴火）時期は延喜15年（915年）７月とも言われている。噴火とともに発生した火砕流（毛馬内火砕流）は大湯川・米代川を下り、大館地区・鷹巣地区では家屋（北秋田市　胡桃館遺跡）を飲み込みながら、能代平野まで達している。

史跡周辺の地形

史跡は大湯川と豊真木沢川・根市川の浸食作用によって形成された舌状台地で、大湯市街地南側後方から全長5.6km、幅0.5～1.0kmで南西方向に延びている。

台地の北側・南側とも河川の浸食によって形成されたものと考えられるが、異なる様相を呈している。史跡の北側斜面を踏査したところ平場13ヶ所、湧水５ヶ所を確認した。台地上面から大湯川までは比高差30mを測る。平場は概ね三段の高さに区分され、最も大きな平場は斜面中程にあり長さ180m×幅14m～40mを測る。湧水は万座環状列石の北西側に入り込んだ沢の水量が多く、以前はポンプを設置して農業用水（撒布用）として使用されていた。

一方、台地南側からは平場８ヶ所、湧水８ヶ所を確認している。台地上面から豊真木沢川までは比高差25mを測る。平場は斜面下方に見られ、北側斜面に見られるものと比較するとその規模は極めて小さい。湧水地点は北側と比べ地点的には多いが湧水量は極めて少ない。

３　周辺の遺跡

鹿角市は県内でも屈指の遺跡の宝庫として知られており、縄文時代から近世にいたる各時代・各時期の遺跡が416ヶ所も所在する。遺跡の内訳は縄文時代から平安時代の単独・複合遺跡349ヶ所、中世の館跡61ヶ所、近世の城郭関係・一里塚３ヶ所、その他３ヶ所となっている。

これらの遺跡は、米代川や大湯川等の大小の河川によって形成された舌状台地上に分布して

第１表　発掘調査の経過と成果

年	調査箇所	調査面積	調査の成果	主要文献
昭和 ５９年	史跡北東側（Ａ１区）	1,825 ㎡	配石遺構９基を検出、配石下に土坑が伴うことが判明石材の原産地を確認する	『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書（1）』1985 年３月
６０年	史跡の北東側（Ａ２区） 野中堂東側隣接地（B１区）	1,870 ㎡	新たに 15 基の配石を検出、計２４基となる。 ２基の配石下よりカメ棺を検出	『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書（2）』1986 年３月
６１年	史跡の北東側（Ａ３区） 万座の東側（C１区）	2,039 ㎡	新たに配石を検出。計 43 基となる。これらは二重の弧状に配置されることを確認	『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書（3）』1987 年３月
６２年	万座の北西側隣接地（D1 区） 史跡の北東側（Ｅ１区）	2,347 ㎡	Ｄ１区より建物跡 19 棟、環状配石遺構３基、平地式の建物跡１棟を検出。列石周囲には規則的に遺構が分布することが確認された	『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書（4）』1988 年３月
６３年	万座の西側隣接地（Ｄ２区）	1,576 ㎡	建物跡 11 棟、フラスコ状土坑 25 基等を検出。列石周囲には規則的に遺構が分布することが確認された	『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書（5）』1989 年３月
平成 元年	史跡の北北西側台地縁（Ｆ１区） 万座の北東側（Ｅ４区）	1,648 ㎡	Ｆ１区より竪穴住居跡、建物跡４棟を検出 竪穴住居の存在が始めて確認される	『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書（6）』1990 年３月
２年	万座の北北東側（Ｆ２区）	2,810 ㎡	竪穴住居跡１棟、Ｔピット 13 基を検出。竪穴住居群の東端が確認される	『大湯環状列石発掘調査報告書（7）』1991 年３月
３年	万座の南側（Ｇ２区）	1,519 ㎡	昭和 38 年・39 年に存在が知られていた配石遺構を確認。	『大湯環状列石発掘調査報告書（8）』1992 年３月
４年	万座の北西側（Ｄ５区） 万座の北西側（Ｆ３区）	2,736 ㎡	環状配石遺構２基を検出、広範囲に広がることを確認する	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（9）』1993 年３月
５年	万座の北西側隣接地 （Ｄ３区・Ｄ４区）	3,180 ㎡	建物跡、配石列（出入口）を検出。列石周囲には規則的に遺構が分布することが再確認された	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（10）』1994 年３月
６年	万座の東側隣接地（Ｄ６区）	2,656 ㎡	建物跡、フラスコ状土坑等を検出。列石周囲には規則的に遺構が分布することが確認なった。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（11）』1995 年３月
	史跡の北東側の指定地外	1,520 ㎡	土坑３基、Ｔピット２基を検出。史跡指定地外にも遺構が分布することが確認された	『出土文化財管理センター建設事業に伴う発掘調査報告書』
７年	万座の南東側隣接地（Ｄ７区）	3,176 ㎡	建物跡、フラスコ状土坑等を検出。列石周囲には規則的に遺構が分布することが確定的となった	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（12）』1996 年３月
８年	万座の北西側（Ｆ４区）	3,878 ㎡	弧状に配置された建物跡、大規模な環状配石遺構を検出する	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（13）』1997 年３月
９年	史跡の北端（Ｆ５区）	3,410 ㎡	列石と関連のある遺構の広がり（北端部）を検出する 円形周溝墓６基を検出する	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（14）』1998 年３月
１０年	万座の南側隣接地（D８区） 万座の南側（Ｇ２区） 万座の北西端（Ｆ６区）	4,503 ㎡	D8 区の調査によって建物跡、フラスコ状土坑等を検出。列石周囲には規則的に遺構が分布することが確定された	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（15）』1999 年３月
１１年	万座環状列石（D 区） 野中堂の周辺地域（B 区）	3,910 ㎡	野中堂環状列石を中心に広範囲に遺構が分布することが確認された	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（16）』2000 年３月
１２年	野中堂の南西側隣接地（B2 区）	2,745 ㎡	建物跡、フラスコ状土坑等多数検出。万座環状列石と同形態を示すことが確認された	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（17）』2001 年３月
	史跡の北東側の指定地外	931 ㎡	フラスコ状土坑を検出。史跡指定地外にも遺構が分布することが確認された	『仮称体験学習館建設事業に伴う発掘調査報告書』2001 年３月
１３年	野中堂の南側隣接地（B3 区） 野中堂の南側（B4 区）	663 ㎡	Ｂ３区より列石とほぼ同時期の竪穴住居を検出。Ｂ４区からはカメ棺を伴う配石遺構が検出され、野中堂と関連のある遺構が広範囲に分布することが確認された	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（18）』1993 年３月
１４年	万座の西側台地縁（D9 区） 万座の南西側（Ｇ３区）	1,545 ㎡	Ｄ９区より列石と関連が非常に強い竪穴住居跡８棟を検出	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（19）』1993 年３月
１５年	万座の西側台地縁（Ｇ４区）	1,485 ㎡	Ｄ９区で検出された竪穴住居の南側の広がりを確認	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（20）』2002 年３月
16 年度	万座の南西側台地縁（G5 区）	770 ㎡	土坑・焼土遺構等を確認。史跡主要部から離れるにしたがって遺構の分布が薄くなることを確認。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（21）』2003 年３月
17 年度	一本木後ロ地区（A4 区・ A5 区）	1,547 ㎡	一本木後ロ配石遺構群の南側を調査。新たに 13 基の配石を確認、二つの配石群となる可能性を示唆	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（22）』2006 年３月

おり、特に盆地東側の台地の密集度は高い。

第３図は、中通台地周辺の遺跡分布図である。表記した遺跡はこれまでに発掘調査が実施されたものを抽出したものであり、それ以外の遺跡は表記していない。時代・時期順に表記した遺跡の特徴をまとめる。

図面上で最も古い時期の遺跡は、物見坂Ⅲ遺跡（№12・№13）である。№12は平成13年度、秋田県教育委員会により、№13は平成16年度に鹿角市教育委員会によって発掘調査が実施されている。遺跡名は同じであるが地形的な要素から本来は二つの遺跡に区分されるべきものと考えられる。秋田県教委の発掘調査によって、縄文時代早期の土器の様相が明らかにされ、鹿角市教委の調査によって市内ではじめ早期の竪穴住居１棟、土坑38基が発見され、市内の最も古い集落の様子が明らかにされた。

縄文時代前期・中期を中心として営まれた遺跡は図面内に所在しない。どちらかというと鹿角市中央部や南部に所在し、代表的な遺跡は清水向遺跡、天戸森遺跡で、いずれも集落跡である。清水向遺跡では円筒下層ｄ式時期の住居２棟、天戸森遺跡からは円筒上層ｅ式～大木８・９式～中の平Ⅲ式期の住居が140棟も発見されている。

後期に至ると大規模な遺跡は減少するが、市内各地に分布するようになる。最も代表的な遺跡が特別史跡大湯環状列石であり、その周辺には環状列石と関連が強いと考えられる下内野Ⅲ遺跡（№１）、小清水遺跡（№３）がある。さらには米代川を挟んだ高屋集落の後方台地上には高屋館跡の環状列石が所在している。

特別史跡大湯環状列石は、昭和６年の発見以来、調査と研究が継続されている。昭和26年・27年の文化財保護委員会の発掘調査を経て昭和26年には史跡に、昭和31年には特別史跡に指定された。その後昭和48年～51年にかけて秋田県教育委員会、鹿角市教育委員会によって周辺遺跡の調査が行われ、環状列石と直接又は間接的に関連する遺跡の範囲が把握された。昭和59年からは鹿角市教育委員会が主体となり調査を行っており、現在も継続調査している。発掘調査と平行し、指定地の追加指定事務を行うとともに、平成３年度からは指定地の公有化を進め、全体の約91％の公有化が完了している。さらに平成10年度には文化庁の地方拠点地域史跡整備事業に採択された。史跡が余りにも広大であることから第Ⅰ期から第Ⅳ期（Ⅰ期は５ヶ年）に分けて行うこととし、10年度から第Ⅰ期環境整備、15年度から第Ⅱ期環境整備を行っている。第Ⅰ期の主な整備内容は万座・野中堂環状列石を中心に環状列石の保存処理、遺構や自然環境の復元、仮称体験学習館（現　大湯ストーンサークル館）建設を、第Ⅱ期では万座環状列石西側地区の遺構と自然環境の復元を行っている。

また、平成17年９月26日、文化庁が「世界遺産暫定リスト一覧表」への登載遺産を各自治体に公募したことから、秋田県・北秋田市の共同提案として大湯環状列石と伊勢堂岱遺跡を「ス

トーンサークル」として提案書を提出した。その結果平成18年１月23日、文化庁発表において「北東北３県・北海道の縄文遺跡を一体として提案する」ようにとの指摘があり、初年度の暫定リスト登録は見送られた。

大湯環状列石周辺には環状列石との関連が注目される遺跡がある。同じ台地上に位置する小清水遺跡（№３）、大湯川を隔てた下内野Ⅲ遺跡である。両遺跡とも環状列石を構築する石材である石英閃緑玢岩が多数露頭しており、配石遺構群又は環状列石の存在が予想される。

また、高屋館跡の環状列石は平成元年に秋田県教委によって発掘調査され、直径約34mの環状列石とそれを取り囲み規則的な配置を示す26棟の掘立柱建物が発見されている。

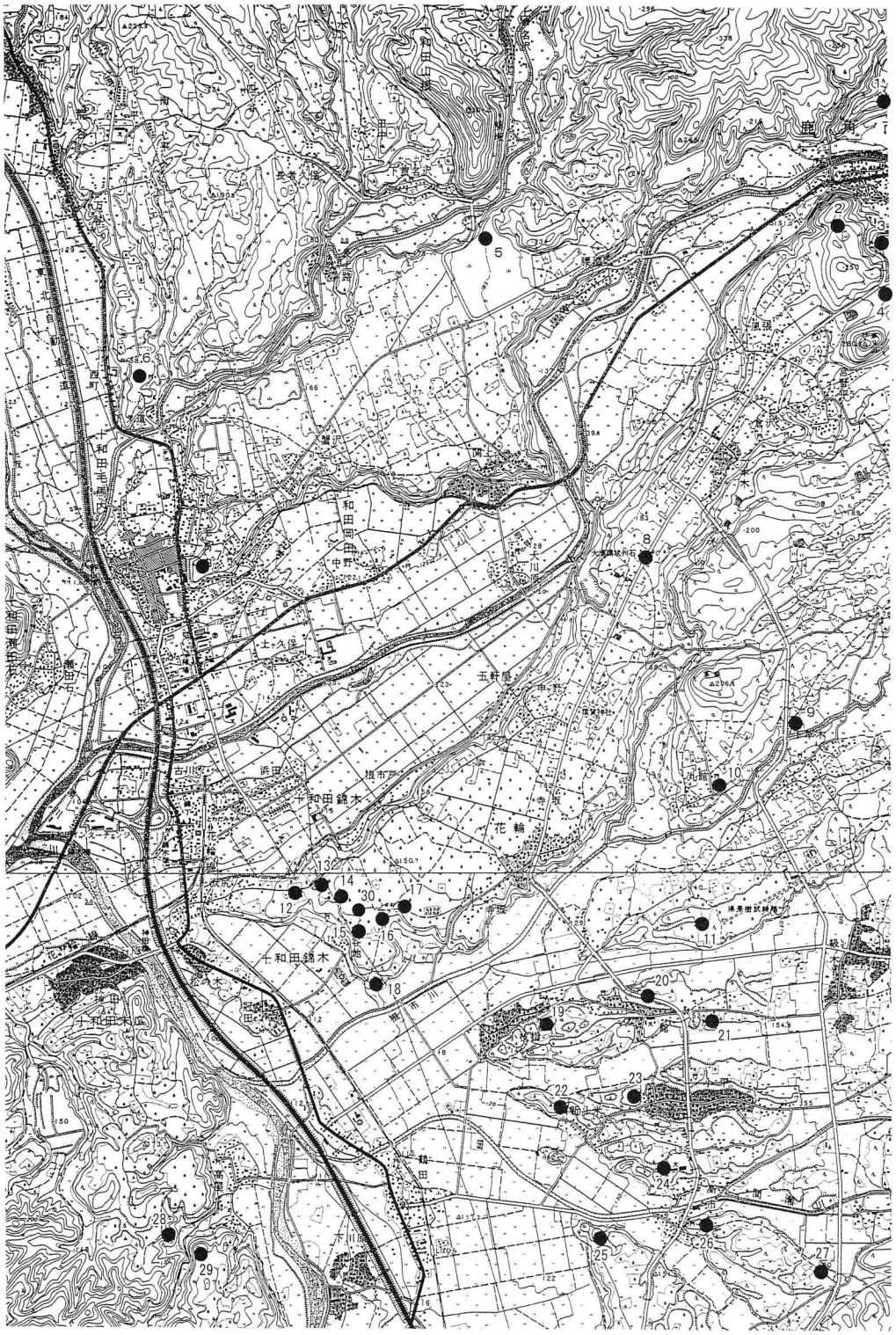
後期末葉から晩期の遺跡として草木Ａ遺跡がある。昭和47年に鹿角広域農道建設に伴い消失する部分の発掘調査が行われた。また、平成18年にはほ場整備事業に伴う範囲確認調査が行われている。この結果、後期末葉から晩期にかけての土器が多量に出土しており、集落の存在を予期できる。

弥生時代の単独遺跡はほとんどなく、発掘調査によって土器片が出土する程度である。最もまとまって遺物が出土した遺跡は物見坂Ⅲ遺跡、物見坂Ⅱ遺跡で小坂Ｘ式土器が出土している。

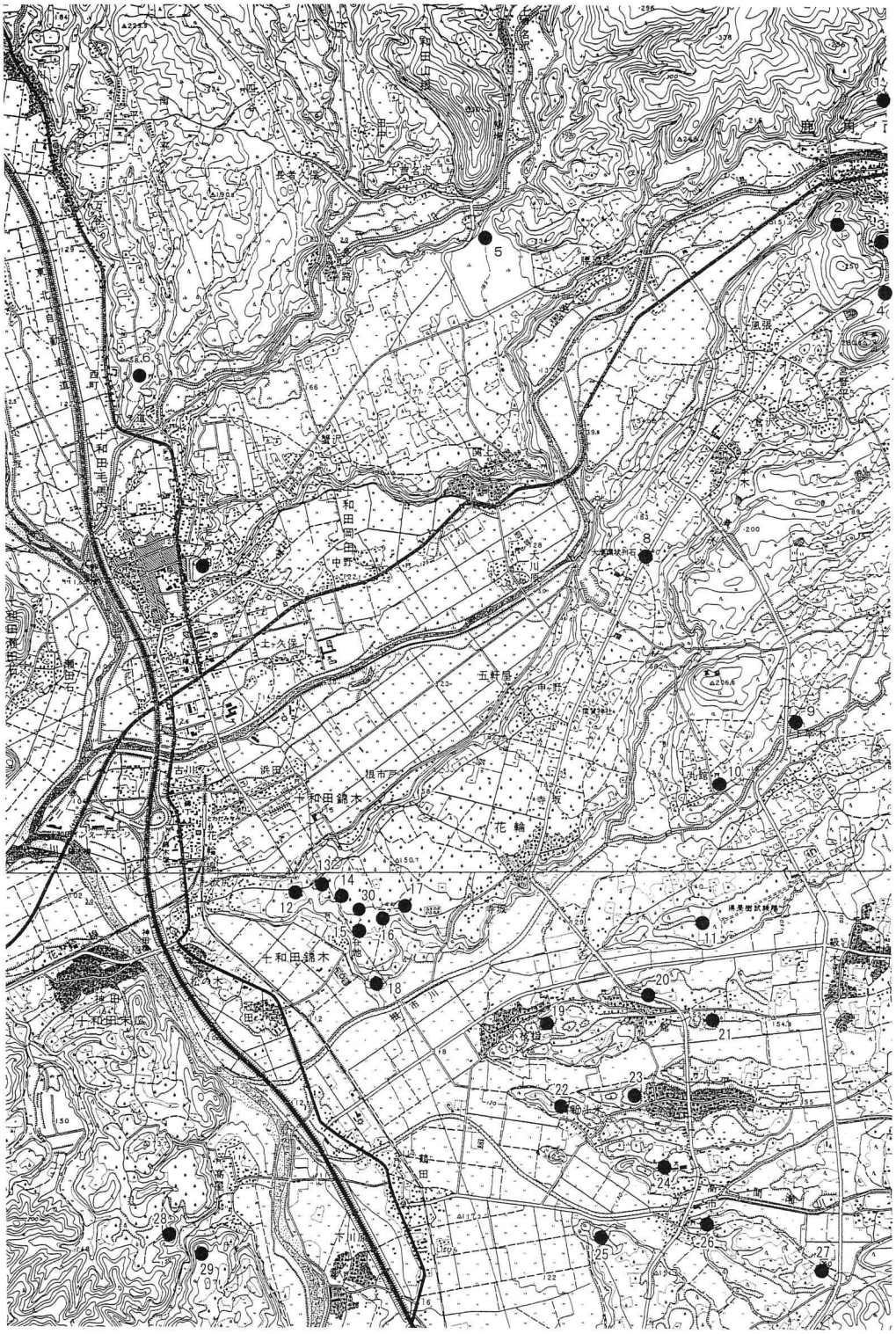
奈良時代の遺跡は鹿角市北部に集中している傾向にあり、本地域では物見坂Ⅲ遺跡（№13）、小枝枝館跡（№19）、源田平遺跡（№21）がこれに当たる。竪穴住居とともに丸底の土師器坏、頸部に段を有する長胴の土師器甕が出土している。

平安時代に入ると遺跡の数は爆発的に多くなり市内全域に分布する。そのほとんどは集落であるが、本遺跡ののる台地では集落とともに円墳が造られるようになる。平成16年度に調査を実施した物見坂Ⅱ遺跡では４基の円墳とともに蕨手刀２本、銙帯金具が発見された。また、以前から知られていた枯草坂古墳（枯草坂Ⅰ遺跡　№18）は台地の南側斜面中段に所在する。勾玉やガラス玉が出土しており、東京上野博物館、秋田県立博物館、大湯ストーンサークル館で公開展示されている。また、鹿角市史に紹介されている泉森出土の鉄剣は記載文書を詳細に読み解くと、鹿角沢Ⅱ遺跡の南西側の台地縁に所在する泉森Ⅰ遺跡であることが分かる。泉森は「蝦夷森」がなまって泉森に変化したものと考えられることから、鹿角市北半にはエミシ・蝦夷と関連した多くの遺跡がまだ地中に眠っているものと判断される。

中世に入ると鹿角地区には多くの館跡が構築される。中世の館跡は、台地の先端を空堀で区切った多郭連続式の形態が特徴となっている。承久の乱後、関東武士団に恩賞として鹿角の土地が与えられ、彼らがこの地を支配するために築いた城館である。館跡に隣接して集落が発達し「一館一村」の形態をとっている。小枝指館跡（№19）は昭和30年東京大学東洋文化研究所によって、平成３年鹿角市教育委員会によって発掘調査が行われ、それぞれの調査によって「館は桃山時代まで存続していたこと」、「館構築の際の残土を利用し、館南側の湿地を埋め立て平


和田岡田
中野
五軒屋
浜田
十和田錦木
花輪
十和田錦木
十和田市
高屋敷
大川原
5
6
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

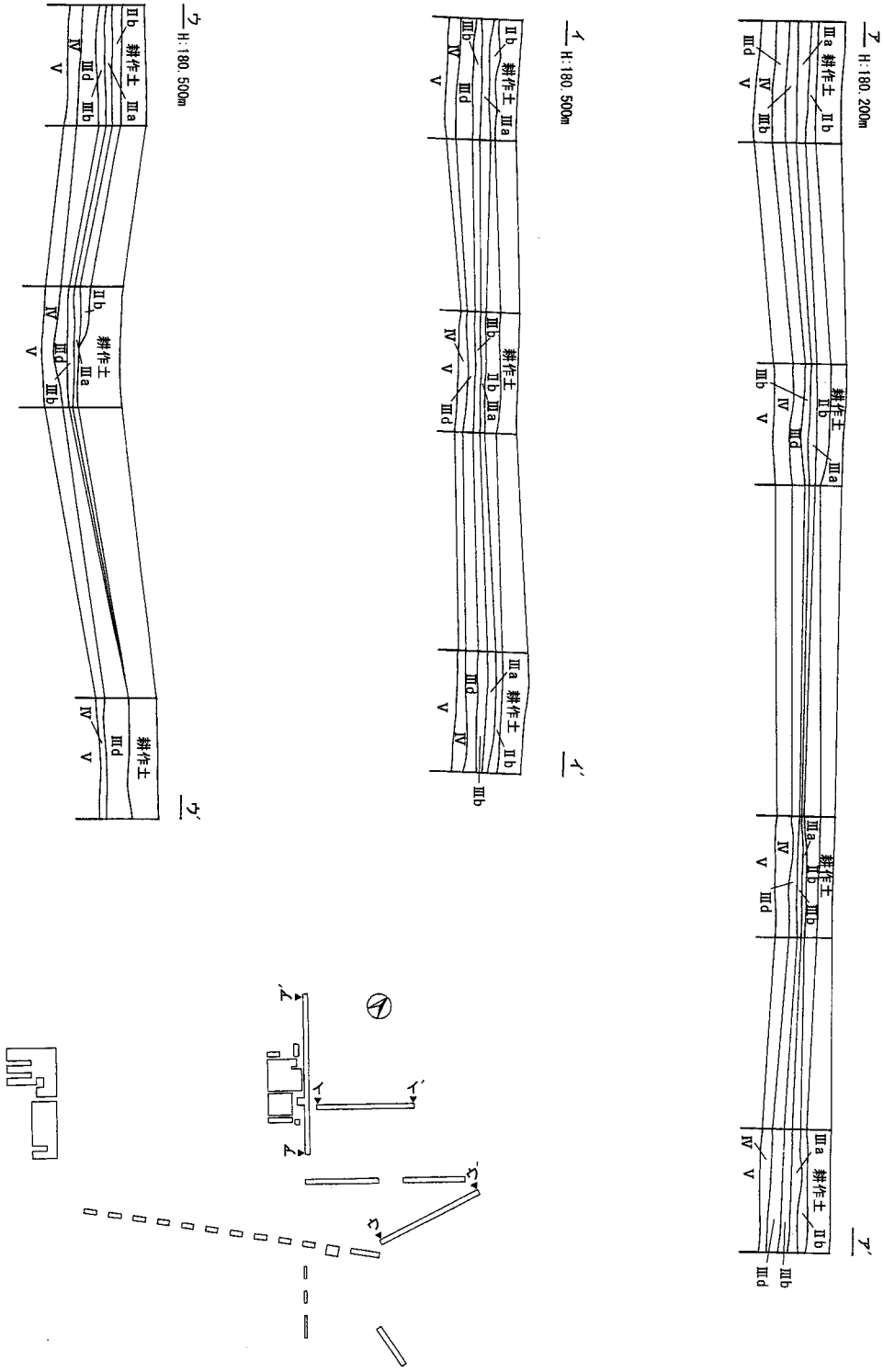
第３図　周辺の遺跡


和田岡田
中野
五軒屋
浜田
和田錦木
花輪
寺坂
十和田錦木
十和田木瓜
高屋敷
2
4
5
6
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

第３図　周辺の遺跡

第２表　周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	遺跡の種別	遺構と遺物	時期	収録報告書・備考
1	下内野Ⅲ	鹿角市十和田大湯字下内野	配石遺構群	配石遺構	縄文後期	鹿角市 77　『特別史跡大湯環状列石（Ⅰ）』　2005 年
2	鹿倉館跡	十和田大湯字古館	館跡		中世	鹿角市 25　『鹿角の館（3）鹿倉館跡』1984 年
3	小清水	十和田大湯字越水	配石遺構群	配石遺構	縄文後期	鹿角市 77　『特別史跡大湯環状列石（Ⅰ）』　2005 年
4	在郷坂一里塚	十和田大湯字和町	一里塚	一里塚	近世	鹿角市 55　『鹿角市の文化財』　1996 年
5	下砂沢	十和田山根字上ノ平	配石遺構	配石遺構	縄文後期	鹿角市 40　『下砂沢遺跡発掘調査報告書』1990 年
6	当麻館跡	十和田毛馬内字古館	館跡・集落	竪穴遺構・館跡	中世・近世	鹿角市 37　『当麻館跡発掘調査報告書』1989 年
7	柏崎館跡	十和田毛馬内字柏崎	館跡	館跡・土坑	中世・近世	鹿角市 36　『柏崎館跡発掘調査報告書』1989 年
8	大湯環状列石	十和田大湯字万座	環状列石	環状列石ほか	縄文後期	鹿角市 77　『特別史跡大湯環状列石（Ⅰ）』　2005 年
9	草木Ａ	十和田草木字小坂	遺物包含地	土器	縄文後期	秋田県 35　『鹿角大規模農道発掘調査略報』　1975 年
10	丸館Ⅳ	十和田草木字丸館	遺物包含地	土器	縄文	
11	一ツ森館跡	花輪字一ツ森	館跡	館跡	中世	鹿角市 30　『鹿角の館（5）一ツ森館跡』1986 年
12	物見坂Ⅲ	十和田錦木字物見坂	集落	竪穴住居・土坑	縄文早期・平安	秋田県 354　『物見坂Ⅲ遺跡』　2003 年
13	物見坂Ⅲ	十和田錦木字物見坂	集落	竪穴住居・土坑	縄文早期	鹿角市 79　『物見坂Ⅲ・物見坂Ⅱ（1）』鹿角市 2005 年
14	物見坂Ⅱ	十和田錦木字物見坂	集落	竪穴住居	平安	
15	泉森Ⅰ	十和田錦木字泉森	集落・古墳	直刀	平安	鹿角市　『鹿角市史　Ⅰ』　1982 年
16	泉森Ⅱ	十和田錦木字泉森	集落		平安	
17	鹿角沢Ⅱ	十和田花輪字鹿角沢	集落	竪穴住居	平安	本報告書
18	枯草坂Ⅰ	十和田錦木字枯草坂	古墳群	古墳・勾玉	奈良末期	奈良修介　『秋田県の考古学』1964 年　吉川弘文館
19	小枝指館跡	花輪字平元古館	館跡・集落	竪穴住居・館跡	奈良・中世	鹿角市 44　『小枝指館跡発掘調査報告書』1992 年
20	鳥野	花輪字鳥野	集落	竪穴住居	平安	秋田県 49　『鳥野遺跡発掘調査報告書』1978 年
21	源田平Ⅳ	花輪字源田平	集落	竪穴住居	奈良末期	秋田県 49　『鳥野遺跡発掘調査報告書』1978 年に収録
22	新斗米館跡	花輪字新斗米	館跡・集落	竪穴住居・館跡	平安・中世	鹿角市 14　『新斗米館跡第Ⅰ次発掘調査報告書』1980 年
23	小平館跡	花輪字下モ館	館跡・集落	竪穴住居・館跡	平安・中世	鹿角市 30　『鹿角の館（5）小平館跡』1986 年
24	高市向館跡	花輪字高市向	館跡・集落	竪穴住居・館跡	平安・中世	鹿角市 22　『高市向館跡発掘調査報告書』　1982 年
25	万谷野館跡	花輪字万谷野	館跡	館跡	中世	鹿角市 30　『鹿角の館（5）万谷野館跡』1986 年
26	高市館跡	花輪字高市	館跡	館跡	中世	鹿角市 30　『鹿角の館（5）高市館跡』1986 年
27	餅野Ⅵ	花輪字餅野	集落	竪穴住居	平安	十和田高等学校『山脈 21』1973 年
28	太田谷地館跡	花輪字太田谷地	集落・館跡	竪穴住居・館跡	平安・中世	秋田県 172 集　『太田谷地館跡』1988 年
29	高屋館跡	花輪字館ノ沢	環状列石・館跡	環状列石・館跡	縄文後期・中世	秋田県 198 集　『高屋館跡』1990 年
30	物見坂Ⅰ	十和田錦木字物見坂	古墳群	古墳	平安	鹿角市 86　『物見坂Ⅱ（2）・物見坂Ⅰ』2006 年



第４図　基本層序図

場を作り出していたこと」などが分かっている。

江戸時代に入ると政情も安定し、柏崎館跡（№６）に毛馬内通代官所、花輪館跡（花輪小学校）に花輪通代官所が置かれる。毛馬内地区は鹿角街道（大館市田代～毛馬内～花輪～岩手県盛岡市）・濁川街道（毛馬内～青森県碇ヶ関）・来満街道（毛馬内～大湯～青森県八戸市）が交差する交通の要所でもあった。

（藤井安正）

４　遺跡の層序

ここでは、表土から申ヶ野軽石質火山灰層と考えられる黄褐色火山灰層までについて記載する。それ以下の地層については先に述べたとおりである。

第Ⅰ層は大湯浮石層までの堆積層で、暗褐色土である。そのほとんどが耕作土で、植物根の混入が見られる。

第Ⅱ層はにぶい黄橙色や明黄褐色の浮石層で、十和田ａ降下火山灰である。約1,000年前の十和田湖の噴火によって噴き上げられた降下軽石と考えられている。本層は、浮石粒の大きさや色調などから２層（Ⅱａ、Ⅱｂ）に分層できる。

第Ⅲ層は十和田ａ降下火山灰から地山直上の暗褐色土（Ⅳ層）までの黒色または黒褐色の土層である。色調や堅さなどから４層（Ⅲａ～Ⅲｄ）に細分される。

第Ⅳ層は地山直上（下位火山灰）の層で、暗褐色でわずかに粘性があり、しまりのある層である。

第Ⅴ層は先に述べたとおり、申ヶ野火山灰層と考えられる黄褐色の火山灰層である。本層は上位に堆積する十和田ａ降下火山灰層に対比していることから「下位火山灰」、あるいは関東ローム層に相当するところからロームと呼ばれているものである。本報告書では、本層を「Ⅴ層」以外に「地山」と表現している。

（三浦貴子）

第Ⅱ章　調査の概要

1．調査要項

1．遺　跡　名　　特別史跡大湯環状列石（遺跡番号123）

2．所　在　地　　秋田県鹿角市十和田字万座、字野中堂、字一本木後ロ

3．史跡指定　　史跡指定年月日　史　跡　指　定　昭和26年12月26日

特別史跡指定　昭和31年８月15日

史跡指定面積　249,833:60㎡

4．調査対象面積　　25,700㎡

5．発掘調査面積　　1,340㎡

6．調査期間　　発　掘　調　査　平成18年８月17日～平成18年12月12日

整理報告書作成　平成18年10月12日～平成19年３月30日

7．調査主体者　　鹿角市教育委員会

8．調査担当者　　鹿角市教育委員会生涯学習課　文化財班長　藤　井　安　正

主　　事　三　浦　貴　子

9．調査参加者　　調査指導　榮　　一　郎

（秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室副主幹）

調　査　員　鎌　田　健　一（秋田県立十和田高等学校　校長）

山　谷　昌　久（鹿角市立八幡平中学校　教諭）

調査補助員　武　田　正　美

作　業　員　兎沢サツ子、柳舘　愛子、関　　イサ、田中美千栄、田中　栄子、成田由紀子、三浦　茂雄、大森　勝次、佐藤　一祐、石川　三郎、黒沢　陸雄、兎沢　優子、兎沢寛馳子、黒沢　珠子、湯瀬　晴子、成田　則子、加賀ユキ子、湯瀬　トキ、黒沢　文子、福島美紀子、田中　辰美、工藤　幸江、大森みどり、三ヶ田さゆり

10．事　務　局　　鹿角市教育委員会生涯学習課

生涯学習課　課　　長　相　馬　田　富

文化財班長　藤　井　安　正

主　　事　田　村　信　仁

主　　事　三　浦　貴　子

11．協力機関等　　文化庁文化財部記念物課、秋田県教育委員会、

秋田県埋蔵文化財センター、秋田県立博物館、
岩手県立博物館、北上市埋蔵文化財センター、

2　調査の目的

昭和48年～51年の分布調査により万座・野中堂環状列石の他に遺構や遺物が広く分布（大湯環状列石周辺遺跡）することが知られていた。鹿角市では広範囲に分布する遺構の形態、性格、構築時期並びに環状列石との関連の解明を主目的に昭和59年度より発掘調査を継続している。昭和59年度から61年度は一本木後ロ配石遺構群、62年度から63年度は万座環状列石の北西～西側隣接地、平成元年度から２年度には同列石の北側台地縁辺部、平成３年度には万座環状列石の南側に所在する配石遺構群の調査を行った。

平成２年３月に周辺遺跡のほとんどが特別史跡に指定されたことから、３年度から追加指定地の公有化を開始、４年３月には「特別史跡大湯環状列石環境整備基本構想」をまとめるに至った。

この「基本構想」を背景に平成４年度からは史跡の環境整備を進めるため、直接的な資料を得る目的で発掘調査を継続した。

環境整備の年次計画を考慮し、第Ⅰ期環境整備計画地である万座環状列石、野中堂環状列石周辺の順に行うことにし、４年から10年には万座環状列石隣接部及び同列石北側地区、11年から13年にかけて野中堂環状列石隣接部の発掘調査を実施した。

平成10年度から14年度には第Ⅰ期環境整備として、万座・野中堂環状列石周辺地域の遺構や自然環境復元、さらに史跡北西側隣接地にガイダンス施設（大湯ストーンサークル館）の建設を行った。

平成14年度からは第Ⅱ期環境整備計画地である史跡西側に調査区を移し、遺構の分布、地形と基本層序の観察を目的に行い、16年度で同計画地内の発掘調査を終了している。

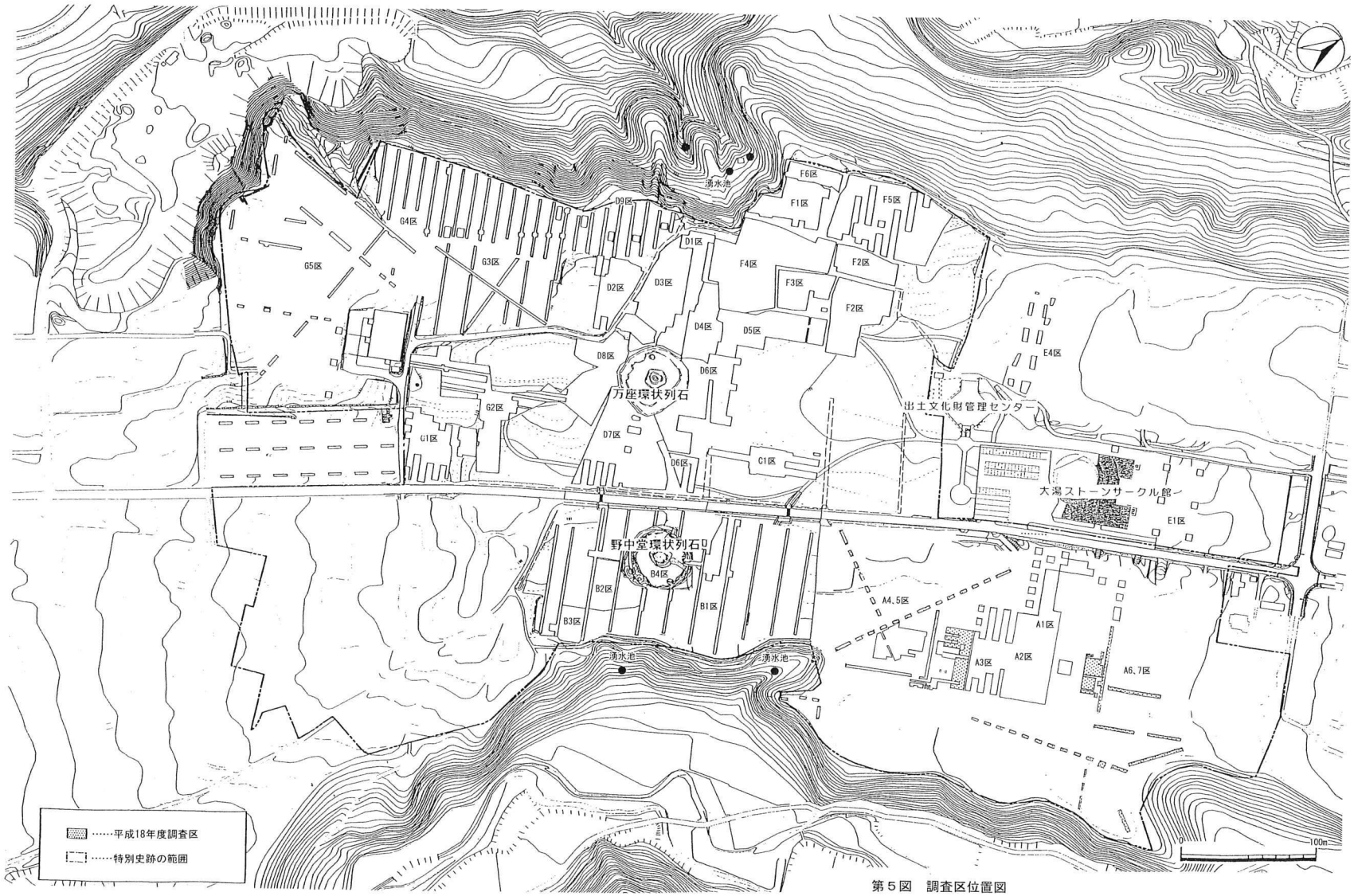
平成17年度からは第Ⅲ期環境整備計画地である史跡東側に調査区を移している。一本木後ロ配石遺構群の広がりとその他の遺構の分布状況、地形と基本層序の確認を目的に17年度には一本木後ロ配石遺構群南側地区、本年度は同遺構群北側の発掘調査を行った。

第１次から第22次発掘調査の成果については、第１表に示した。

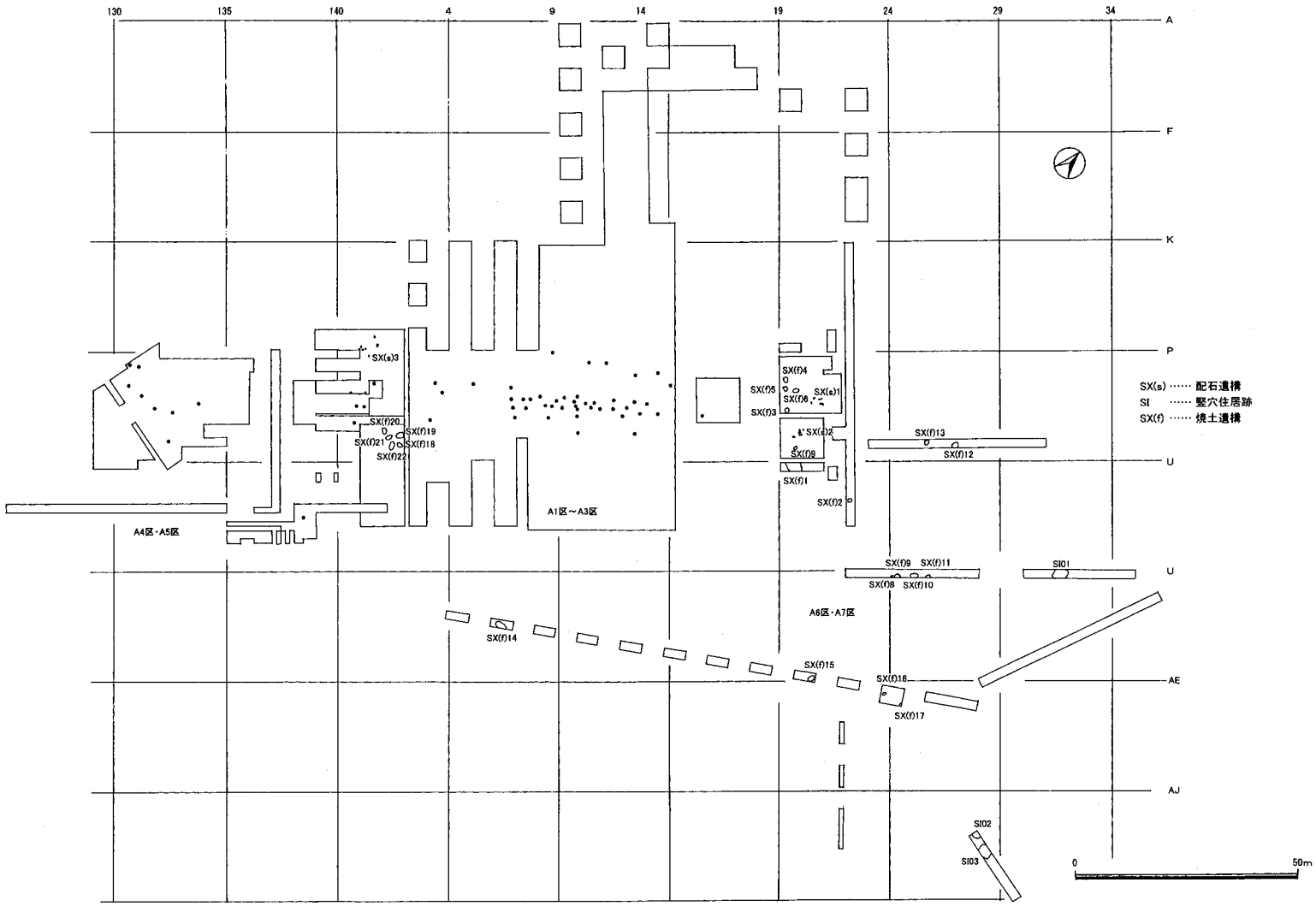
（藤井安正）

3　調査方法

グリッドは、第１次発掘調査以来のグリッドを延長した。Ｎ－49°－Ｗを基準とした５ｍ四方のグリッドとし、グリッドの名称はアルファベッドと算用数字を組み合わせ、西側の杭をもってグリッド名とした。


湧水池
F6区
F1区
F5区
D9区
G4区
D1区
G5区
G3区
F4区
F2区
D2区
D3区
F3区
F2区
D4区
D5区
E4区
D8区
D6区
万座環状列石
出土文化財管理センター
G2区
G1区
D7区
C1区
D6区
大湯ストーンサークル館
E1区
野中堂環状列石
B4区
B2区
B1区
A4,5区
B3区
A1区
A3区
A2区
A6,7区
湧水池
湧水池
100m
……平成18年度調査区
……特別史跡の範囲

第５図　調査区位置図



第６図　トレンチ配置図・遺構配置図

発掘は遺跡の保存を第一に考え、トレンチ方法を基本としたが、必要に応じて拡張することとした。トレンチの設定場所については一本木後ロ配石遺構群の分布状況、地形を考慮したほか、ボーリンク探査（40cmメッシュ）を行い、確実に遺構を捉えるようにした。

表土については重機で除去、Ⅱ層（大湯浮石層：十和田ａ降下火山灰）以下については人力による分層発掘とし、極力上面での遺構確認に努めた。

確認された遺構については発見順・遺構ごとに番号を付したが、精査途中で遺構として認定できなかったものについては欠番とした。

遺構の実測図作成はグリッド杭を利用し、簡易遣り方測量により、縮尺１／10、１／20で図化した。なお、現地で作成した実測図については報告書作成段階で写真や調査員メモをもとに修正を加えて、トレースを行った。

遺物の取り上げについては、出土遺物については出土地点・出土レベル等の記録を取り、取り上げるようにした。

写真撮影については、一眼レフカメラ２台とデジタルカメラを使用し、調査の過程や遺物出土状況等を記録した。

４　調査経過

大湯環状列石第23次発掘調査は平成18年８月17日より開始し、1,340㎡の調査を終了したのは12月12日であった。以下、調査日誌に基づき調査経過の概要を述べる。

８月17日、調査作業員に調査の目的・方法を説明し、事務連絡を行った後、重機により表土除去の終了した西側のトレンチから掘り下げ始める。Ⅱ層以下を層位的に掘り下げ、各層上面での遺構確認を行なった。一本木後ロ配石遺構群の隣接地でトレンチ設定のされていない区域については、40cm間隔にハンドボーリング探査を行い、配石遺構の検出に努めた。昨年度の第22次調査の際もそうであったが、Ⅰ層が厚くて堅い上にⅡ層の残りがよかったため、ボーリグ棒がⅡ層面で阻まれ、下層の石を探査することに非常に苦労した。

調査開始から９月上旬までは雨が多く、作業は難航する。９月８日、ハンドボーリング探査によって石が確認されていた箇所を掘り下げ、配石の一部とみられる石を確認する。検出された地点は一本木後ロ配石遺構群との隣接地にあたる。その後、第１号配石遺構の東側からもう１基の配石遺構が確認された。また、調査区北東側では上面に十和田ａ降下火山灰が堆積した竪穴住居跡が検出された。

10月３日、４日には大湯環状列石環境整備検討委員会が開催され、検出された配石遺構や竪穴住居跡などについて、今後の調査の進め方などのご指導をいただいた。

その後、調査区東側で検出されていた竪穴住居跡の精査を行ったところ、床面から多量の炭

化材が確認された。住居の中央部を中心に壁に向かって放射状に残る状態が確認され、焼失家屋と考えられる。10月は、一本木後ロ配石遺構群との隣接地を中心に石の抜き取り痕の有無を調査すると同時に、昨年度配石遺構が検出された箇所と一本木後ロ配石遺構群との間についても配石遺構の検出に努めた。また、調査区北東端で新たに竪穴住居跡が２軒検出された。

11月に入り、天候が崩れる日が多くなる。調査区北東端で検出された竪穴住居跡の精査を行うとともに、住居跡に隣接する土盛りの調査を行う。調査区北東端については、古い資料に土盛りが多くあったという記述があり、古代の円墳である可能性が考えられたため、土盛りに小トレンチを設定し、調査を行った。

当初の設定よりもトレンチが拡張されたため、重機による埋め戻し日数を考え、11月中旬からは精査・図面作成を行いながら、調査が完了した箇所については人力で埋め戻しを行った。11月末には重機により調査区の大部分を埋め戻すも、配石遺構周辺などの図面が間に合わず、埋め残す。12月に入り、雪が降り始める中、図面作成の後、人力で埋め戻すという必死の作業が続く。

12月12日、現場でのすべての作業を終了し、現場を撤収した。

１月25日、26日には第２回大湯環状列石環境整備検討委員会が開催され、第23次発掘調査の成果について報告を行った。

なお、平成19年１月27日・28日、秋田県埋蔵文化財センター主催の「平成18年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会」で調査成果の一部を紹介したほか、２月３日に開催された大湯ストーンサークル館事業「縄文に学ぶ」において調査成果を発表した。

（三浦貴子）

第Ⅲ章　A6区、A7区検出遺構と出土遺物

1　縄文時代の遺構と遺物

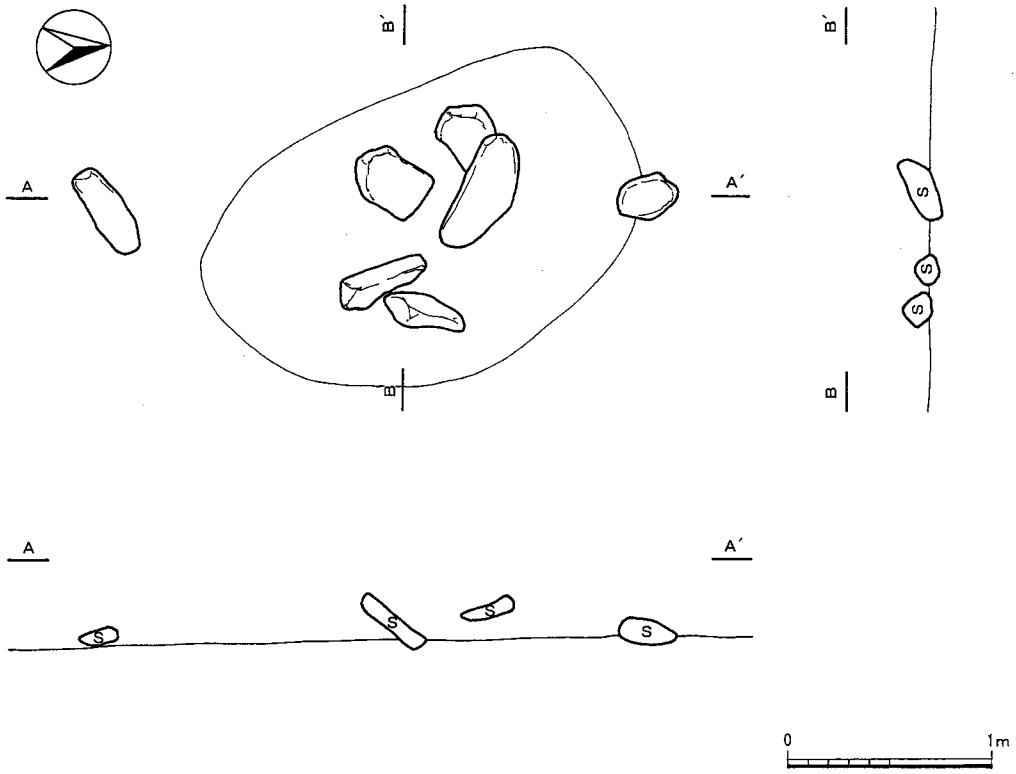
A6区、A7区において、確認された縄文時代の遺構は配石遺構３基、焼土遺構22基である。

(1)　配石遺構

A6区、A7区において、３基の配石遺構が検出された。

第１号配石遺構（第７図）

調査区西側、一本木後ロ配石遺構群との隣接地にあたるＳ－19、20グリッドに位置する。ハンドボーリング探査により、配石の一部を確認し、その後掘り下げてⅢｄ層面において配石全体を確認した。中央で斜めに傾いている２つの石は、もともとは立石であったものが、耕作の際に機械等で動かされたとみられ、ひどく傷ついているようすをみることができる。その他の石は動かされずに残っているが、配石の構成を分類することはできなかった。配石を中心に地山が多量に混じる楕円形のプランが確認され、下部土坑の存在が考えられる。



第７図　第１号配石遺構実測図

周辺から縄文が施文された小破片の土器が出土した。

本遺構の構築時期は、周辺の出土遺物や層位から縄文時代後期と考えられる。

第２号配石遺構（第８図）

調査区西側、一本木後ロ配石遺構群との隣接地にあたるＲ－20グリッドに位置する。

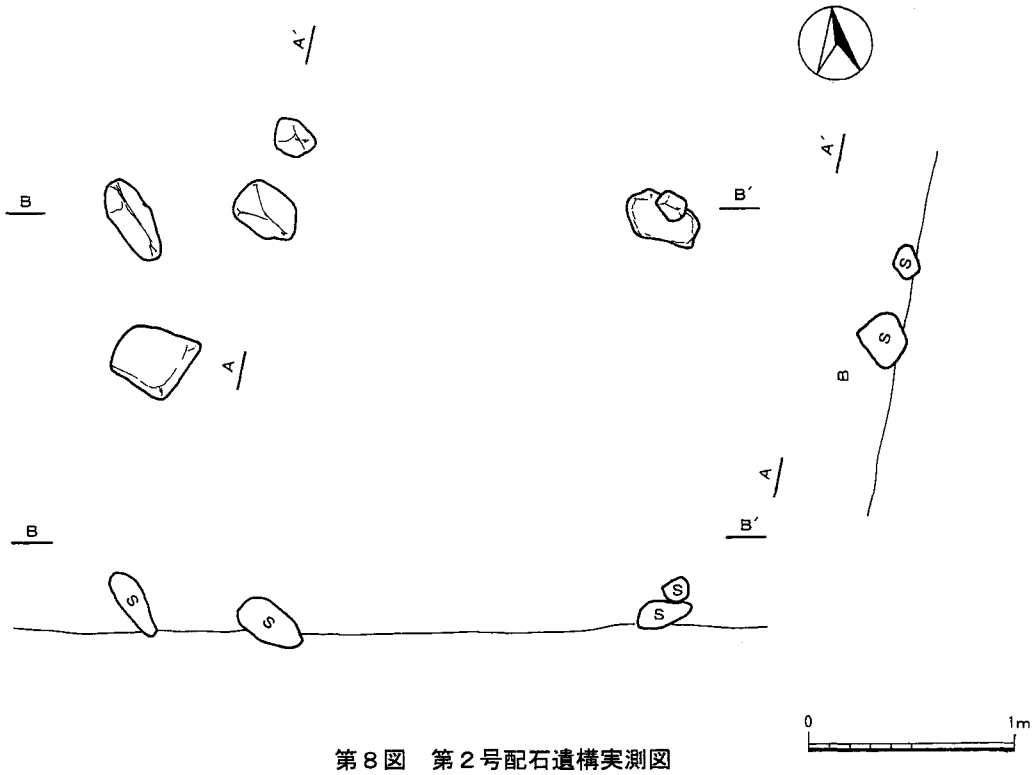
ハンドボーリング探査により一部を確認し、トレンチを拡張することによって全体を確認した。構築層はⅢｄ層面である。南西の２つの石は明らかに動かされており、石の下に十和田ａ降下火山灰が混入しているようがみてとれる。東側の石は動かされてはいないが、配石の構成を確認することはできなかった。抜取痕や下部土坑の痕跡もみることはできなかった。

周辺から縄文が施文された小破片の土器が出土した。

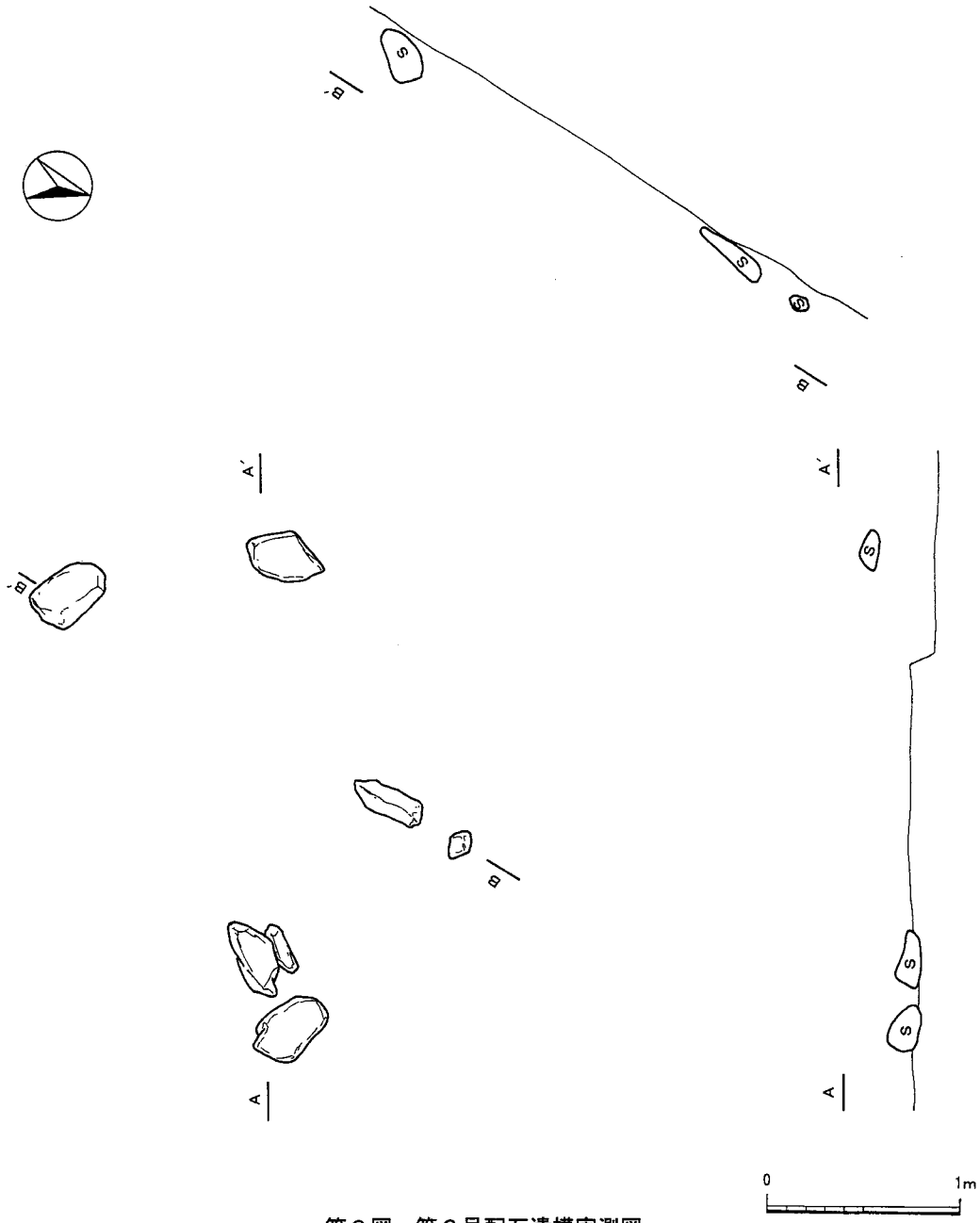
本遺構の構築時期は、周辺の出土遺物や層位から縄文時代後期と考えられる。

第３号配石遺構（第９図）

調査区南西側、昨年度調査区と一本木後ロ配石遺構群との中間地点にあたるＰ－141グリッドに位置する。Ⅱ層面で一部の石を確認し、Ⅲｄ層面で全体を検出した。西側の



第８図　第２号配石遺構実測図



第９図　第３号配石遺構実測図

石は動かされており、石の下に十和田ａ降下火山灰が混入している。その他の石は動かされていないが、配石の構成を確認することはできなかった。動いていない東側の石の間に、地山を多量に含んだ楕円形のプランを確認した。下部の調査は行わなかったため不明であるが、下部土坑または風倒木痕の可能性がある。

周辺から遺物の出土はみられなかったが、本遺構の構築時期は、層位から縄文時代後

期と考えられる。

(2) 焼土遺構

A_6区、A_7区において、22基の焼土遺構が確認された。

第１号焼土遺構（第10図）

調査区西部、Ｕ－19、20グリッドに位置し、Ⅲｂ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は450cm×200cmを測り、焼土は全体に点在し、30cm～44cmを測る。遺物は出土しなかった。

第２号焼土遺構（第10図）

調査区西部、Ｖ－22グリッドに位置し、Ⅲａ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は112cm×78cmを測り、焼土は中央部に位置し、34cm×22cmを測る。遺物は出土しなかった。

第３号焼土遺構（第10図）

調査区西部、Ｒ－19グリッドに位置し、Ⅲｂ層上面～中位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は104cm×82cmを測り、焼土は中央に位置し、82cm×40cmを測る。遺物は出土しなかった。

第４号焼土遺構（第10図）

調査区西部、Ｑ－19グリッドに位置し、Ⅲａ層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は136cm×118cmを測り、焼土は２ヶ所に点在し、60cm×20cmを測る。遺物は出土しなかった。

第５号焼土遺構（第10図）

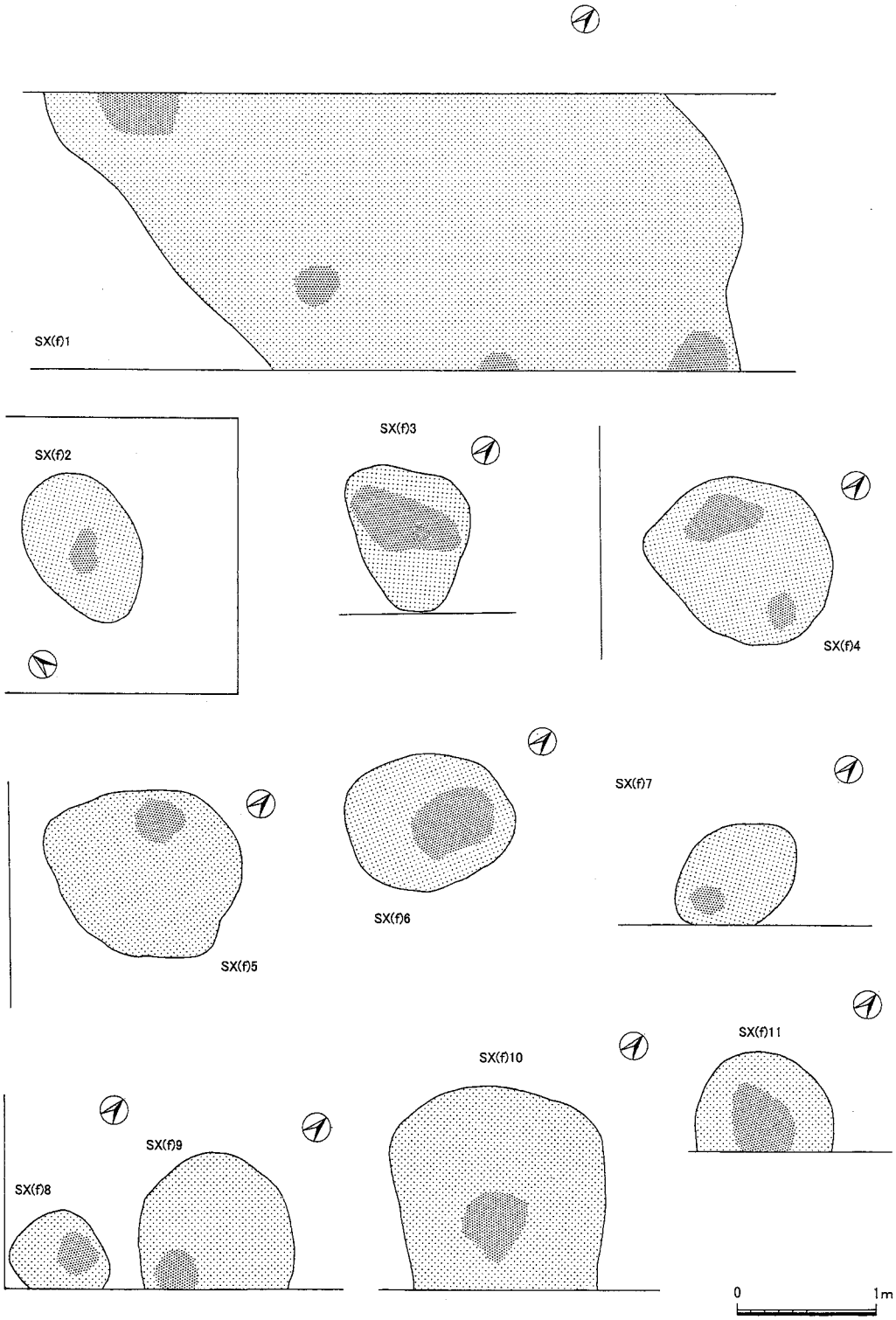
調査区西部、Ｑ－19グリッドに位置し、Ⅲａ層中位～下面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は142cm×120cmを測り、焼土は北西側に位置し、118cm×32cmを測る。遺物は出土しなかった。

第６号焼土遺構（第10図）

調査区西部、Ｑ－19グリッドに位置し、Ⅲｄ層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は118cm×100cmを測り、焼土は中央に位置し、62cm×44cmを測る。遺物は出土しなかった。

第７号焼土遺構（第10図）

調査区西部、Ｔ－19グリッドに位置し、Ⅲｂ層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は72cm×96cmを測り、焼土は南寄りに位置し、22cm×26cmを測る。遺物は出土しなかった。



第10図　焼土遺構実測図(1)

第８号焼土遺構（第10図）

調査区中央部、Ｚ－24グリッドに位置し、Ⅲａ層中位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は74cm×(56)cmを測り、焼土は中央に位置し、30cm×28cmを測る。遺物は出土しなかった。

第９号焼土遺構（第10図）

調査区中央部、Ｚ－24グリッドに位置し、Ⅲｄ層中位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は128cm×(98)cmを測り、焼土は南寄りに位置し、32cm×(28)cmを測る。遺物は出土しなかった。

第10号焼土遺構（第10図）

調査区中央部、Ｚ－24、25グリッドに位置し、Ⅲｄ層中位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は144cm×(146)cmを測り、焼土は中央に位置し、50cm×44cmを測る。遺物は出土しなかった。

第11号焼土遺構（第10図）

調査区中央部、Ｚ－25グリッドに位置し、Ⅲｄ層中位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は100cm×(70)cmを測り、焼土は中央に位置し、44cm×(58)cmを測る。遺物は出土しなかった。

第12号焼土遺構（第11図）

調査区西部、Ｔ－27グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は120cm×(80)cmを測り、焼土は中央に位置し、42cm×(50)cmを測る。遺物は出土しなかった。

第13号焼土遺構（第11図）

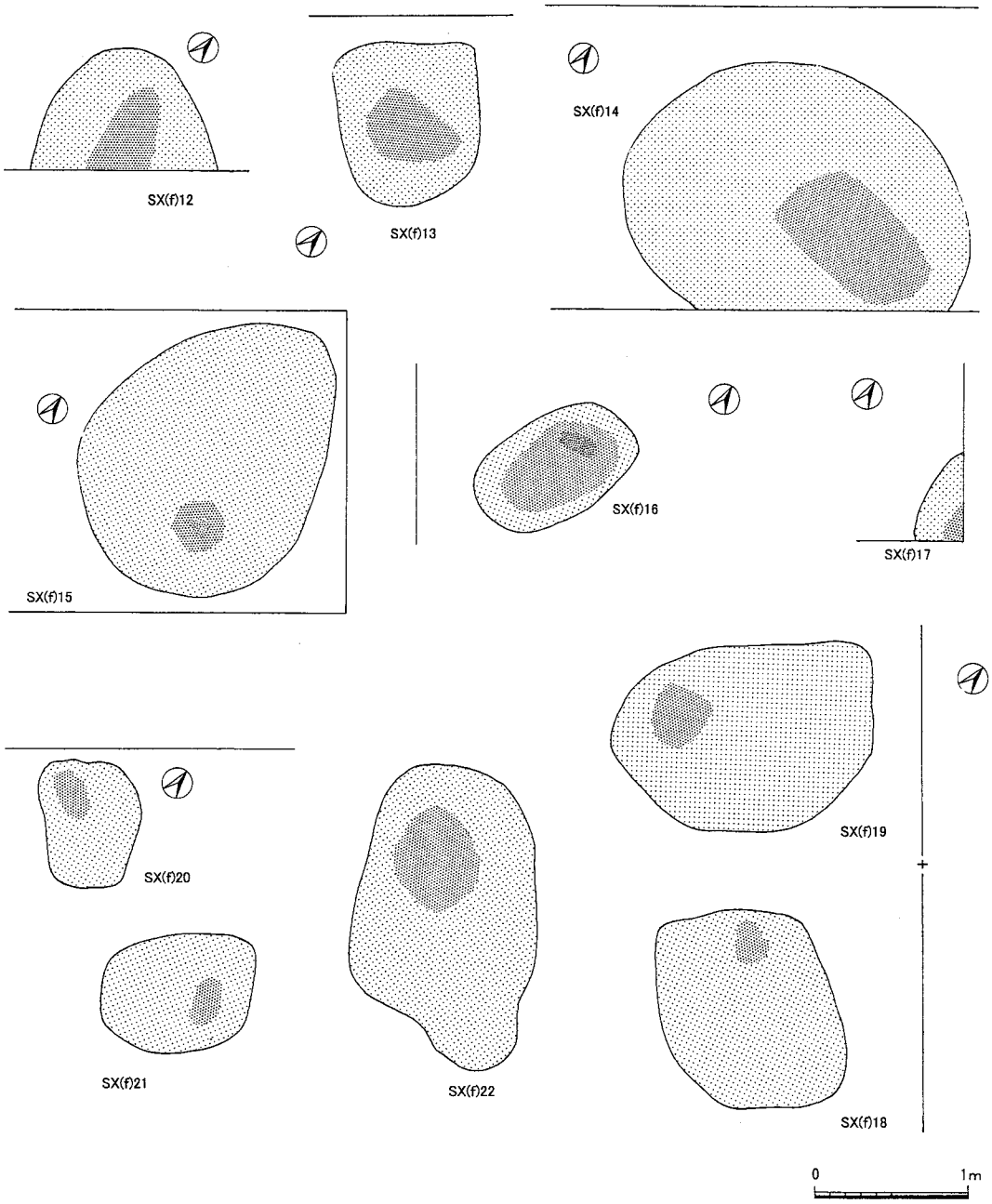
調査区西部、Ｔ－25グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は94cm×108cmを測り、焼土は中央に位置し、66cm×48cmを測る。遺物は出土しなかった。

第14号焼土遺構（第11図）

調査区南部、ＡＢ－６グリッドに位置し、Ⅲｂ層上面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は234cm×(160)cmを測り、焼土は東寄りに位置し、110cm×62cmを測る。遺物は出土しなかった。

第15号焼土遺構（第11図）

調査区南部、ＡＤ－20、ＡＥ－20グリッドに位置し、Ⅲａ層中位で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は164cm×176cmを測り、焼土は中央に位置し、34cm×36cmを測る。遺物は出土しなかった。



第11図　焼土遺構実測図(2)

第16号焼土遺構（第11図）

調査区南部、ＡＥ－23グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は114cm×70cmを測り、焼土は中央に位置し、82cm×50cmを測る。遺物は出土しなかった。

第17号焼土遺構（第11図）

調査区中央部、ＡＦ－24グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は(60)cm×(32)cmを測り、焼土は中央に位置し、(24)cm×(14)cmを測る。遺物は出土しなかった。

第18号焼土遺構（第11図）

調査区南西部、Ｔ－１グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は154cm×112cmを測り、焼土は中央に位置し、24cm×30cmを測る。遺物は出土しなかった。

第19号焼土遺構（第11図）

調査区南西部、Ｓ－１グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は172cm×124cmを測り、焼土は西寄りに位置し、40cm×44cmを測る。遺物は出土しなかった。

第20号焼土遺構（第11図）

調査区南西部、Ｓ－１グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は64cm×82cmを測り、焼土は西寄りに位置し、22cm×36cmを測る。遺物は出土しなかった。

第21号焼土遺構（第11図）

調査区南西部、Ｓ－１グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は100cm×76cmを測り、焼土は北寄りに位置し、20cm×34cmを測る。遺物は出土しなかった。

第22号焼土遺構（第11図）

調査区南西部、Ｓ－１、Ｔ－１グリッドに位置し、Ⅲｄ層面で確認した。焼土および焼土粒を含む範囲は122cm×202cmを測り、焼土は西寄りに位置し、60cm×70cmを測る。遺物は出土しなかった。

(3) 遺構外出土遺物

遺構外より出土した遺物は、縄文土器破片1,099点、石器26点である。

① 土　器（第12図～第19図）

本調査区からは、1,099点の縄文土器破片が出土した。

後期初頭から中葉の土器

１類：隆線文・隆沈文の土器（１～20）

沈線文のみで文様構成されている土器を一括した。調査区西部からの出土が目立つ。深鉢形土器が多くみられる。隆帯をもち、沈線で区画しているものもみられる。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈するものが多い。

２類：帯縄文の土器（34～73）

帯縄文が施文された土器を一括した。破片が小さく、器形や文様構成が明確でないものが多いが、曲線文や入り組み文がみられるものもある。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色、浅黄橙色を呈する。

３類：沈線文の土器（21～33）

地文上や無文化された器面に沈線文を施文するものを一括した。

４類：幾何学文が施文された土器（74・75）

幾何学文的な文様、内部に細縄文を充填したものを一括した。

５類：縄文の土器（76～134）

無節、単節縄文を施文した土器を一括した。深鉢形土器が多くみられる。口縁部と胴部の間を縄文圧痕によって区画しているものもみられる。焼成は良好で、にぶい黄橙色や浅黄橙色を呈するものが多い。

６類：撚糸文の土器（135～149）

撚糸文、網目状撚糸文、連鎖状撚糸文が施文された土器を一括した。深鉢形土器が大半を占める。焼成は良好で、浅黄橙色、にぶい黄橙色を呈する。

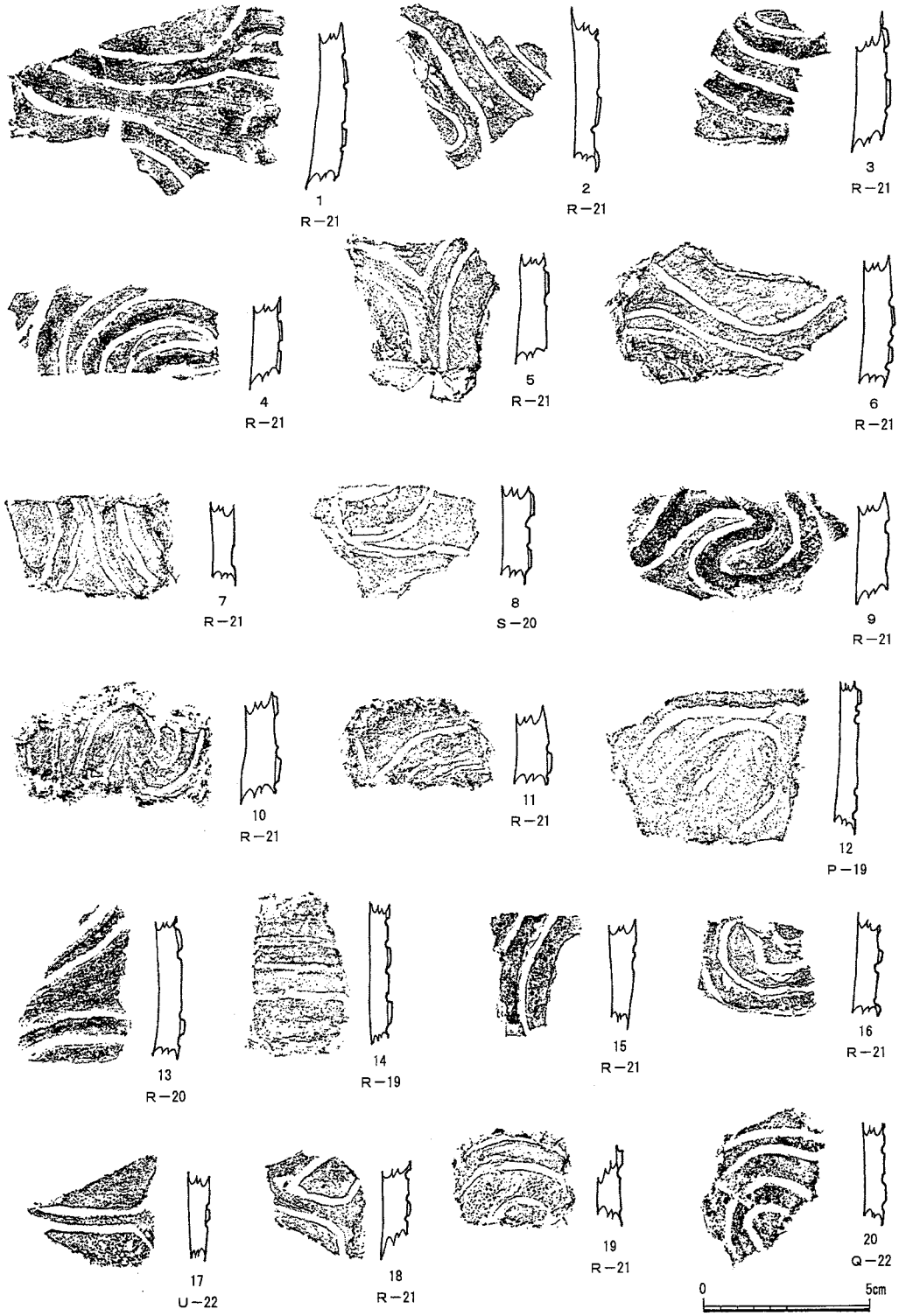
７類：条痕文の土器（151～156）

条痕文を施した土器である。本調査区から出土したものはすべて縦位方向の施文である。焼成は良好で、色調は灰褐色や灰黄褐色を呈する。

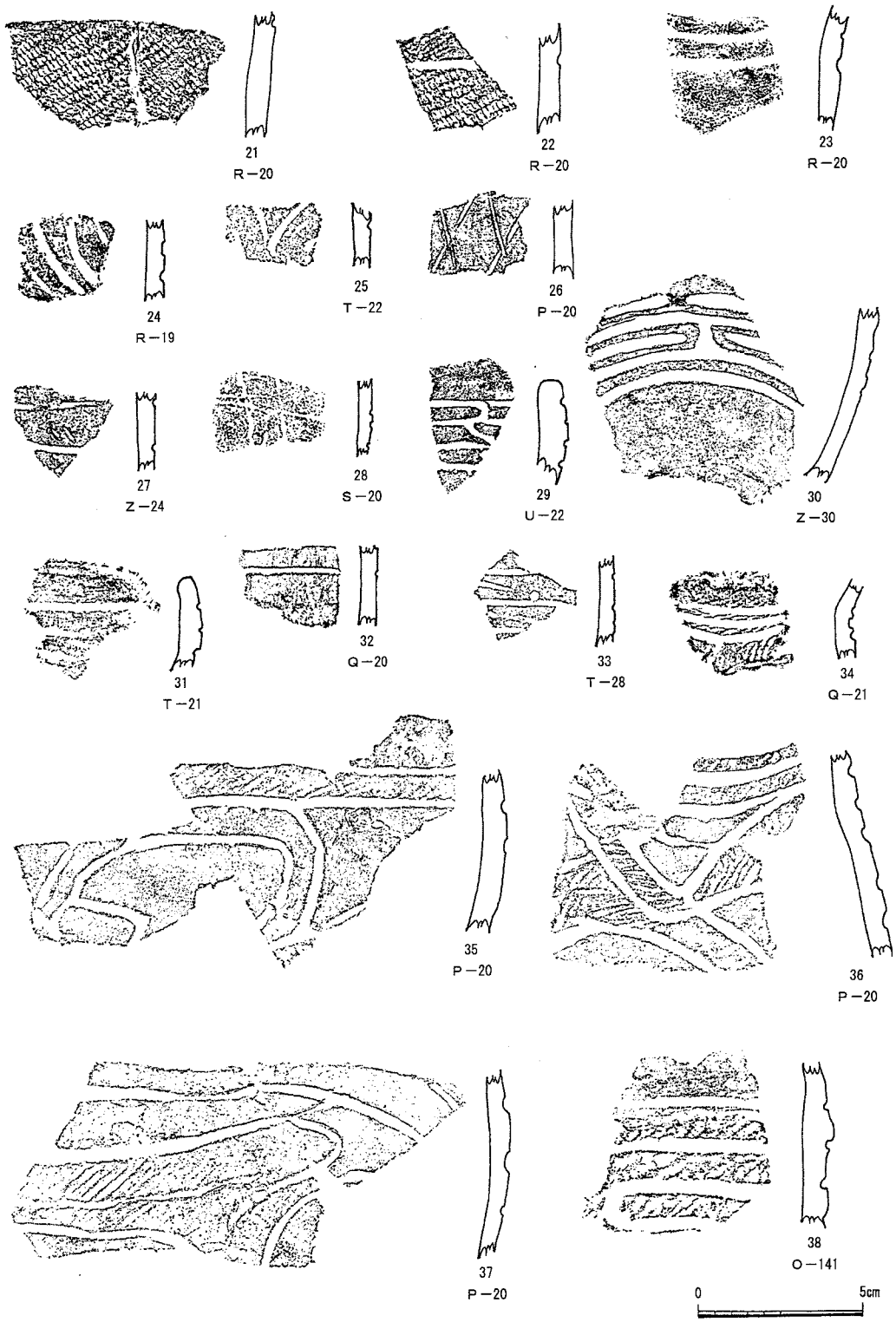
② 石　器（第26図～第27図）

本調査区からは、８点の石器が出土した。いずれも調査区西側からの出土である。１～７は掻器、８は凹石で両面に磨痕がみられる。

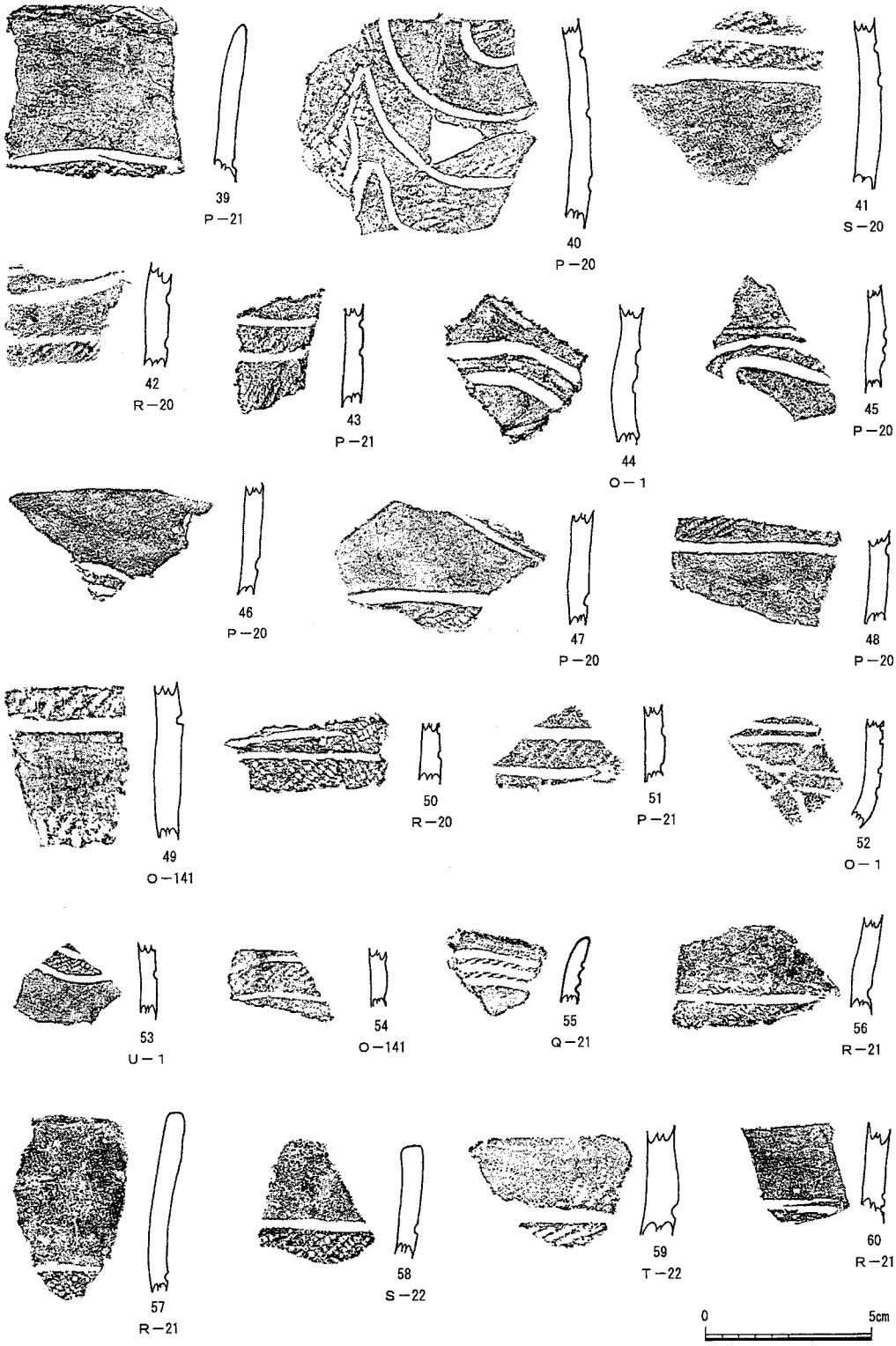
石質は、１～７が硬質頁岩、８が石英安山岩である。


1
R－21
2
R－21
3
R－21
4
R－21
5
R－21
6
R－21
7
R－21
8
S－20
9
R－21
10
R－21
11
R－21
12
P－19
13
R－20
14
R－19
15
R－21
16
R－21
17
U－22
18
R－21
19
R－21
20
Q－22
0
5cm

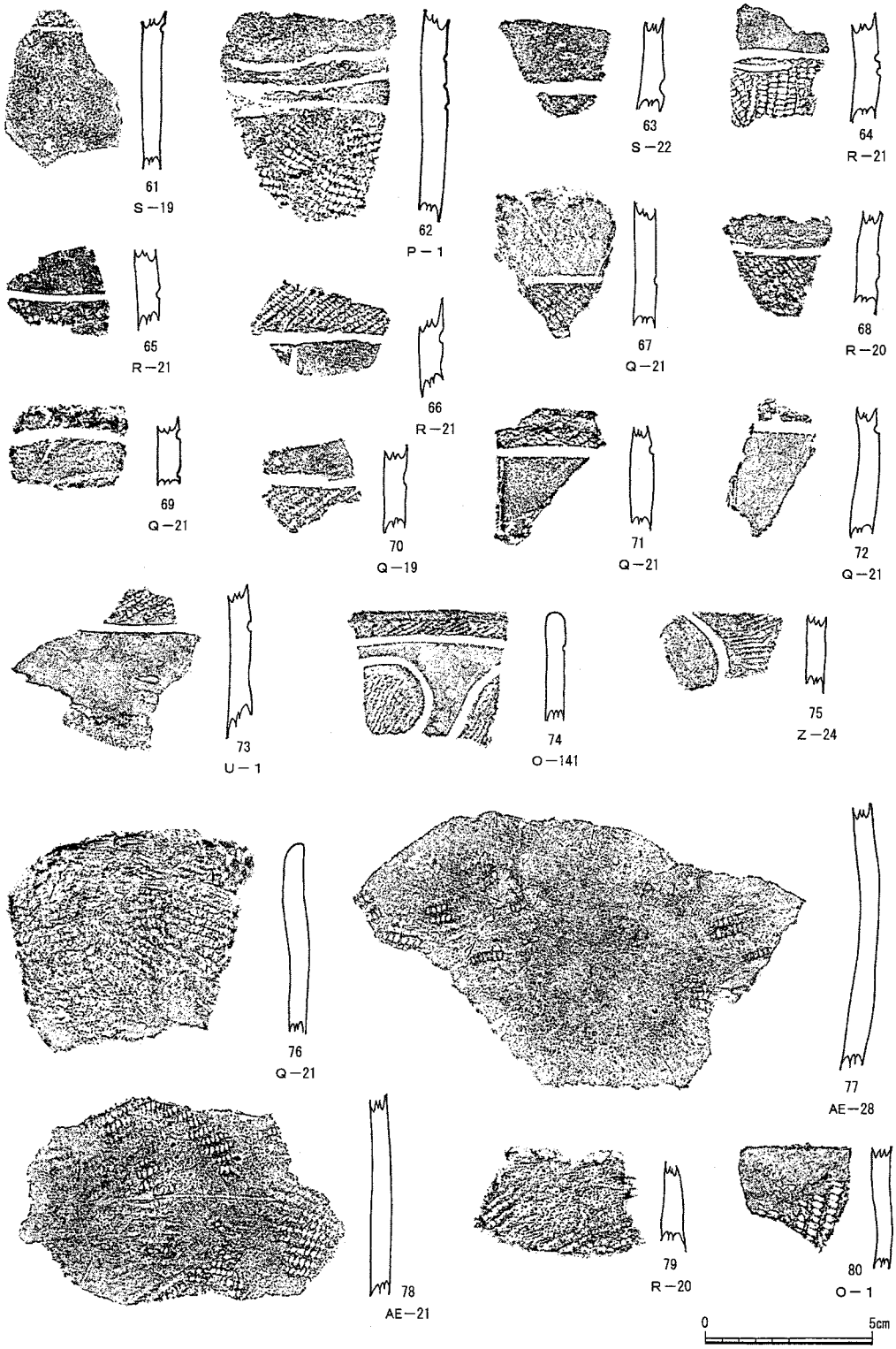
第12図　出土土器(1)


21
R－20
22
R－20
23
R－20
24
R－19
25
T－22
26
P－20
27
Z－24
28
S－20
29
U－22
30
Z－30
31
T－21
32
Q－20
33
T－28
34
Q－21
35
P－20
36
P－20
37
P－20
38
O－141
0
5cm

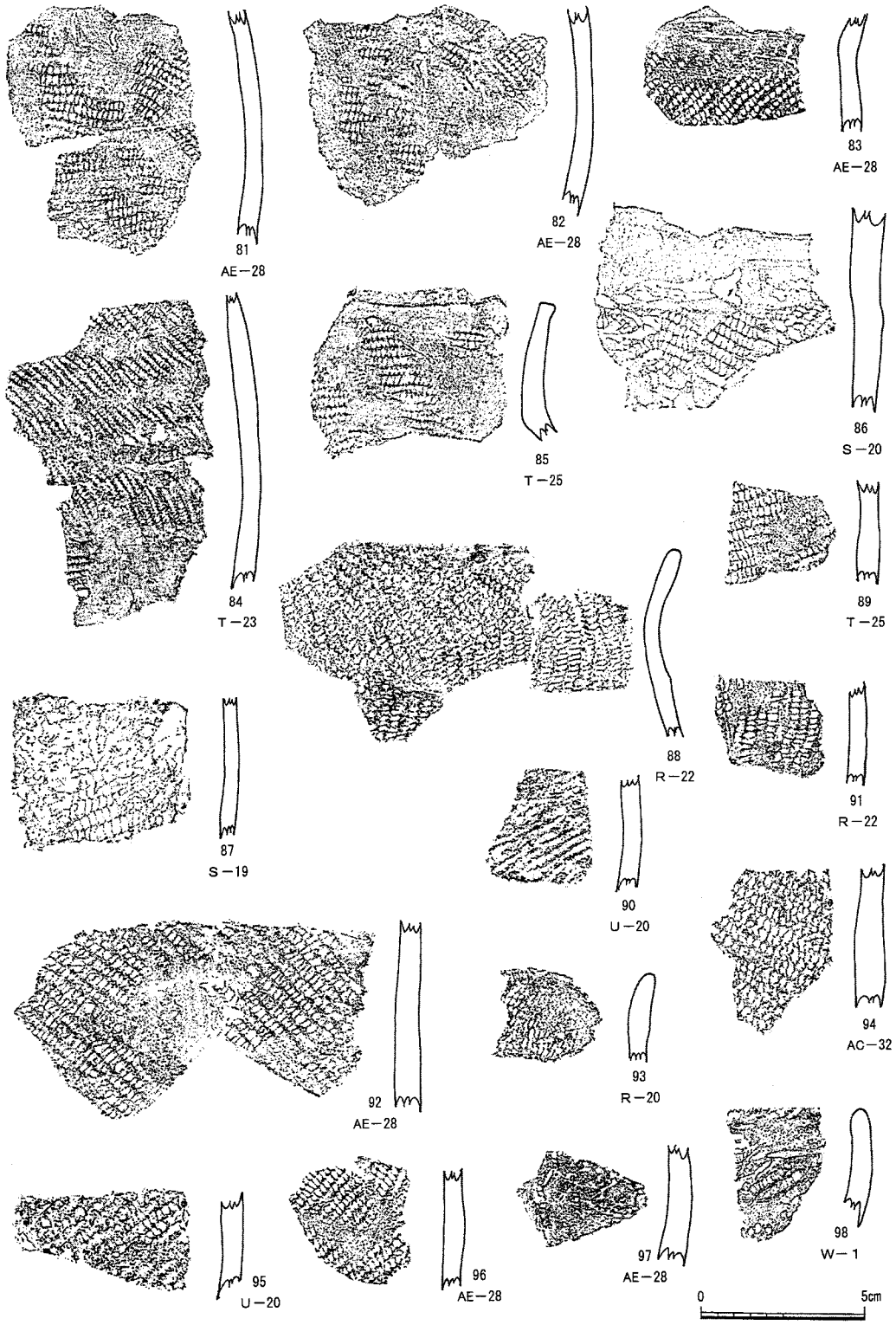
第13図　出土土器(2)


39
P－21
40
P－20
41
S－20
42
R－20
43
P－21
44
O－1
45
P－20
46
P－20
47
P－20
48
P－20
49
O－141
50
R－20
51
P－21
52
O－1
53
U－1
54
O－141
55
Q－21
56
R－21
57
R－21
58
S－22
59
T－22
60
R－21
0
5cm

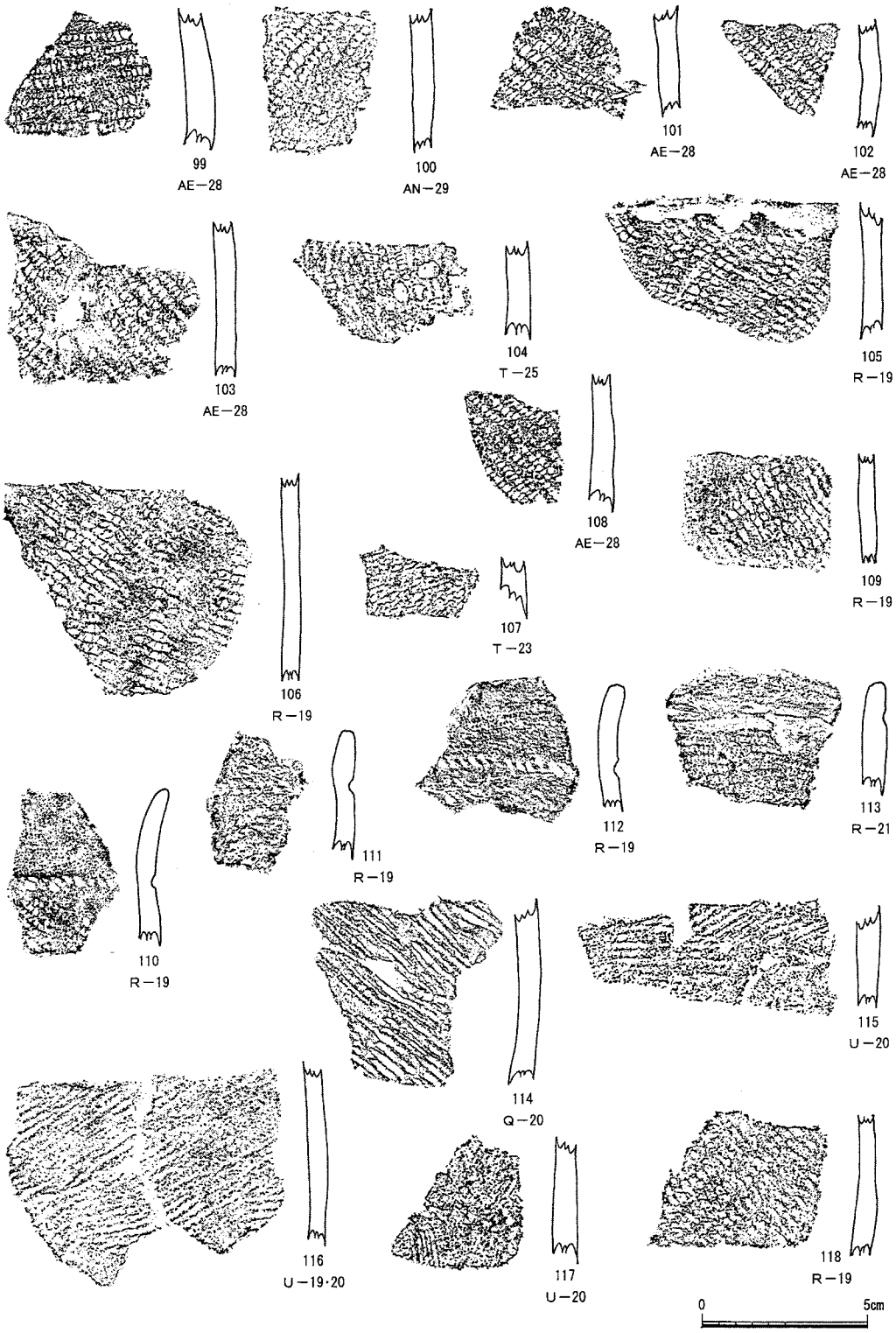
第14図　出土土器(3)


61
S－19
62
P－1
63
S－22
64
R－21
65
R－21
66
R－21
67
Q－21
68
R－20
69
Q－21
70
Q－19
71
Q－21
72
Q－21
73
U－1
74
O－141
75
Z－24
76
Q－21
77
AE－28
78
AE－21
79
R－20
80
O－1
0
5cm

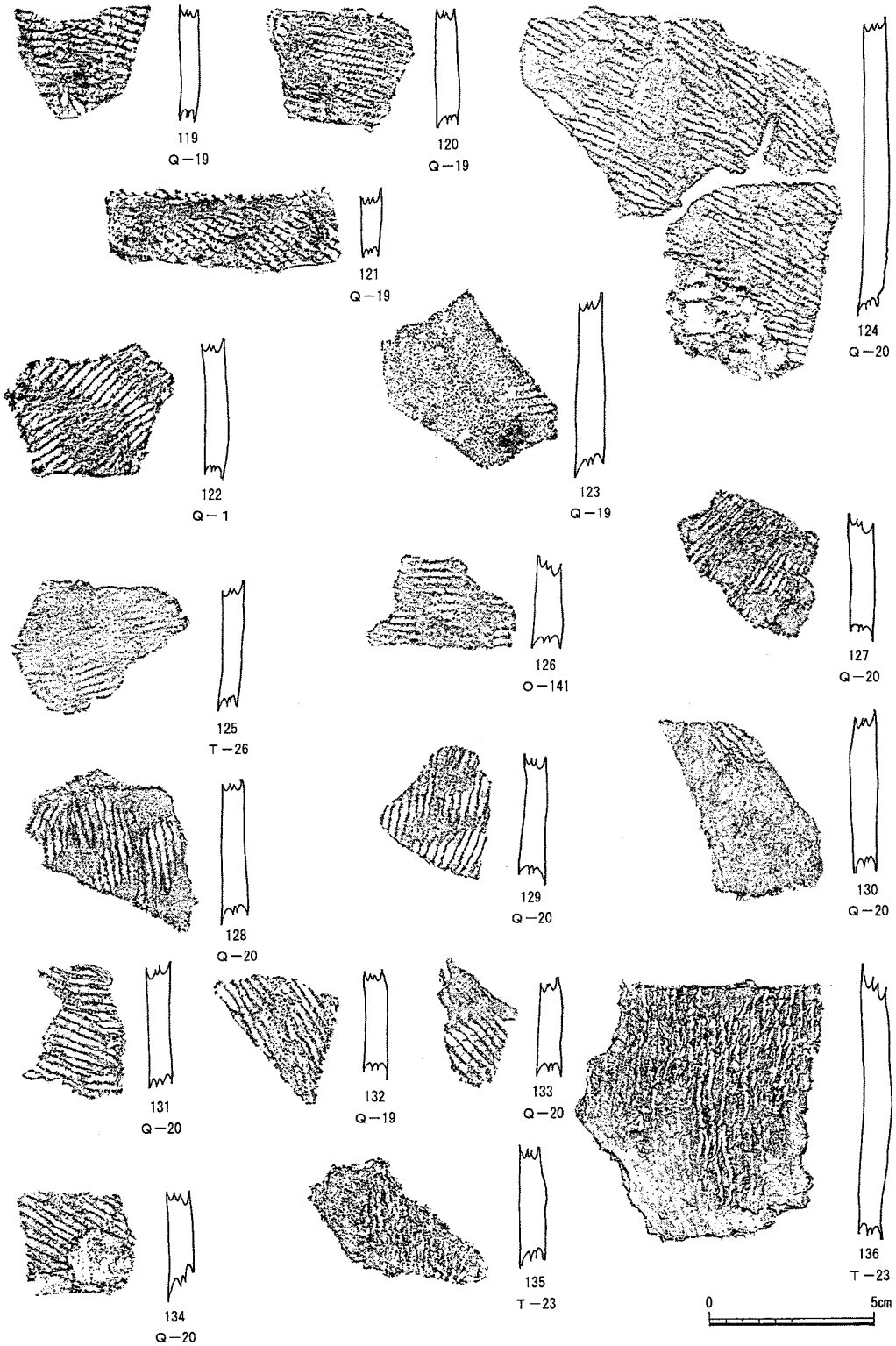
第15図　出土土器(4)


81
AE－28
82
AE－28
83
AE－28
84
T－23
85
T－25
86
S－20
87
S－19
88
R－22
89
T－25
90
U－20
91
R－22
92
AE－28
93
R－20
94
AC－32
95
U－20
96
AE－28
97
AE－28
98
W－1
0
5cm

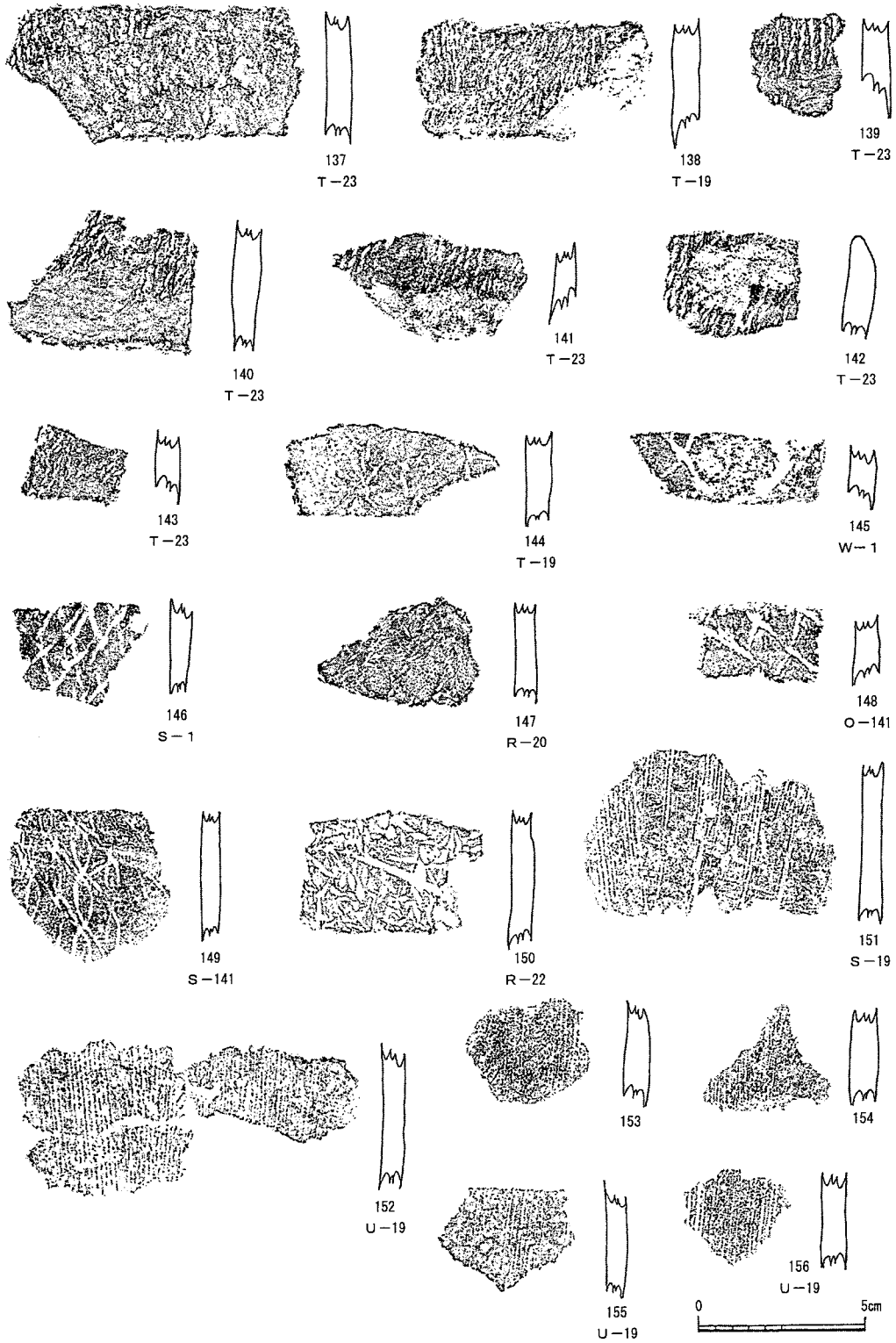
第16図　出土土器(5)


99
AE−28
100
AN−29
101
AE−28
102
AE−28
103
AE−28
104
T−25
105
R−19
106
R−19
107
T−23
108
AE−28
109
R−19
110
R−19
111
R−19
112
R−19
113
R−21
114
Q−20
115
U−20
116
U−19·20
117
U−20
118
R−19
0
5cm

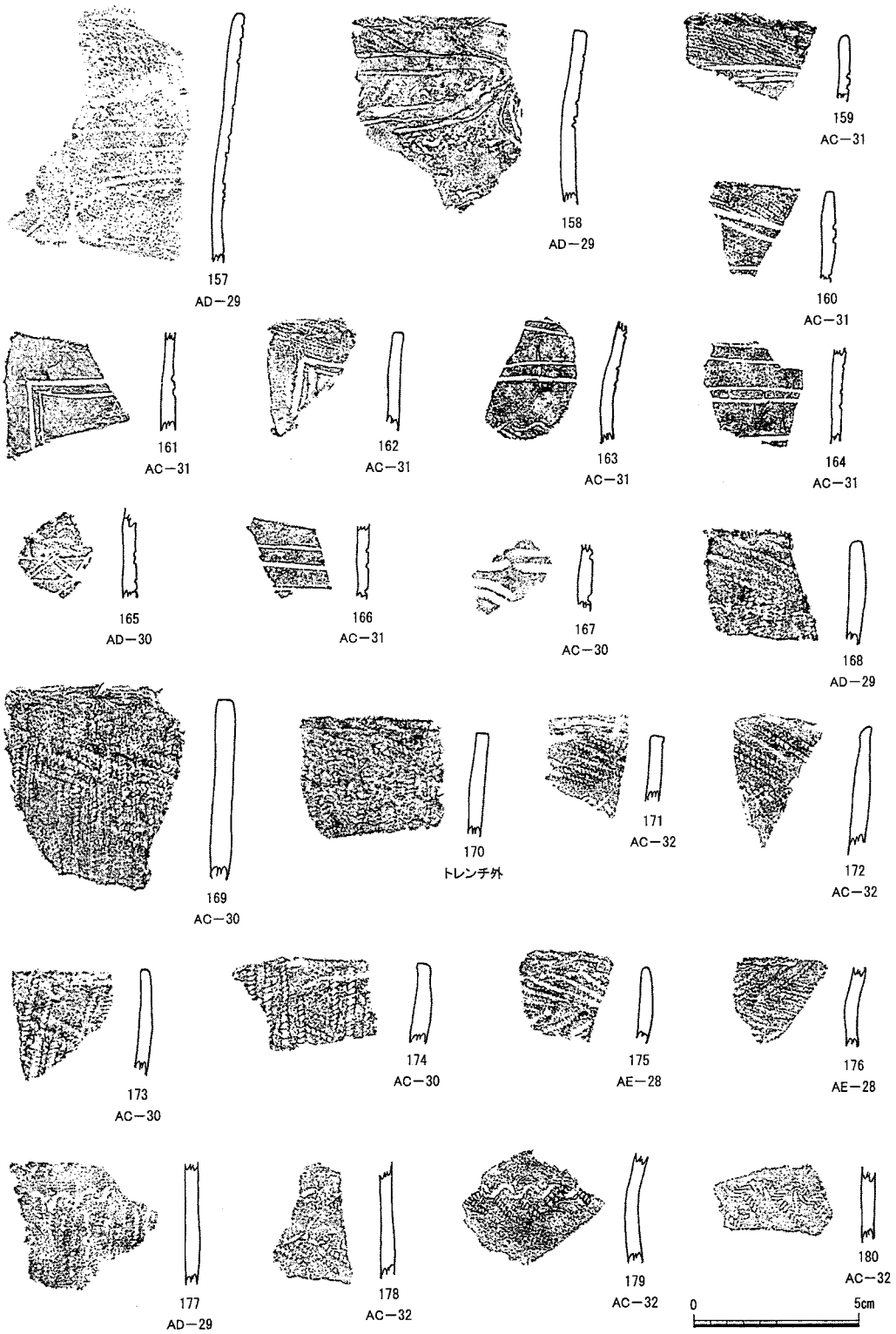
第17図　出土土器(6)


119
Q－19
120
Q－19
121
Q－19
124
Q－20
122
Q－1
123
Q－19
125
T－26
126
O－141
127
Q－20
128
Q－20
129
Q－20
130
Q－20
131
Q－20
132
Q－19
133
Q－20
134
Q－20
135
T－23
136
T－23
0
5cm

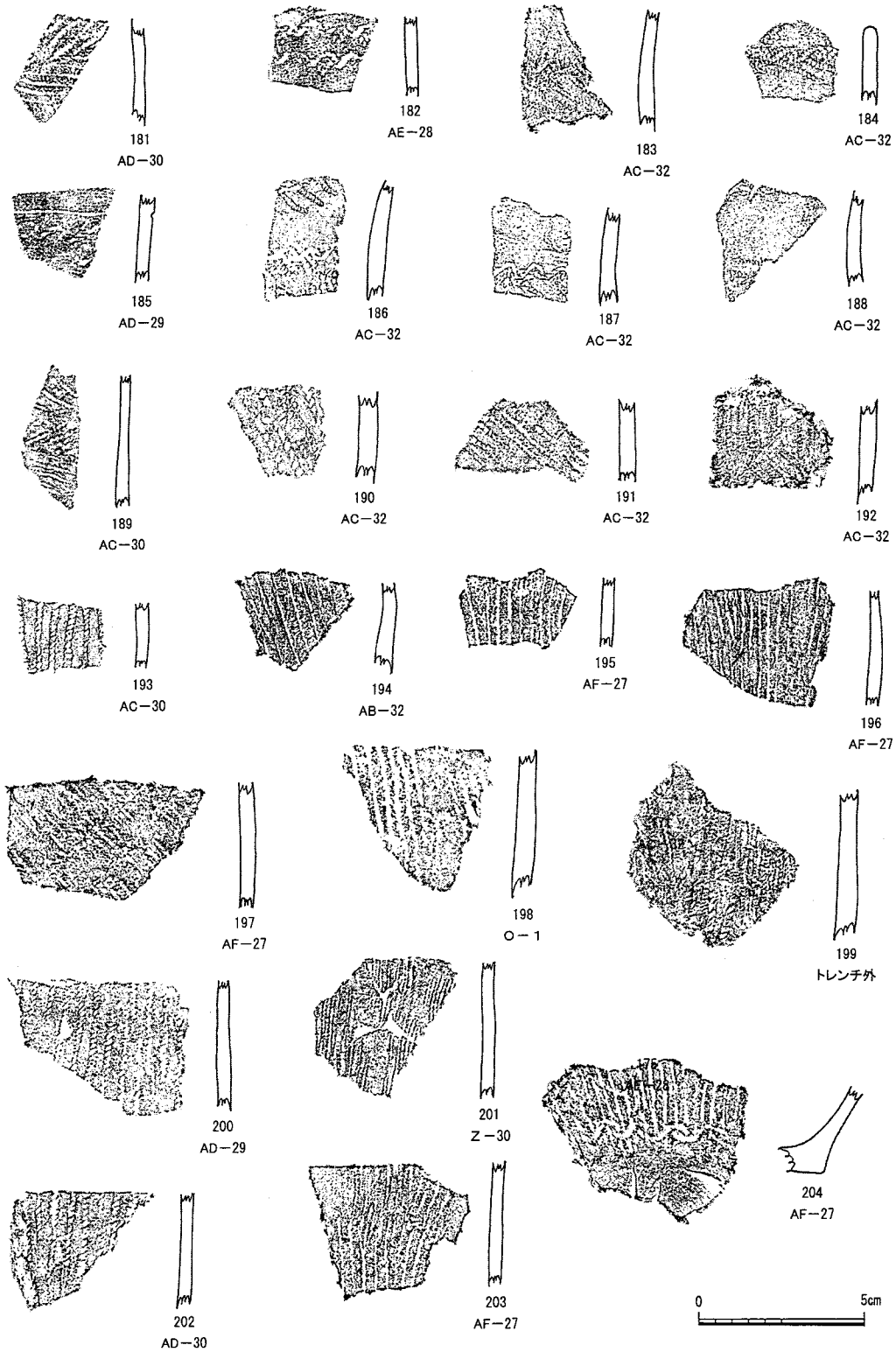
第18図　出土土器(7)


137
T－23
138
T－19
139
T－23
140
T－23
141
T－23
142
T－23
143
T－23
144
T－19
145
W－1
146
S－1
147
R－20
148
O－141
149
S－141
150
R－22
151
S－19
152
U－19
153
154
155
U－19
156
U－19
0
5cm

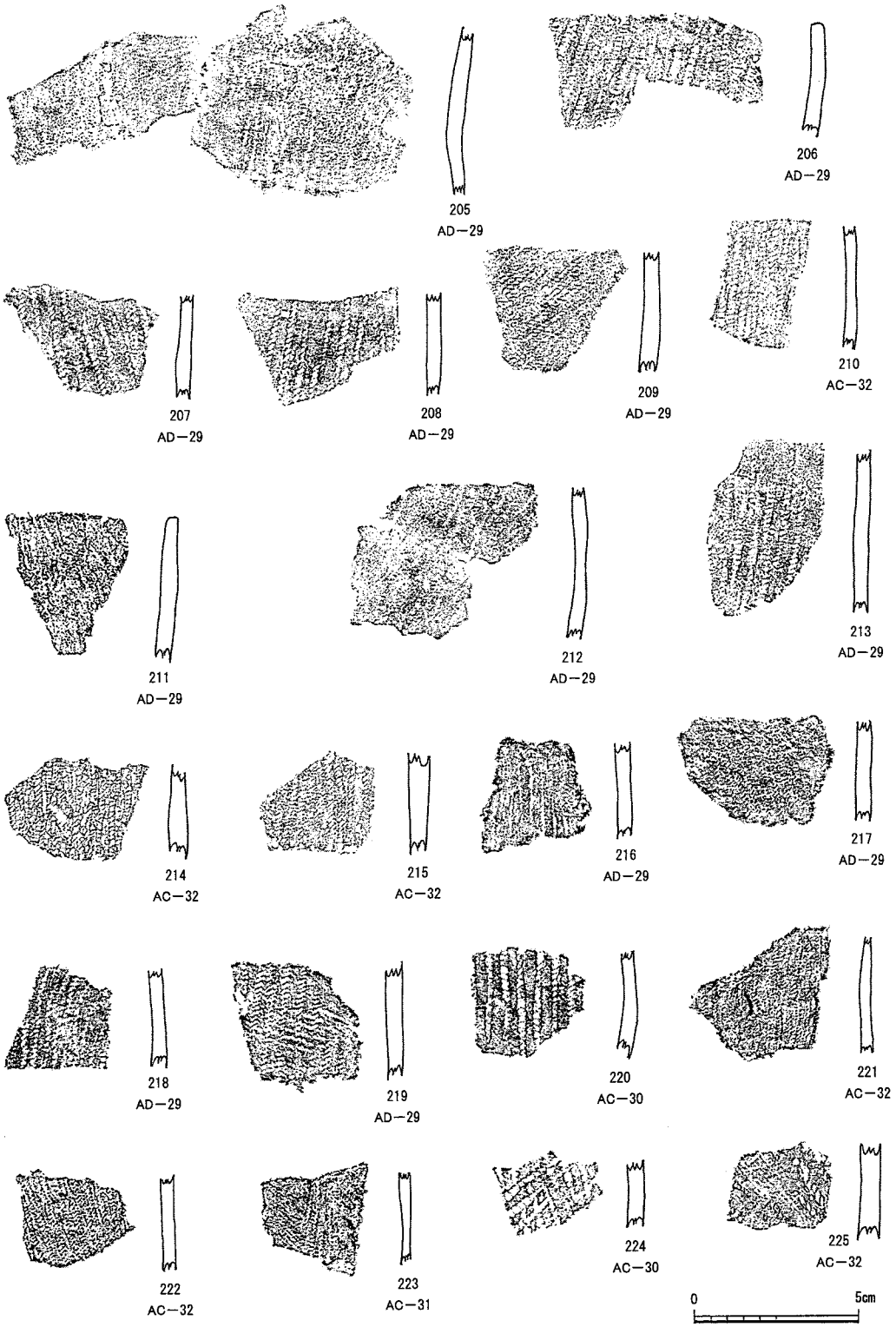
第19図　出土土器(8)


157
AD－29
158
AD－29
159
AC－31
160
AC－31
161
AC－31
162
AC－31
163
AC－31
164
AC－31
165
AD－30
166
AC－31
167
AC－30
168
AD－29
169
AC－30
170
トレンチ外
171
AC－32
172
AC－32
173
AC－30
174
AC－30
175
AE－28
176
AE－28
177
AD－29
178
AC－32
179
AC－32
180
AC－32
0
5cm

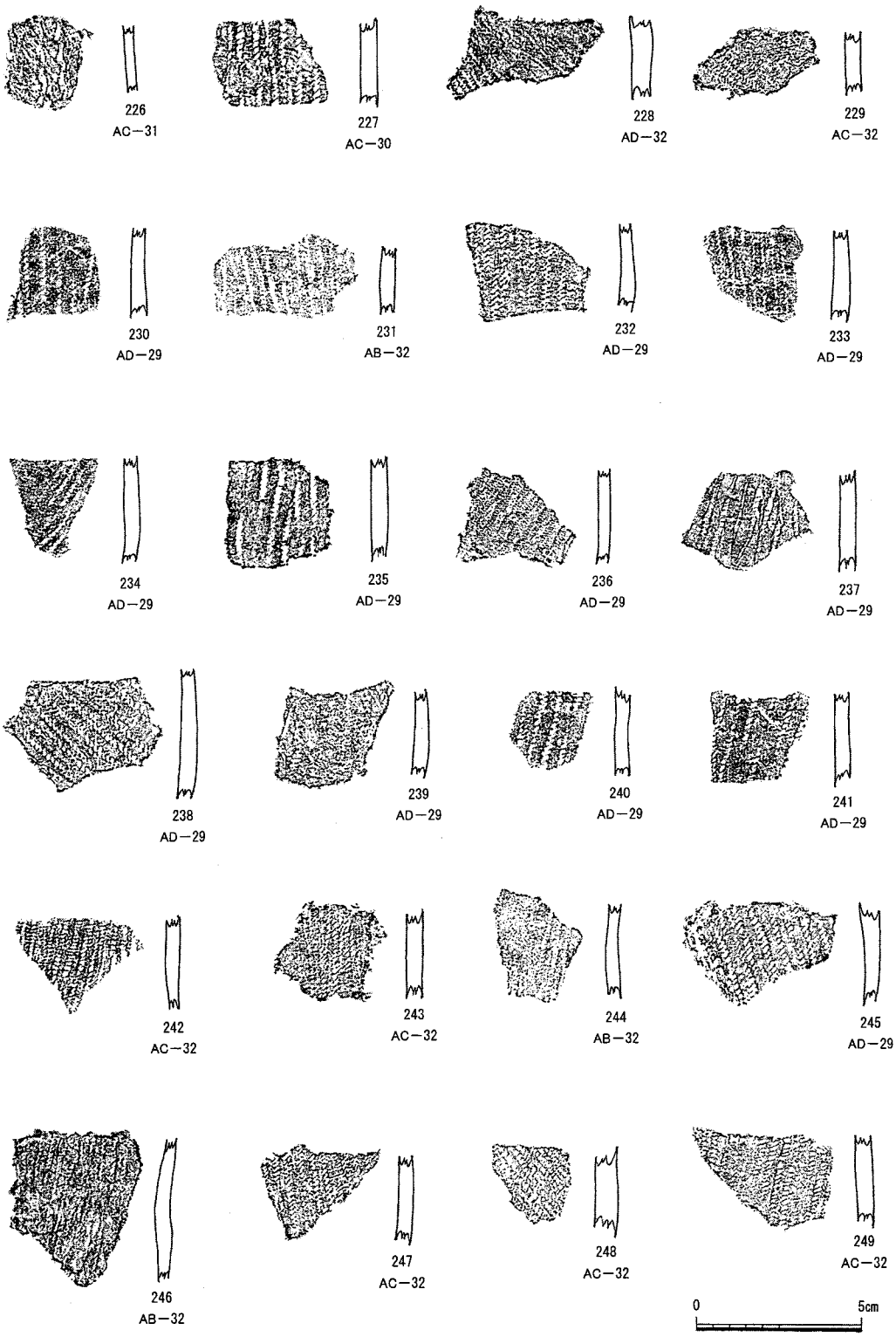
第20図　出土土器(9)


181
AD－30
182
AE－28
183
AC－32
184
AC－32
185
AD－29
186
AC－32
187
AC－32
188
AC－32
189
AC－30
190
AC－32
191
AC－32
192
AC－32
193
AC－30
194
AB－32
195
AF－27
196
AF－27
197
AF－27
198
O－1
199
トレンチ外
200
AD－29
201
Z－30
202
AD－30
203
AF－27
204
AF－27
0
5cm

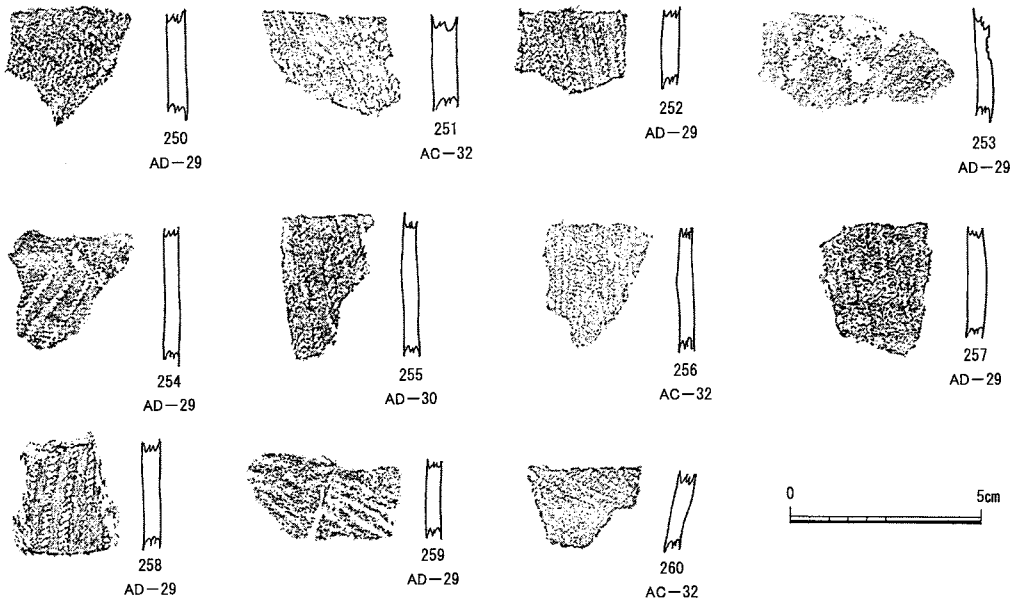
第21図　出土土器(10)


205
AD−29
206
AD−29
207
AD−29
208
AD−29
209
AD−29
210
AC−32
211
AD−29
212
AD−29
213
AD−29
214
AC−32
215
AC−32
216
AD−29
217
AD−29
218
AD−29
219
AD−29
220
AC−30
221
AC−32
222
AC−32
223
AC−31
224
AC−30
225
AC−32
0
5cm

第22図　出土土器(11)


226
AC−31
227
AC−30
228
AD−32
229
AC−32
230
AD−29
231
AB−32
232
AD−29
233
AD−29
234
AD−29
235
AD−29
236
AD−29
237
AD−29
238
AD−29
239
AD−29
240
AD−29
241
AD−29
242
AC−32
243
AC−32
244
AB−32
245
AD−29
246
AB−32
247
AC−32
248
AC−32
249
AC−32
0
5cm

第23図　出土土器(12)



第24図　出土土器(13)

2　弥生時代の遺構と遺物

Ａ$_6$区、Ａ$_7$区において、遺構は確認されなかったが、調査区中央部において弥生土器破片が出土した。

(1)　遺構外出土遺物

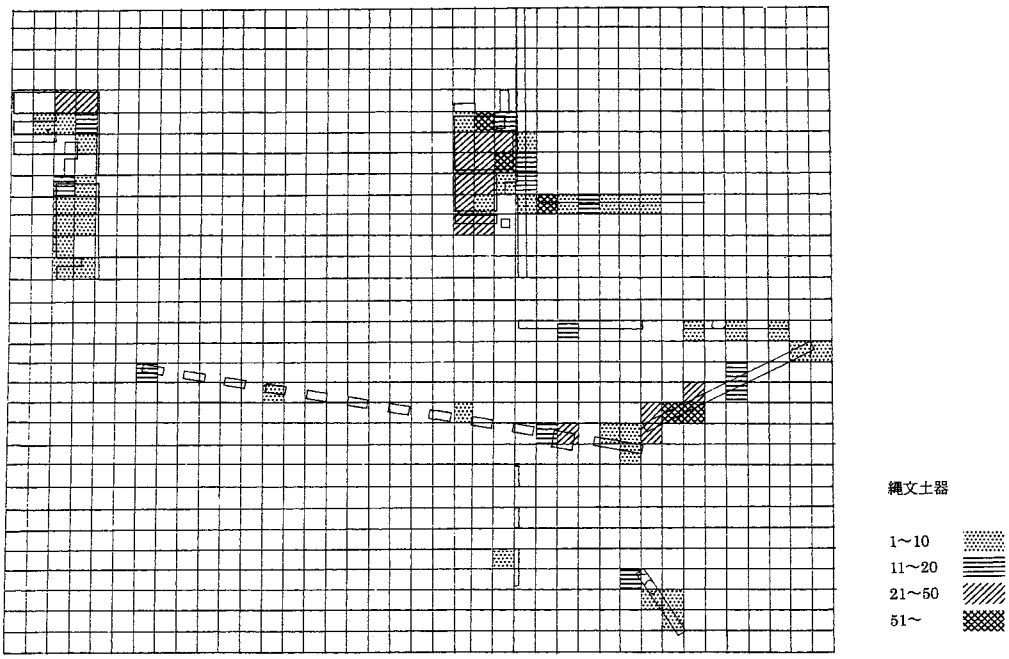
遺構外より出土した遺物は387点である。調査区中央部の台地縁辺部でまとまって出土した。

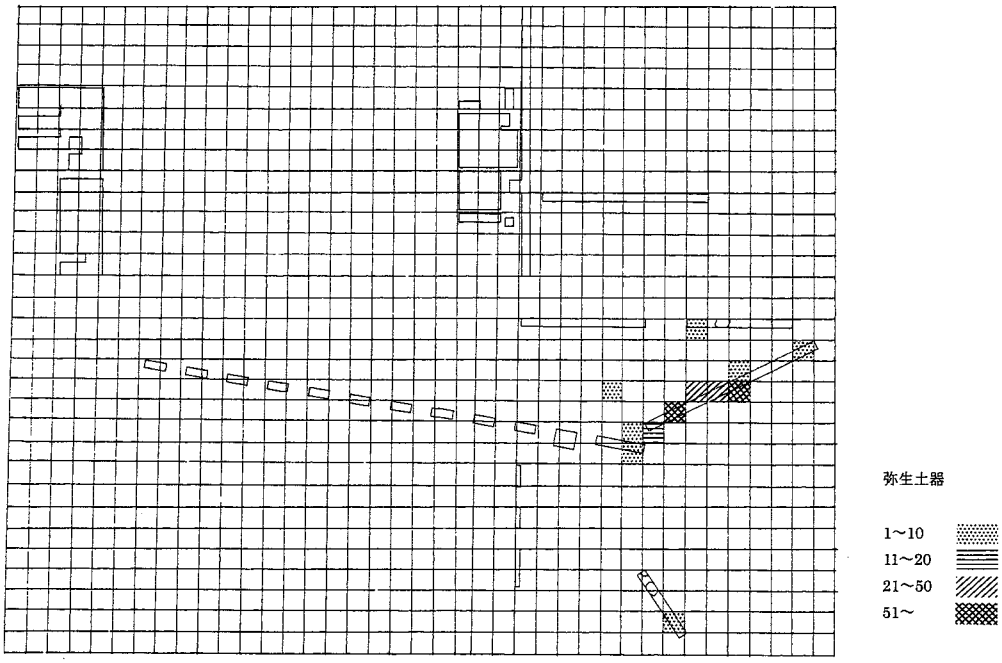
１類：撚糸文が施された土器（第20図157～第24図260）

細かい撚糸文が施された土器を一括した。158、177～188、204は、細かい撚糸文とともに綾絡文が施されている。全体に器壁は薄く、堅いのが特徴である。口縁部に撚糸文を施し、沈線で区画するものや撚糸の向きを変え、交差させるように文様を施しているものもみられる。

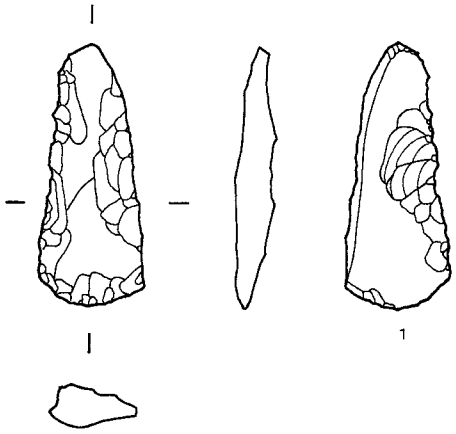
焼成は良好で、色調は浅黄橙色・にぶい黄橙色・灰白色を呈する。

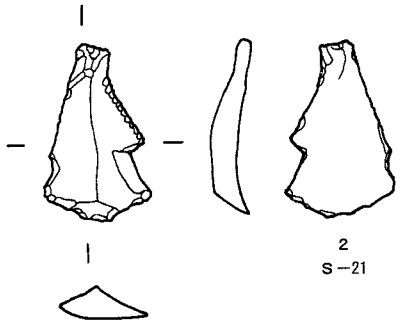
本類は、小坂Ｘ式に比定されるものと考えられる。

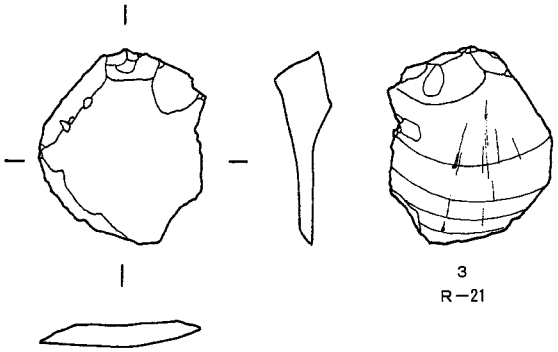


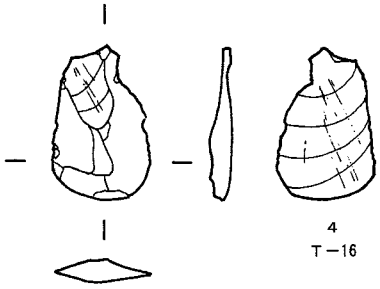


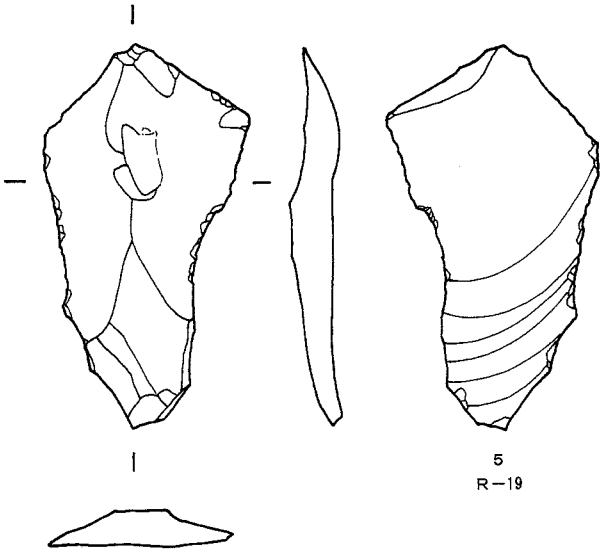
第25図　遺構外出土土器分布状況



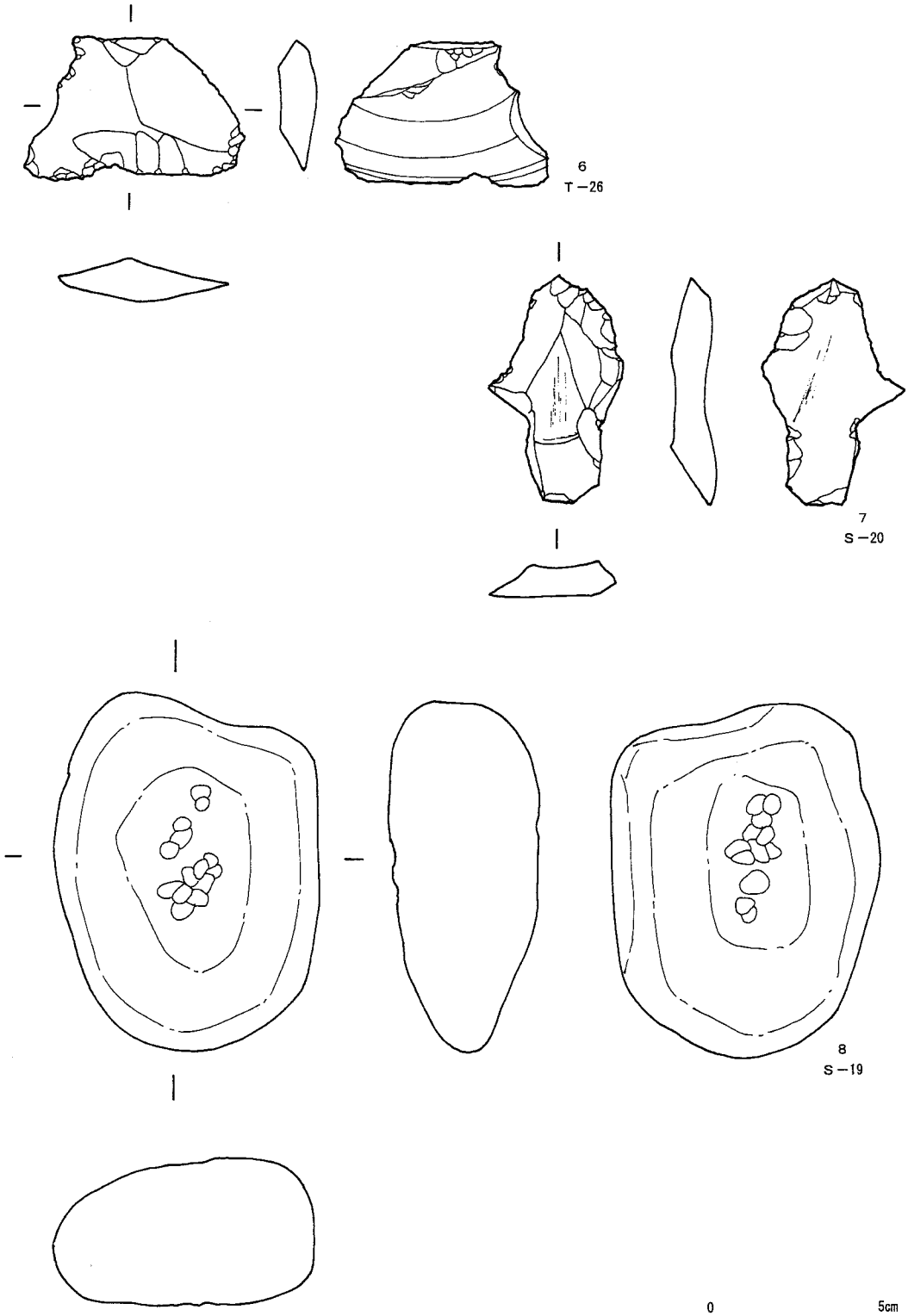








第26図　出土石器実測図(1)



第27図　出土石器実測図(2)

3　歴史時代の遺構と遺物

A_6区、A_7区において確認された歴史時代の遺構は、竪穴住居跡３軒である。

(1)　竪穴住居跡

A_6区、A_7区において、３軒の竪穴住居跡が検出された。

第１号竪穴住居跡（第28～29図）

〈遺構の位置と確認〉調査区北東部のＺ－31グリッドに位置する。Ⅲａ層面で円形に堆積した十和田ａ降下火山灰を確認した。

〈重複関係〉他遺構との重複はない。

〈平面形・規模〉遺構の一部はトレンチ外に延びているが確認された範囲では方形のプランを呈すると考えられる。確認された遺構の規模は北壁（2.2）ｍを測る。

〈堆積土〉２ブロックに区分される。１層に地山小ブロックが混入していることから、人為堆積と考えられる。上面には十和田ａ降下火山灰が堆積している。（Ⅱａ・Ⅱｂ層）

〈床面・壁〉Ⅴ層である地山を掘り込み、床面としている。壁は外反して立ち上がり、壁高は58cmを測る。床面には一面に炭化材が残り、焼失家屋と考えられる。炭化材は、住居の中央から放射状にのびている。

〈柱　穴〉本遺構に伴う柱穴は、遺構内・周辺にも確認されなかった。

〈カマド〉トレンチ内ではカマドは確認されなかった。遺構がトレンチ外に延びていることから、未調査区域にカマドがあるものと考えられる。

〈出土遺物〉本遺構内から遺物は出土しなかった。

〈構築時期〉埋土の上面に十和田ａ降下火山灰が堆積していることなどから、本遺構は平安時代前半に構築され、十和田ａ降下火山灰が降下する直前の10世紀初頭に廃棄されたと考えられる。

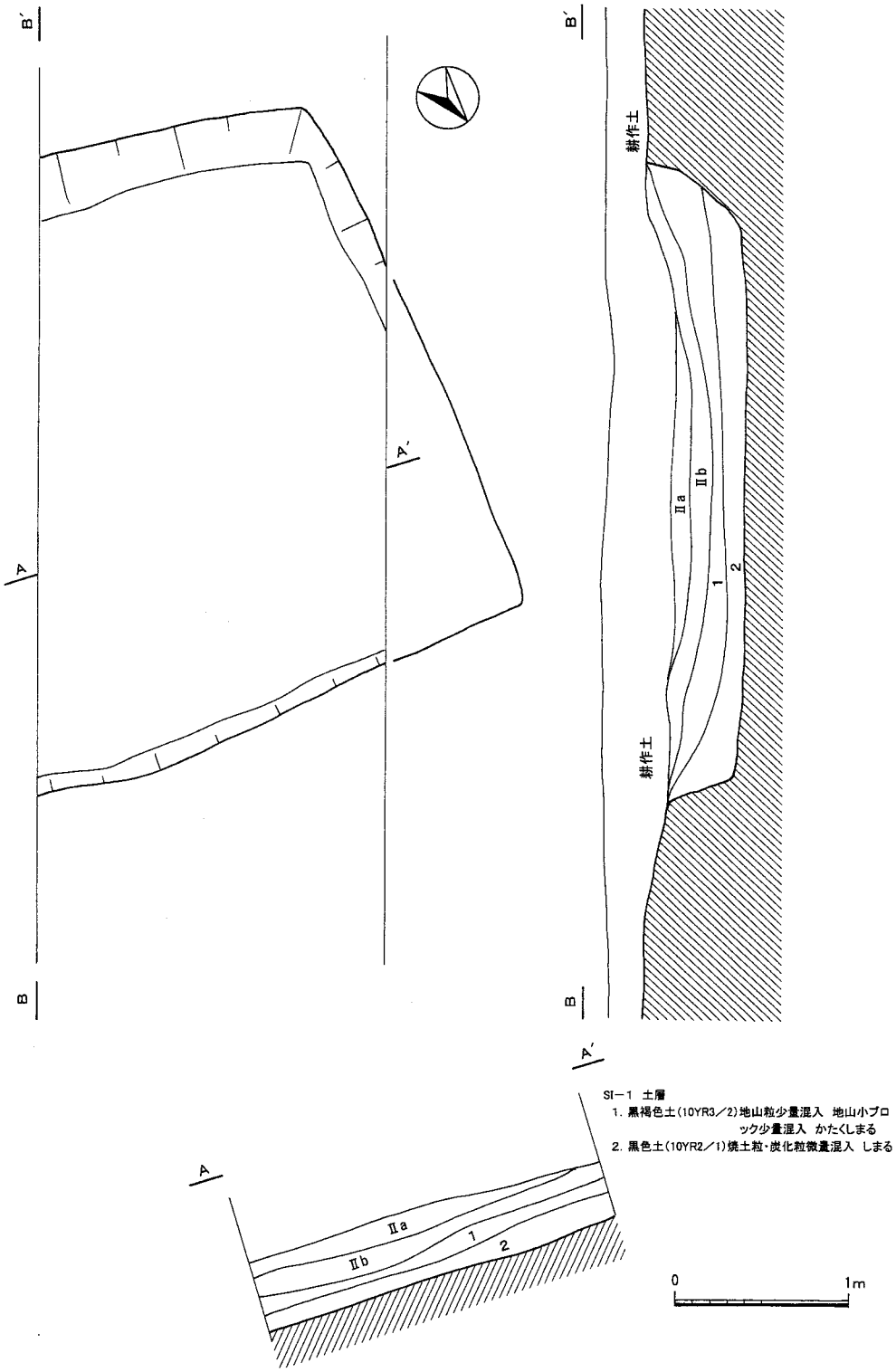
第２号竪穴住居跡（第30図）

〈遺構の位置と確認〉調査区北東部のＡＬ－27グリッドに位置する。Ⅲａ層面で十和田ａ降下火山灰の堆積を確認した。遺構の大半はトレンチ外に延びている。

〈重複関係〉他遺構との重複はない。

〈平面形・規模〉方形を呈するとみられる。遺構の大半はトレンチ外に及ぶが、確認された規模は南壁（1.9）ｍを測る。

〈堆積土〉１ブロックの堆積である。自然堆積と考えられる。上面には十和田ａ降下火山灰が堆積している。



第28図　第１号竪穴住居跡実測図

第29図　第１号竪穴住居跡・炭化物出土状況

〈床面・壁〉Ｖ層である地山を掘り込み、床面としている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は52cmを測る。

〈柱　穴〉本遺構に伴う柱穴は確認されなかった。

〈カマド〉トレンチ内ではカマドは確認されなかった。

〈出土遺物〉本遺構内から遺物は出土しなかった。

〈構築時期〉遺構上面に十和田ａ降下火山灰の堆積が認められることから、本遺構は平安時代前半に構築され、十和田ａ降下火山灰の降下直前の10世紀初頭に廃棄されたものと考えられる。

第３号竪穴住居跡（第30図）

〈遺構の位置と確認〉調査区北東部のＡＭ－28グリッドに位置する。Ⅲａ層面で十和田ａ降下火山灰の堆積を確認した。遺構の一部はトレンチ外に延びている。

〈重複関係〉他遺構との重複は認められなかった。

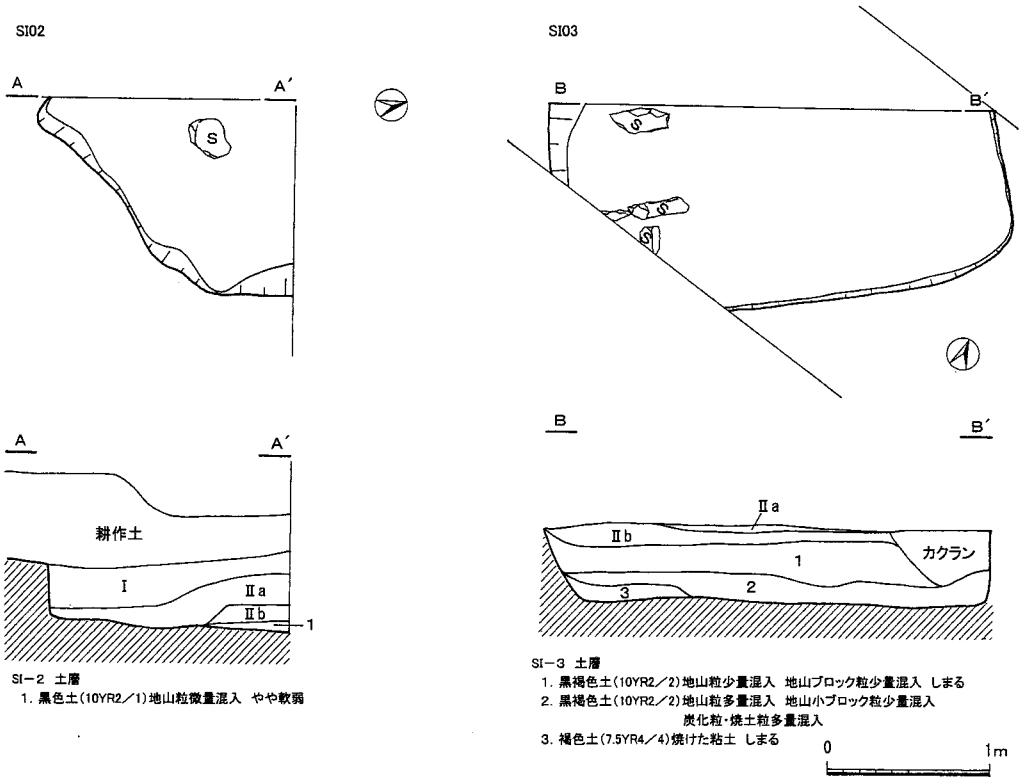
〈平面形・規模〉方形を呈するとみられる。遺構の一部はトレンチ外に及ぶが、確認された規模は、南壁（1.7）ｍを測る。

〈堆積土〉３ブロックに区分される。１・２層には地山ブロック粒が混入していることから、人為堆積と考えられる。２層には炭化粒の混入もみられる。３層はカマドから流出した粘土層とみられる。

〈床面・壁〉Ｖ層である地山を掘り込んで、床面としている。壁は外反して立ち上がり、壁高は43cmを測る。床面には一部炭化材が認められた。

〈柱　穴〉本遺構に伴う柱穴は確認されなかった。

〈カマド〉トレンチ内ではカマドは確認されなかったが、南西側に焼けた石があり、粘土の混入もみられることから、南壁のトレンチ外に延びている南西端にカマドが構築されている可能性が高い。



第30図　第２号・第３号竪穴住居跡実測図

〈出土遺物〉遺構内南西側から土師器甕の破片、ロクロ成形土師器坏の破片などが出土した。

〈構築時期〉遺構上面に十和田a降下火山灰が堆積していることや、出土遺物などから平安時代前半に構築され、十和田a降下火山灰が降下する直前の10世紀初頭に廃棄されたものと考えられる。

（三浦貴子）

第Ⅳ章　分析と考察

鹿角市内の奈良・平安時代の竪穴住居

１．はじめに

⑴　歴史時代の遺構の発見と紹介

鹿角市内に所在する奈良・平安時代の遺跡が始めて紹介されたのは枯草坂古墳である。枯草坂古墳は明治34年12月、佐藤定吉氏によって発見され、大正元年には県史編纂主任の長井行氏、大正８年には毛馬内出身で東洋学の権威である内藤湖南氏が現地踏査を行っている。この古墳の構造については大正２年、高橋建自氏が『考古学雑誌３巻８号』において発表し、「川原石積石の円墳であること、伴出遺物から奈良時代末から平安時代初頭のもの」と報告している。枯草坂古墳から出土した勾玉・ガラス玉などの遺物について国立東京上野博物館が保管しているほか、その後同地より出土したものについては秋田県立博物館、鹿角市教育委員会がそれぞれ保管し、県・市指定文化財となっている。

市内において初めて奈良・平安時代の竪穴住居跡が発掘調査されたのは菩提野遺跡である。この遺跡は、昭和26年・27年の両年にわたり文化財保護委員会（現　文化庁）が行った「大湯町環状列石」の発掘調査（いわゆる国営調査）の一環として実施したもので、その目的は「環状列石の構築時期解明」であった。大湯環状列石については文化財保護委員会刊行の『大湯町環状列石』や鹿角市教育委員会が昭和59年度（第１次調査）から平成15年度（第20次調査）にかけて行った発掘調査をまとめた『特別史跡　大湯環状列石（Ⅰ）』に詳しいが、菩提野遺跡の調査は「大湯町環状列石」の影に隠れ、あまり注目を浴びることはなかった。

同報告書によると、昭和21年、後藤守一氏・江坂輝弥氏が大湯町環状列石の調査をしている際に「竪穴跡群がある、土師器を出土する。その年代が奈良時代前後のものであるらしい」ことを見学者から聞き、国営調査時に実現させたものである。

この遺跡は木村善吉氏にすでに紹介されていたらしく、それによると12個の竪穴が群をなしていたということである。しかし、昭和21年時点で確認できたのは６個で、そのうちの第九号竪穴跡とした住居を国営調査時に精査している。当時、竪穴は現地形においても大きな窪みとして確認され、これを覆うように大湯浮石の堆積層が認められたと報告している。竪穴の形態は方形を呈し、南壁にカマドがつくられたものであることが判明、ここで初めて鹿角市内での奈良・平安時代の竪穴住居跡の構造が明らかにされた。

その後、鹿角市内の発掘で奈良・平安時代の住居跡の発見は昭年の「鳥野遺跡」や「源田平遺跡」の調査を待たなくてはならず、昭和54年以降の東北縦貫自動車道路建設に伴う発掘調査やその他の開発事業・学校建設などによって爆発的に検出例を増していった。

これまでの調査によって当該時期の住居跡が確認された遺跡は４６遺跡にも及び、その検出棟数は443棟となった。

(2) 時代背景

奈良時代後半になると鹿角は、律令国家の発展と共にその支配下に置かれはじめ、その影響を受けた文化が伝播される。

その代表的なものが鹿角市八幡平字小豆沢地区に鎮座する「大日霊貴神社（大日堂）」に伝わる「大日堂舞楽」である。この大日堂は養老２年（714）に再建されたものといわれ、このとき都から出向いた楽人によって神楽が伝えられたといわれている。周辺地域４集落によって保存・伝承され昭和51年５月に「国指定重要無形民俗文化財」となっている。

また、時期が下り平安時代に及ぶと歴史書に鹿角（上津野と書き記される）の名が見え始める。

『日本後記』によると、811（弘仁２）年３月20日に、陸奥出羽安察使　文室綿麻呂は「爾薩體・幣伊」の討伐を計画し、爾薩體の餘薛60余人を殺害したとされている。この爾薩體は現在の岩手県二戸市仁左平付近と考えられ、餘薛とは残党という意味合いからすると餘薛殺害の地は米代川上流・安比川上流の範囲である鹿角を示すものと考えられる。

『日本三代実録』によると、878（元慶２）年３月15日、帰順した蝦夷が秋田城やその周辺で民家を襲撃したことに端を発した「元慶の乱」では、政府は秋田城平定を目的に小野春風を陸奥鎮守将軍として出兵させた。その途中「上津野村」に入り夷俘を説得し、その後秋田営に入り鎮静した。このときに利用された街道は「陸奥路」といわれており、その街道筋が安比川・米代川上流域にあたる。これが近世においては「鹿角街道」として、さらに現代に至っては「国道282号線」として整備されていったものと考えられる。

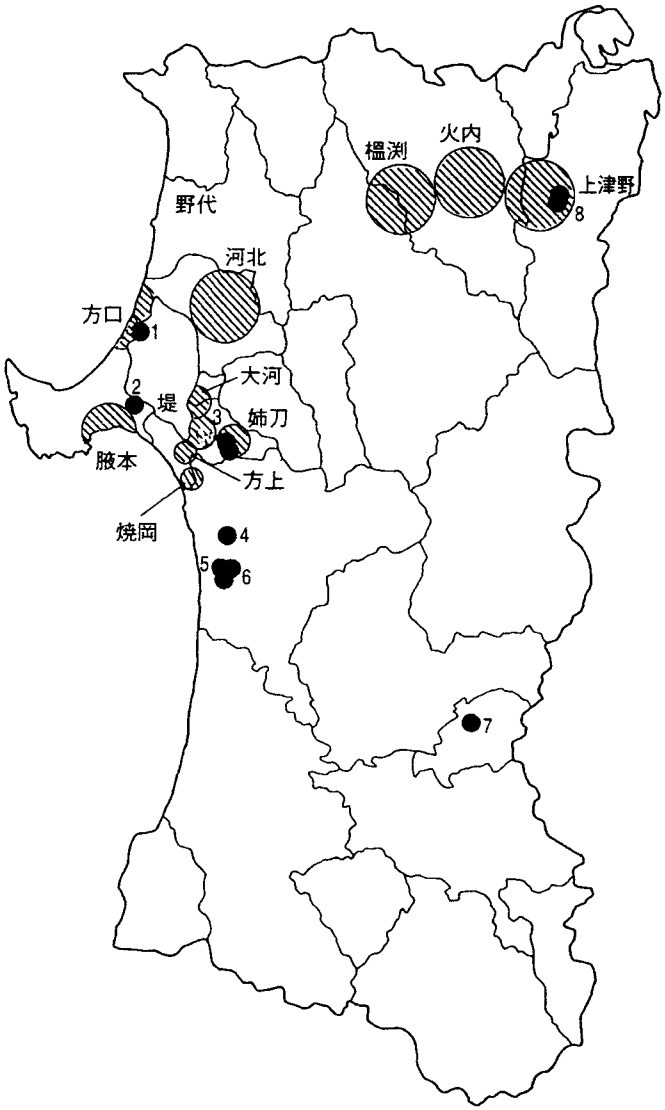
また、同年７月10日の条に「秋田城下賦地」の記載がある。火内・野代・河北（第31図）とともに「上津野」の地名も12カ村のうちの一村として書き記されている。さらに大湯環状列石がのる台地先端にある枯草坂古墳に隣接して「泉森」という地名が残されている。市史によると明治９年に「蝦夷森を泉森と改名」したという記載がある。

このように歴史書や地元に残された地名から奈良時代後半、鹿角は蝦夷の地でありながらも、律令文化の伝播や蕨手刀・石帯等の出土から律令体制に徐々に組み込まれていく過渡期とみることができる。

２．鹿角の自然環境

(1) 地　形

鹿角市は北東北のほぼ中央、日本海に注ぐ米代川上流域に位置し、北に国立公園十和田湖、南に八幡平を配し、自然に恵まれた地域である。



地名対照

上津野＝鹿角市
火　内＝大館市・比内町
榲　渕＝鷹巣町
河　北＝琴丘町・山本町
大　河＝八郎潟町
姉　刀＝五城目町
堤　　＝井川町
方　口＝若美町
腋　本＝男鹿市
方　上＝昭和町・天王町
焼　岡＝秋田市金足
※ 合併前の地名を使用

蕨手刀出土遺跡

1：えぞが台古墳……1本
2：脇本飯町　　……1本
3：岩野山古墳群……2本
4：久保台古墳　……2本
5：湯の沢 F-25 墓 …1本
6：小阿地古墳群……1本
7：石森(上中村) ……1本
8：物見坂Ⅰ遺跡……2本

※新野直吉『古代史上の秋田』に加筆

第31図　元慶の乱当時の蝦夷の村

鹿角盆地を貫流する米代川は奥羽山脈の一峰である四角岳に水源を発し、岩手県安代町田山地区を抜け、鹿角市八幡平地区に出る。ここで熊沢川を合流し、流れを北に向け、毛馬内地区で大湯川・小坂川を合流し、その流れをさらに西に向け、大館盆地へと向う。

盆地を一望するとこれら米代川、大湯川等の大きな河川とこれらの支流が「鹿の角」のように入り組みながら流れており、その様子が地名になったという説もある。これらの河川の浸食によりつくり出され、舌状台地は盆地東側の奥羽山脈の西裾に発達し、標高150m～180mを測る。大湯川左岸に形成された中通台地（通称　風張台地）には特別史跡大湯環状列石や四角岳

の西側裾野には市内でも大規模な歌内遺跡が所在する。

また、盆地西側は、森吉山を主嶺とする高森山地が縦横している。しかし大きな河川が存在しないためか舌状台地はほとんど存在せず、裾野先端に猫の額ほどの段丘地形が残されている程度である。標高は200m～150mを測り、段丘には縄文晩期の遺跡である「東在家遺跡」が所在する。

なお、鹿角市内の地形と地質については、本報告書第Ⅰ章２にその概要を記載している。

⑵ 気　候

『秋田県史』によると秋田県全体は、「ケッペン」の気候区分では亜寒帯に近い温帯多雨気候に属するといわれているが、ここ鹿角は亜寒帯の傾向が強いとされている。

資料的には古いが『秋田県気象65年報』によると最高平均気温は24度、最低平均気温は－3.1度である。雪は沿岸部より多く最深降雪量は150cmである。

しかし、平成18年から19年にかけての冬期は降雪も少なく、その量は平年の約７割程度で、しかも冬日となる日も少なく暖冬であった。

また、風向は『鹿角市史』の資料をみると冬季には南西寄り、春～秋期には西寄りの風が多く、年間を通して西風が多いことがわかる。平成15年・16年の観察資料（第２表）がこれを物語っている。年間を通じしかも夏場に東風（やませ）が多いときは農作物が不作（けがち）となるといわれている。

⑶ 遺跡を覆う堆積土

各遺跡を覆う堆積土は表土（第Ⅰ層）から地山までほぼ同じような堆積となっている。概ね第Ⅰ層：黒褐色土、第Ⅱ層：黄褐色火山灰層、第Ⅲ層：黒色土、第Ⅳ層：暗褐色土（地山までの漸位層）、第Ⅴ層：黄褐色土（基盤層）である。

黒色土中にサンドイッチ状に堆積する第Ⅱ層黄褐色火山灰層を『大湯町環状列石』では「大湯浮石層」と命名した。地質学的には「十和田ａ降下火山灰」と呼ばれるもので、その降下範囲は東北北部一円に及ぶが、特に八戸周辺に厚い堆積層を認めることができる。鹿角地域では、噴出源に近いほどこの堆積は厚く、離れるに従ってその堆積は薄くなる傾向にある。

なお、噴火年代はこれまでの発掘調査例から平安時代中頃・10世紀前半とされていたが、滋賀県比叡山延暦寺の僧侶が残した『扶桑略記』の記事から、延喜15年７月（西暦915年）とも言われている。また、太田谷内館跡では、朝鮮半島・白頭山を噴火起源とする白頭山・苫小牧火山灰の堆積が十和田ａ降下火山灰の上にわずかに黒土を挟んで確認されている。

各報告書の文章・表中で平安時代前半・後半と示しているものが見られ、これは大湯浮石降下年を区分としたものと考えられる。

第３表　鹿角市の風向

◆平成 15 年

月 風向	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計	割合%
東	2	1	3	3	2	5	10	6	4	3	1	1	41	11.2
南東	0	3	2	0	0	2	0	2	1	0	0	0	10	2.7
南	2	1	1	5	6	1	1	2	1	1	0	1	22	6.1
南西	3	4	2	4	4	5	1	4	2	1	4	3	37	10.1
西	14	8	11	6	9	4	3	6	9	13	13	14	110	30.1
北西	2	2	6	3	2	3	2	2	0	6	4	1	33	9.1
北	5	3	3	2	2	5	5	2	3	1	4	4	39	10.7
北東	0	1	3	3	2	4	6	0	3	0	0	3	25	6.8
無風	3	5	0	4	4	1	3	7	7	6	4	4	48	13.2
	31	28	31	30	31	30	31	31	30	31	30	31	365	100.0

※観測者及び観測地点：鹿角広域消防組合毛馬内分署

※観察時間：午前９時、午後１時観察。午前９時の風向きその日の代表的風向きとした。

◆平成 16 年

月 風向	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計	割合%
東	2	0	1	2	2	2	0	4	5	1	2	0	21	5.7
南東	1	1	0	1	1	2	0	3	2	1	0	1	13	3.6
南	0	1	1	2	1	2	3	1	2	0	2	0	15	4.1
南西	3	5	4	4	4	4	3	8	2	1	3	2	43	11.8
西	16	13	15	16	11	9	9	8	7	8	14	15	140	38.3
北西	0	2	4	2	3	4	3	2	1	4	4	3	32	8.7
北	2	1	3	0	1	3	3	2	4	2	0	3	24	6.6
北東	0	1	1	2	3	1	3	0	3	4	1	1	20	5.5
無風	7	5	2	1	5	3	7	3	4	10	4	6	57	15.7
	31	29	31	30	31	30	31	31	30	30	30	31	365	100.0

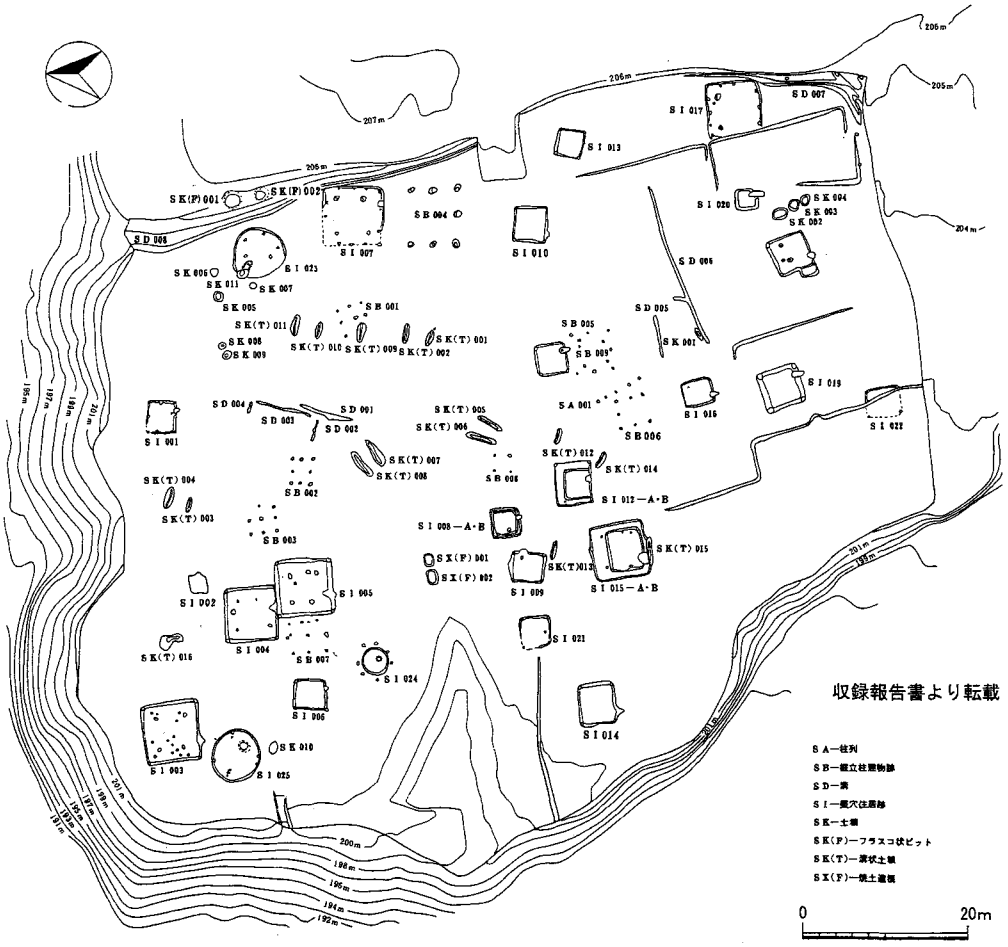
※観測者及び観測地点：鹿角広域消防組合毛馬内分署

※観察時間：午前９時、午後１時観察。午前９時の風向きその日の代表的風向きとした。

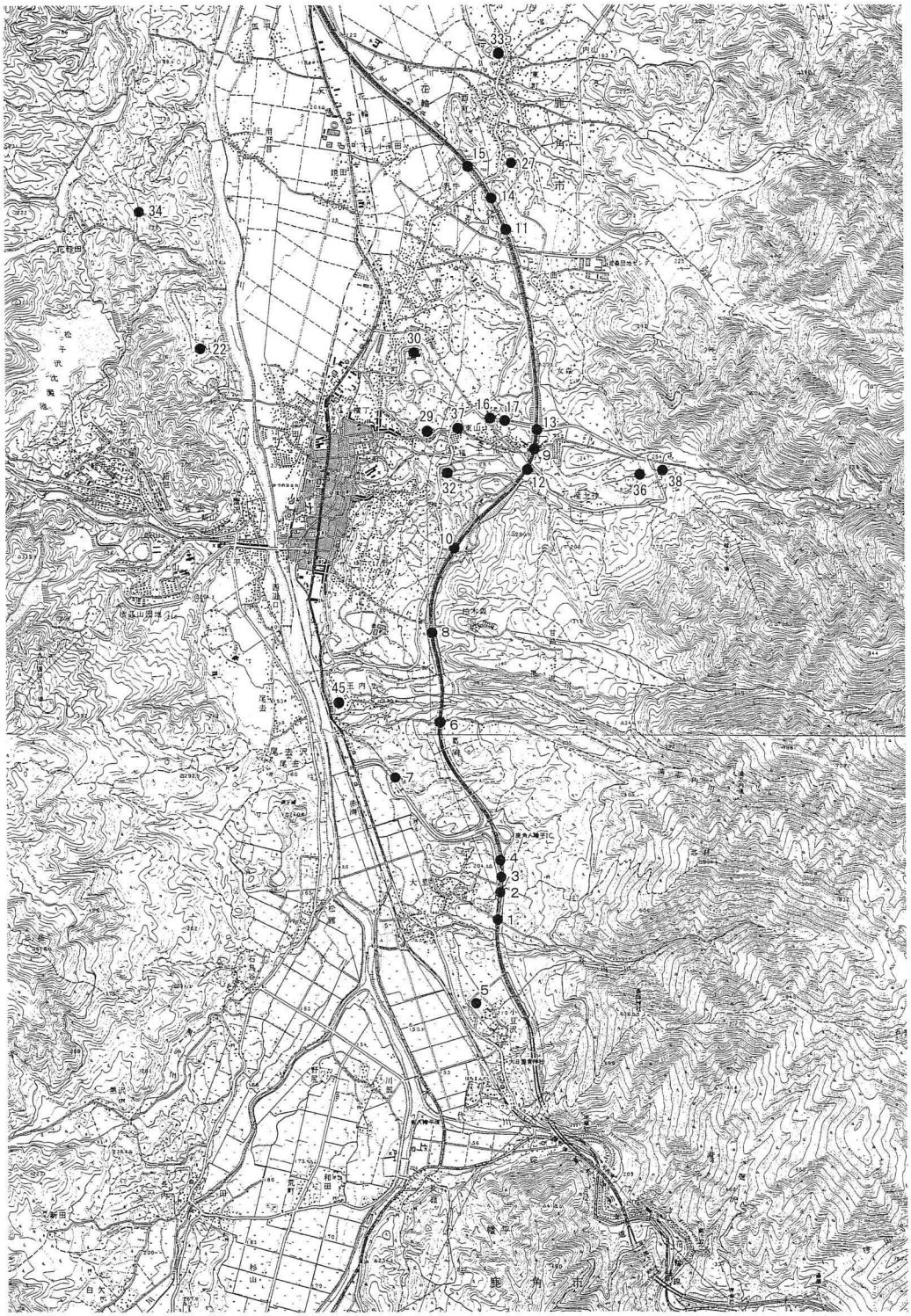
3．遺跡の立地と概要（第32～34図）

鹿角市内のいたるところには大小の河川の浸食を受けて形成された舌状台地・段丘が発達している。盆地東側、奥羽山脈の裾野には大きな舌状台地が、盆地西側には「猫の額」ほどの段丘が広がっている。遺跡はその台地・段丘の上に営まれている。

代表的な遺跡である「北ノ林Ⅰ遺跡」では、次のような立地と住居配置（第32図）となっている。遺跡の立地する台地は、奥羽山脈の一峰である四角岳の西側裾野に位置する。台地の南側には米代川の支流である歌内沢川、北側には無名の沢が「鹿の角」のように入り込んでいる。標高は200m～205mである。台地は台形状を呈し、南北100m×東西60m～80m、面積7,500㎡を測る。台地先端部から山際80m程のところに台地を区切る南北から入り込んだ沢（報告書では大溝と呼んでいる）が入り込んでいる。竪穴住居は台地中央から先端に、掘立柱建物跡は台地中央から大溝の間に多く分布している。



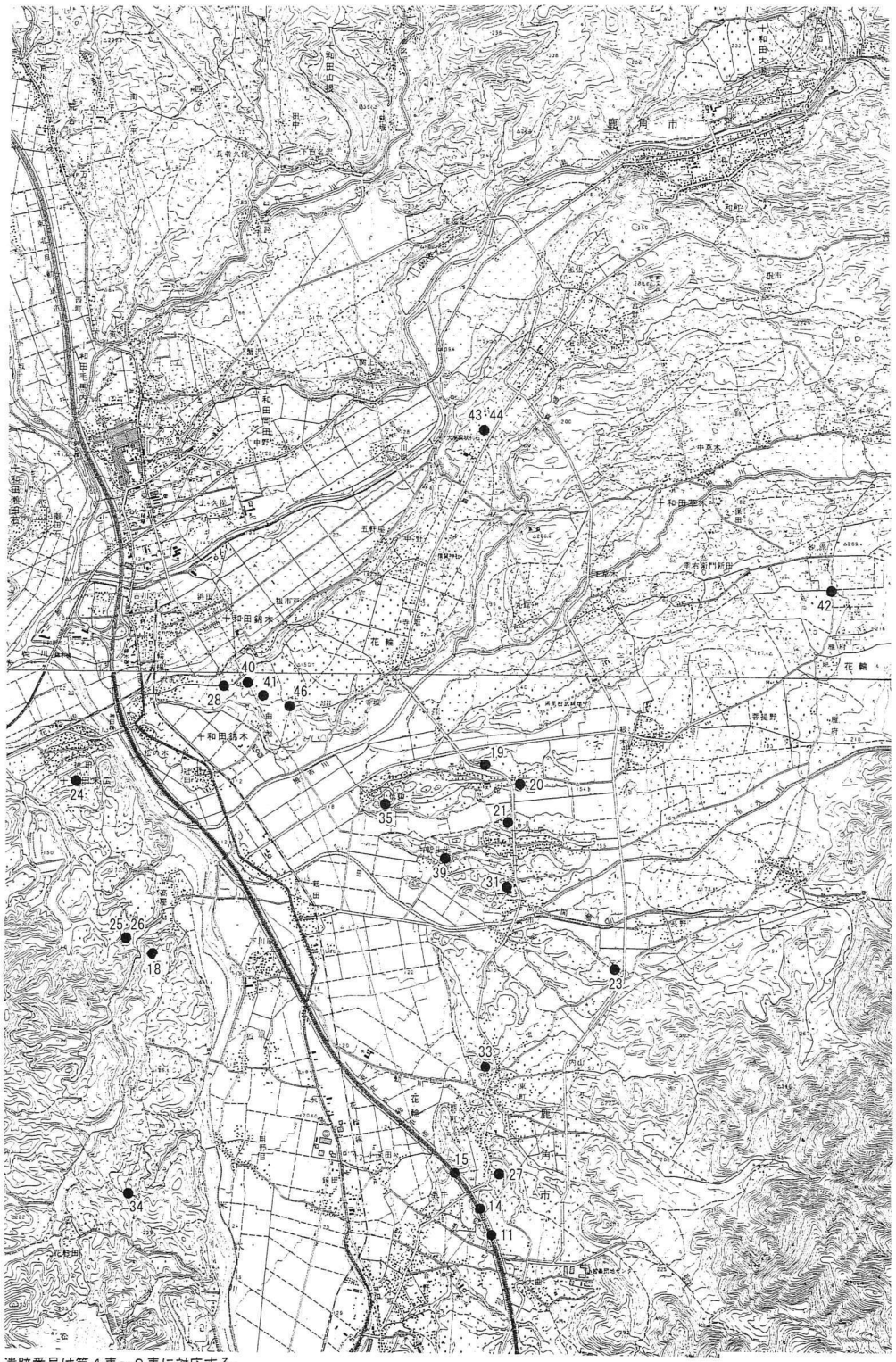
第32図　北ノ林Ⅰ遺跡



遺跡番号は第４表～９表に対応する。

0　1km

第33図　遺跡位置図(2)



遺跡番号は第４表～９表に対応する。

0　1km

第34図　遺跡位置図(3)

第４表　鹿角市内の奈良・平安時代の集落（1）

No.	遺跡名	検出遺構（単位：棟・基・条）						遺跡の立地と遺構の占地	報告書名
		竪穴住居跡	竪穴遺構	土坑	掘立柱建物跡	溝状遺構	その他		
1	歌内	49		4			1	標高215m～225mの台地に位置し、台地南側に歌内川が西流する。 集落は調査区の南側に密集するが、広範囲に遺構が広がっていることが想定される。	秋田県教育委員会　1982年 東北縦貫自動車道発掘調査報告書II
2	飛鳥平	8						標高203m前後の段丘に位置し、南北は沢によって区切られている。南側に鳥居平遺跡、北側に北の林Ⅰ遺跡が所在する。 住居は段丘先端部に密集する。	秋田県教育委員会　1982年 東北縦貫自動車道発掘調査報告書III
3	北の林Ⅰ	22			9	2		標高200m～205mの段丘に位置する。南北は沢によって区切られ、南側に飛鳥平遺跡、北側に北の林Ⅰ遺跡が所在する。 住居跡は段丘先端部に密集し、その住居群は段丘に入り込んだ沢によって後背台地と分離されている。	秋田県教育委員会　1982年 東北縦貫自動車道発掘調査報告書III
4	北の林II	11			5	11		標高200m～205mの段丘に位置する。南北は沢によって区切られ、南側に北の林Ⅰ遺跡、北側に上葛岡Ⅰ遺跡が所在する。住居は段丘全域に広がり、数棟単位に分割できる。	秋田県教育委員会　1982年 東北縦貫自動車道発掘調査報告書VI
5	小豆沢館	3						標高200m程の段丘先端に構築された小豆沢館跡の一部で「館コ屋敷」と呼ばれる。 遺構の占地は不明	秋田県教育委員会　1982年 東北縦貫自動車道発掘調査報告書VI
6	上葛岡IV	12		17				標高215m前後の台地で、遺跡北側に浦志内川が位置する。 数棟に分割される住居群が広範囲に分布する可能性が高い。	秋田県教育委員会　1982年 東北縦貫自動車道発掘調査報告書V
7	駒林	3						標高150m程の段丘先端部 小規模の集落か	秋田県教育委員会　1982年 東北縦貫自動車道発掘調査報告書V
8	一本杉	20						奥羽山脈の西裾に広がる高位段丘の先端部に位置し、標高は約210mを測る。住居は広範囲に分布するが数棟からなる群に分割される可能性がある。墨書土器が出土している。	秋田県教育委員会　1983年 東北縦貫自動車道発掘調査報告書VI

第７表　鹿角市内の奈良・平安時代の集落（4）

No.	遺跡名	検出遺構（単位：棟・基・条）						遺跡の立地と遺構の占地	報告書名
		竪穴住居跡	竪穴遺構	土坑	掘立柱建物跡	溝状遺構	その他		
28	物見坂Ⅲ	2				1		米代川・大湯川・小坂川の合流点に延びた台地に位置する。本遺跡の南側に末期古墳が存在した「枯草坂古墳」が位置する。住居は台地のほぼ中央に位置する。	秋田県教育委員会 2003 年 『物見坂Ⅲ』国道 282 号国道道路改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
29	御休堂	3						福士川の左岸に形成された台地先端に位置する。住居の密集度合いは低い。	鹿角市文化財調査資料 19 『御休堂遺跡発掘調査報告書』1981 年
30	天戸森	3						福士川右岸に形成された台地先端部。花輪第一中学校地。台地平坦部に密集することなく分布する。	鹿角市文化財調査資料 26 『天戸森遺跡発掘調査報告書』1984 年
31	高市向館跡	27	2 以上	3		3		間瀬川右岸に形成された標高 150m 程の台地。集落は台地先端に集中する傾向にある。大湯浮石の有無から 3 時期が想定される。住居跡より古い竪穴遺構が存在する。	鹿角市文化財調査資料 22 『高市向館跡発掘調査報告書』1982 年
32	下沢田	10	1	9		1		福士川の左岸に形成された標高 177m 程の台地先端。台地先端は深い溝によって切られ、これによって区切られた内部に集落が存在する。太田谷地館跡の集落占地に類似する。	鹿角市文化財調査資料 27 『下沢田遺跡発掘調査報告書』1984 年
33	地羅野	2		3				不動川の左岸に形成された標高 154m 程の台地先端。集落は調査区後方に広がる平坦部に広がる可能性がある。	鹿角市文化財調査資料 47 『地羅野館跡発掘調査報告書』1993 年
34	用野目川向Ⅲ	5		8				米代川の左岸に形成された標高 200m 程の段丘が馬の背状となった場所に位置する。調査範囲が路線幅と限定されていたが、もう少し住居数は増えるものと考えられる。	秋田県教育委員会 1989 年 『用野目川向Ⅲ遺跡』西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ
35	小枝指館跡	4						根市川の左岸に形成された舌状台地の南側斜面平坦部に位置する。館跡構築時に破壊されたものがあると考えられるがその数は少ないものと考えられる。	鹿角市文化財調査資料 44 『小枝指館跡発掘調査報告書』1992 年
36	赤坂Ｂ	15		10		3		福士川の右岸に形成された標高 240m 程の段丘平坦地に位置する。住居は北側に偏在し、東西方向に広がる可能性がある。	鹿角市文化財調査資料 48 『赤坂Ｂ遺跡』総合運動公園関連遺跡発掘調査報告書 1993 年

第８表　鹿角市内の奈良・平安時代の集落（5）

No.	遺跡名	検出遺構（単位：棟・基・条）						遺跡の立地と遺構の占地	報告書名
		竪穴住居跡	竪穴遺構	土坑	掘立柱建物跡	溝状遺構	その他		
37	花輪古館	2						福士川の右岸に形成された標高173m程の段丘、花輪古館内に所在する。分布状況から住居の密度は薄いと考えられる。	鹿角市文化財調査資料51 『花輪古館跡発掘調査報告書』1994年
38	赤坂A (1次) (2次)	 12 4		 17 4		 2		福士川上流の右岸に形成された標高 250m の段丘南側斜面に位置する。 大湯浮石層を切って構築される住居が存在する。住居の密集度は高く、広範囲に広がる可能性が高い。	鹿角市文化財調査資料50・53 『赤坂A遺跡』『赤坂A遺跡(2)』第52回国体冬季スキー競技会施設整備事業に伴う発掘調査報告書』1994 年・95年
39	新斗米館跡(第Ⅱ次)	1						間瀬川の右岸に形成された舌状台地に位置する。 住居の密集度は低い。	鹿角市文化財調査資料16 『新斗米館跡』鹿角市新斗米館跡第Ⅱ次発掘調査報告書
40	物見坂Ⅲ	1						大湯川・米代川の合流点に向うように延びた標高144m程の台地先端部に位置する。本遺跡の西側直下にある広範囲な平坦地に県教委が調査を行った物見坂Ⅲ遺跡がある。立地的な要因から別個の遺跡と考えられる。	鹿角市文化財調査資料79 『物見坂Ⅲ遺跡・物見坂Ⅱ遺跡(1)』中山間地域総合整備事業関連発掘調査報告書2005年
41	物見坂Ⅱ	1						大湯川・米代川の合流点に向うように延びた標高144m程の台地先端部に位置する。物見坂Ⅲ遺跡とは小さな沢をはさみ位置する。平成17年度調査継続	鹿角市文化財調査資料79 『物見坂Ⅲ遺跡・物見坂Ⅱ遺跡(1)』中山間地域総合整備事業関連発掘調査報告書2005年
42	菩提野	12						冷水川の上流、奥羽山脈の裾野に形成された扇状地に位置する。報告書の分布図からは密集していた様子が看取される。 大湯環状列石の構築時期を探るため、現地を踏査している。 12棟の凹地があったと聞いていたようであるが、確認できたのは6棟であった。このうち9号と命名した住居を調査している。	文化財保護委員会 『大湯町環状列石』1953年
43	大湯環状列石周辺遺跡	2						大湯川の左岸に形成された標高180m程の舌状台地。 周辺遺跡として周知されている北端に分布する。その密度は薄い。	鹿角市文化財調査資料7 『大湯環状列石周辺遺跡分布調査報告書』1977年

第９表　鹿角市内の奈良・平安時代の集落（6）

No.	遺跡名	検出遺構（単位：棟・基・条）						遺跡の立地と遺構の占地	報告書名
		竪穴住居跡	竪穴遺構	土坑	掘立柱建物跡	溝状遺構	その他		
44	大湯環状列石	27		26		4	円形周溝6	大湯川の左岸に形成された標高180m程の舌状台地。 竪穴住居の密集地域は2箇所。万座環状列石北東側及び史跡の北東端。 万座環状列石の西側台地縁に入り込んだ沢頭を中心に住居が分布する。円形周溝（円墳）は集落の北側に離れて位置する。また、史跡の北東端に入り込んだ沢頭を中心に竪穴住居の分布が確認されている。 平安時代当時、環状列石の立石が露頭していたものと考えられ、環状列石を壊していない。ただし、配石遺構が地中に埋もれていて視野に入らない場合は、住居構築の際壊している。 環状列石発見当時の史跡並びに周辺を調査した浅井小魚氏の日誌によると台地縁や猿賀神社周辺には「土饅頭」を呈した土盛りが点在していたという記事が見られる。	鹿角市文化財調査資料33・38 『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書』1988年・1990年 鹿角市文化財調査資料38 『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書』1990年 鹿角市文化財調査資料49 『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書』1994年 鹿角市文化財調査資料58 『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書』1997年 鹿角市文化財調査資料61 『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書』1998年 鹿角市文化財調査資料72 『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書』2003年
45	玉内	5		5				米代川の支流である黒沢川の右岸に形成された174m程の舌状台地先端部に位置する。調査地後方に平坦地が続くことから住居が広がることが予想される。 本遺跡の南側斜面下に「玉内環状列石」が所在する。	秋田県文化財調査報告書第171号 『玉内遺跡発掘調査報告書』一般国道282号改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査1988年
46	鹿角沢Ⅱ	7		1			焼土遺構	米代川と大湯川が合流点に向かうように延びた台地先端の南側縁に位置する。遺跡南側の台地斜面の平場に枯草坂古墳がある。住居は沢頭を囲むように分布している。	2007年3月2日刊行
	確認総数	443	5	196	18	32			

4．遺跡占地の共通性

竪穴住居跡が確認された台地及び占地状況の共通点は次のとおりである。

① 現在の町並みが所在する沖積層より一段高い舌状台地・段丘上に分布する。台地先端や段丘縁に占地する。台地先端を区切るように堀や沢を入れ、集落を後方台地と分離するものもある。所謂「防御性集落」といわれるものが平安時代後半に姿を現す。

② 台地・段丘下に、飲料水の確保場所となる河川または斜面に湧水がある。

③ 地形的な要因から景観が良い。

5．竪穴住居跡の観察

(1) 平面形

確認された443棟のうち、方形を呈するものが374棟である。このほかに隅丸方形（２棟)、長方形（20棟)、略方形（２棟)、隅丸方形（１棟）と報告されている。重複・削平などによって形態が不明なものが44棟で、基本的には方形を基調とする。

また、赤坂Ａ遺跡第01号住居のように住居外に張り出した「出入り口」的な施設を持つものもある。

(2) 長軸規模と面積

第９表は、長軸の規模を示したもので長軸301cm～500cmに210棟（48%）が分布する。長軸801cmを超えるものは稀で６棟（1.3%）である。最も小さいものは柴内館跡・第623号住居跡の225cm、最も大きいものは柴内館跡・第450ａ・ｂ号住居跡の933cmである。

このうち奈良時代のものは、菩提野遺跡の第九号住居跡が長軸720cmと最も大きく、それ以外は中型のもので長軸600cmを超えるものは確認されていない。

第10表　竪穴住居跡長軸分布

（単位：m）

長軸規模	201～300	301～400	401～500	501～600	601～700	701～800	801～900	901以上	不明 計測値なし
棟数	41	108 (1)	102 (1)	64 (1)	34	15 (1)	3	3	67 (13)
比率	9.38	24.71	23.34	14.64	7.78	3.43	0.68	0.68	15.33

カッコ内は奈良時代の竪穴住居跡

第10表は住居床面積を示したものである。このうち262棟が記載されている。面積11㎡～20㎡に104棟（23.8%）を中心にその前後に集中する。最も小さいものは妻の神Ⅰ遺跡・第132号住居跡の5.05㎡、最大は高市向館跡・第14号住居跡の77.1㎡である。面積記載がないが柴内館跡・第450ａ・ｂ号住居跡を単純計算すると推定で81㎡、24.5坪強となる。

歌内遺跡・太田谷内館跡・高市向館跡など多くの遺跡では40㎡以下に収まるが、北の林Ⅰ遺跡のように41㎡を超えるものが高い割合を示す遺跡も存在する。このことからすると40㎡を境に、それ以下を小型・中型に、それ以上を大型、柴内館跡のように壁長９ｍ・面積80㎡超は特大ということができる。

第11表　竪穴住居跡床面積分布

（単位：㎡）

面積規模	10以下	11～20	21～30	31～40	41～50	51～60	61～70	71～80	81以上	不明・計測値なし	備　考
棟数	66	104（2）	46	29	10	3	2	2（1）	0	175（14）	括弧内は奈良時代の竪穴住居数
比率	15.11	23.79	10.53	6.65	2.29	0.69	0.46	0.46	0	40.02	

(3) 柱配置

柱配置に関しては、基本的に次の７つの配置（第35図）がみられる。

配置１：住居四隅に柱穴が穿たれるもの。

長軸規模３ｍ～８ｍ範囲のものに見られるが、４ｍ～６ｍのものに集中する。中規模なものから小規模の住居跡に使用される柱配置といえる。中ノ崎遺跡ＳＩ117、下沢田遺跡ＳＩ08が最大級で、中ノ崎遺跡ＳＩ106が最小である。

２：住居四隅とその柱穴間に一個の柱穴が穿たれるもの

柴内館跡ＳＩ450ａ・450ｂが最も大きく長軸9.33ｍを測る。長軸が４ｍ～６ｍ規模のものに集中する。小規模なものから大規模なものに使用される柱配置であるが中規模なものに多用される傾向にある。

３：住居四隅とその柱穴間に複数個の柱穴が穿たれるもの

用野目川向Ⅲ遺跡ＳＩ06が最も大きく長軸8.00ｍを測る。長軸規模６ｍ～８ｍに集中し、中規模なものから大規模のものに多用される傾向にある。

４：住居四隅とその対角線上に柱穴が穿たれるもの

高市向館跡ＳＩ14が最も大きく長軸9.36ｍを測る。５ｍ以下のものはなく９ｍ以上を測るものまで切れ目なく存在する。７ｍ規模のものに集中し、大規模なものに多用される傾向にある。

５：対角線上に配置されるもの

地羅野館跡ＳＩ03が最も大きく長軸6.80ｍを測る。４ｍ～７ｍの中規模でもやや大型ものに使用される傾向にある。

６：配置３と配置５の要素を持つもの

赤坂Ｂ遺跡ＳＩ07が最も大きく長軸7.20ｍを測る。長軸６ｍ以下のものは存在しな

い。中規模から大規模のものに使用される傾向にある。柱配置から最も上屋を乗せる構造として強固な造りと判断される。

7：柱穴が確認されないもの。または柱穴（柱穴状ピット）は確認されるが、配置が定かでないもの

数量的に圧倒的に多い。上屋を持つためには柱穴は不可欠なものである。

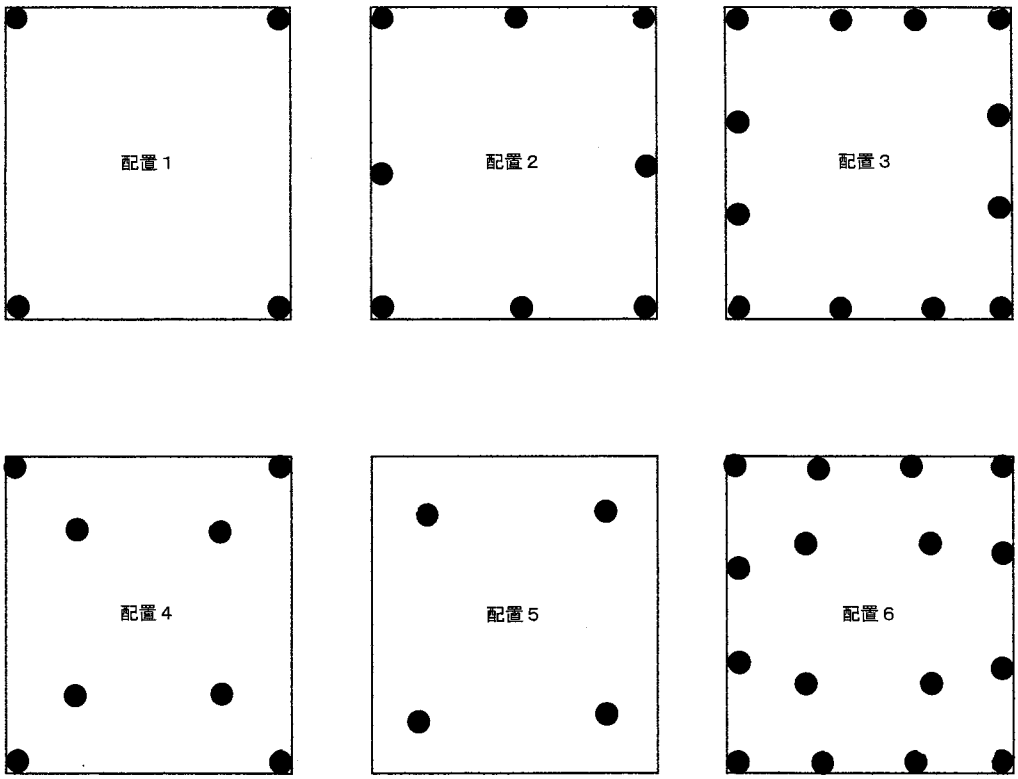
床面や壁際で数個の柱穴が確認されるが配置が特定できないものがあり、精査の際、見落としたものもあったものと考えられる。

8：その他

壁外に柱を持つものがある。

第12表　柱配置ごとの数量

柱配置	配置１	配置２	配置３	配置４	配置５	配置６	配置７	配置８
棟数	86	53	37	22	9	7	224	5



第35図　柱配置模式図

第13表　住居跡の規模と柱配置

	3m以下	4m以下	5m以下	6m以下	7m以下	8m以下	9m以下	9m以上	規模不明
配置1	11	22	29	18	2	2			2
配置2	2	10	16	11	6	1		2	5
配置3	1	3	4	10	9	4			6
配置4			2	4	10	3	2	1	
配置5		3	1	3	2				
配置6				1	4	2			

(4) カマドの位置（主軸方向）

一棟に複数のカマドが付設されているものもある。最も多くカマドが造られた住居は下乳牛遺跡02号住居で４基（期）である。カマド一つ一つを一棟としてその数値を拾い上げていくと総数456棟となる。このうちカマドが併設されるもの317棟、地床炉８棟、不明・確認できなかったもの131棟である。

カマドは壁際に位置する。柱状の川原石を袖部・天井部の心材とし、これに粘土を貼り付けたものが大半を占める。煙道部は短く屋外に立ち上がる所謂「関東型」と呼ばれるものが多い。煙道部が長く半地下式のものやトンネル式の「東北型」と呼ばれるものもあり、半地下式のものとしては高市向館跡第31号住居跡、トンネル式のものは下乳牛遺跡第02号住居跡で、煙出部には底部が欠損した甕形土器が設置されていた。

本来、壁際に付設されるものであるが、下沢田遺跡第04号竪穴住居のように煙道を持たず、カマド本体のみが壁際から離れて付設されるものもある。

カマドの付設される位置を確認すると、南壁に付設されるものが207棟と圧倒的に多く、これに見せかけの南壁（南東壁）を加えると222棟となる。これに続くのは東壁で、西壁・北壁は極端に数値が小さくなる。

集落を構成する住居跡で、最も南壁にカマドが付設される割合が高いのは、北の林Ⅰ遺跡・北の林Ⅱ遺跡・赤坂Ａ遺跡であり、まとまりを見せないのが高市向館跡・中の崎遺跡である。これら集落の営まれた台地を観察するといずれも奥羽山脈の裾野に広がり、河川によって形成された西側に延びた舌状を呈する台地で、特異な地形的な変化は認められない。

以前、カマドが作られる位置を風向き・規制の有無によるものか検討した。風向きについては平成15年・16年（第２表）と当時（奈良・平安時代）の風向きについては比較しようがないが、風向きは西・南西側が数値的に多い。単純に考えていくとカマド燃焼部で火が焚かれ、発生した熱や煙は煙道（煙突）を通り屋外と排気される。南壁にカマドが付設された場合、南風が吹くと煙道にその風が入り込む可能性は高く、熱や煙は室内へと流れ込む結果となる。平成

15年度・16年度の観察によると南風が吹く回数は少なく、このようなことからカマド構築場所は風向きと関連している可能性が高い。

第14表　カマドの位置

上段：棟数　下段：割合%

東壁	南東壁	南壁	南西壁	西壁	北西壁	北壁	北東壁	床面	不明
60	15	207	11	13	0	7	4	8	131
13.15	3.29	45.40	2.42	2.85	0	1.53	0.86	1.72	28.78

(5) 出土遺物

出土遺物としては、土師器、須恵器、木製品、鉄製品、石製品が出土している。

土師器には坏、甕、鍋の器形が見られる。坏は非ロクロ成形とロクロ成形の二通りが見られ、いずれにも黒色処理が施されたものもみられる。また、小平遺跡からは「寺・日願」と墨書された坏が出土しており、平安時代前半にはすでに鹿角の地に仏教が伝播していたことをうかがい知る事ができる。甕は長胴のものとずんぐりしたものがあるほか、把手付土器がみられる。丸底の坏には長胴のもので、頸部に段を有した甕が伴っている。また、底部に特色を持ったもので「砂底」と呼ばれるものも存在する。

現在、市内で最も古い時期に当たるものは物見坂Ⅲ遺跡（鹿角市教委調査分）、小枝指館跡出土のものである。

須恵器には坏、甕、壺、皿の器形が見られ、出土量としては甕が多いものと考えられる。歌内遺跡からは須恵器甕胴部破片を利用した硯１点が出土している。地羅野館跡や赤坂Ａ遺跡からは「五所川原産」の特徴をもったものも出土している。

木製品の出土量は極めて少なく、中の崎遺跡・下乳牛遺跡から櫛各１点、下乳牛遺跡から皿が出土している程度である。

鉄・銅製品には蕨手刀、紡錘車・刀子や帯金具がある。蕨手刀は物見坂Ⅰ遺跡で検出された古墳周湟より出土したもので、石井分類のⅡ類にあたる。

石製品には砥石・石帯・がある。

(6) 構築（廃棄）時期

歴史時代の遺構の構築・廃棄時期を知る上で大湯浮石層の存在がある。

大湯浮石の降下年は『扶桑略記』の記事から、延喜15年７月（西暦915年）と言われており、少しずつであるが実年代が明らかにされている。

遺構確認の際、浮石層上面で遺構確認を行うと浮石層を切って構築されるもの、浮石層を除去すると窪地に浮石が堆積しているものが観察される。原則的に前者は浮石降下以後、後者は降下前に構築されたものと判断し、前者を平安時代後半、後者を前半と表記しているものが多

い。

遺構の構築・廃棄時期については、大湯浮石を鍵層としながら、出土遺物や重複関係、さらに他遺跡の調査事例を参考に時期を決定する必要がある。

6．鹿角市内の奈良・平安時代の竪穴住居跡の特徴

鹿角市内で発見された奈良・平安時代の竪穴住居の特徴を列記し、まとめとする。

(1) 占地の共通性

舌状台地・段丘上に所在し、しかも台地・段丘縁に占地する。現在、市街地が所在する沖積地からは当該時期の集落は確認されていない。平安時代後半になると台地を区切るように堀を入れ、その中で生活を営む所謂「防御性集落」が出現する。

(2) 平面形

方形を基本とする。出入り口状の施設を有するものもある。

(3) 柱配置

柱配置には８つのパターンがみられる。配置１が最も多いが、四隅に配置された柱で上屋を支える構造となっている。小規模な住居であれば上屋を支える強度を持つものと考えられるが壁長が７m以上を測るものがある。桁を支えるには柱間隔が余りにも広く、四隅の柱間に存在していた柱若しくは痕跡を見逃していた可能性を指摘できる。

(4) カマドの位置（主軸方向）

南壁もしくは見せかけの南壁（南東壁・南西壁）に付設されるものが多い。カマド袖の芯材として一般的には川原石を用いている。土器破片を心材とするものや地山を掘り残し袖部とするものは極めて少ない。

煙道は短く壁外に短く立ち上がるものと、煙道が長くトンネル式又は半地下式のものがある。後者には川原石や白色粘土を用いるものや煙出部に土師器甕を設置するものも見られる。数量的には前者が圧倒的に多い。

(5) 出土遺物

遺構内・遺構外からの出土量は他地域と比較し、少ないものと考えられるが、土師器、須恵器、鉄・銅製品、木製品、石製品と各種である。

(6) 構築（廃棄）時期

大湯浮石層（十和田ａ降下火山灰）を鍵層としている。この鍵層があるためか時代決定は大まかになっているところがある。土師器・須恵器の編年、他遺跡の調査事例と照らし合わせ、時代・時期を決定していく必要がある。

（藤井安正）

第15表　竪穴住居跡観察表（1）

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模（cm）	カマド		柱穴（cm）		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・（面積）	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
1	歌内	SI001	方形	580×516 (30.0)	南壁の東寄り 崩壊		確認できず		N−0−W		土師器・須恵器・砥石・鉄鏃・トチの実 壁溝がほぼ一巡、焼失家屋	平安後半
2	歌内	SI002	方形	410×508 (17.9)	南西隅に焼土		配置不明		N－16.5－E	自然堆積 火山灰層有	土師器・砥石 SX007→SI002	平安後半
3	歌内	SI003	方形	394×390 (16.5)	南西隅に焼土		確認できず		N−6−W		土師器 SI004→SI005→SI003	平安後半
4	歌内	SI004	方形		確認できず		確認できず		N−9−W		SI004→SI005→SI003	平安後半
5	歌内	SI005	方形	375×355	南壁の東寄り 地下式の煙道	粘土 川原石			N−3−W		土師器 壁溝がほぼ一巡 SI004→SI005→SI003	平安後半
6	歌内	SI006	方形	360×390 (14.1)	東壁の南寄り	粘土 川原石	配置不明				土師器 壁溝がほぼ一巡 北壁・南壁の一部に張り出し	平安後半
7	歌内	SI007	方形	390×370 (19.0)	南壁の東寄り 崩壊	粘土	四隅に配置	四隅ピット ×22～58	N－29.5－E		土師器 壁溝がほぼ一巡か	平安後半
8	歌内	SI008	方形	290×270 (7.2)	東壁の北寄り 崩壊	粘土 川原石	北壁に２個		N－38.5－E		土師器 壁溝がほぼ一巡	平安後半
9	歌内	SI009A	方形	595×570 (33.1)	南壁の東寄り 崩壊		四隅と対角線上	四隅ピット ×23～30 対角線上ピット ×51～	N−10−W		土師器・砥石 壁溝がほぼ一巡 SI009A→SI009B→SK020	平安後半
10	歌内	SI009B	方形	682×584 (39.7)	南壁の西寄り 崩壊	粘土 川原石	四隅と対角線上	四隅ピット ×23～37 対角線上ピット ×37～51	N−10−W		壁溝がほぼ一巡か SI009A→SI009B→SK020 (SI009A 東側を拡張)	

第16表　竪穴住居跡観察表（2）

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模（cm）	カマド		柱穴（cm）		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
11	歌内	SI010A	方形	424×346 (14.5)	南壁の西寄り 良好に残る	粘土 川原石	床面に7個 配置不明		N−13−E		南・北・東壁の一部に壁溝 カマドはSI010Bでも使用される SI010A→SI010B→SI010C	平安後半
12	歌内	SI010B	方形	532×434 (21.4)	SI010Aのものを使用		四隅	四隅ピット ×29〜10	N−17.5−E		北・東壁の一部に壁溝 カマドはSI010Aのものを使用 SI010A→SI010B→SI010C	平安後半
13	歌内	SI010C	方形	600×575 (34.3)	南壁の東寄り 崩壊		四隅	四隅ピット ×19〜33	N−12.5−E		土師器・穂摘具・鉄釘 SI010A→SI010B→SI010C	平安後半
14	歌内	SI011	方形	330×320 (10.2)	北壁の東寄り 良好に残る	粘土	不明	カマドの煙出しを囲んで5つのピット	N−0.5−W		土師器 壁溝はカマドを除き一巡	平安後半
15	歌内	SI012	方形	425×380 (16.6)	南壁の東側隅	粘土 川原石 支脚あり	床面に5個 配置不明		N−23−E		土師器 SI012→SK022	平安後半
16	歌内	SI013	方形	286×268 (7.7)	東壁の南寄り	粘土	四隅とその中間	四隅ピット ×12〜32	N−47−W		土師器 南壁に三角状の張り出し C14測定値　930±75y BP 壁溝はカマドを除き一巡	平安後半
17	歌内	SI014	方形	470×438 (17.5)	南側床面に形跡有り		不明		N−21−E	浮石を含む	土師器・鉄釘 西側を除き壁溝あり 住居内に小土坑3基あり	
18	歌内	SI015	方形	675×580 (38.8)	南壁の東寄り 良好	粘土 川原石	四隅と対角線上の8本	四隅ピット ×30〜43 対角線上ピット ×20〜54	N−20−E	浮石含む	土師器・須恵器・穂積具 焼失家屋 南・東壁際に壁溝あり SI015→SK019	
19	歌内	SI016	方形	350×346 (19.1)	南壁の東寄り 良好	粘土 川原石	なし		N−28−E		土師器・須恵器 カマドを除き各壁際に全周 SI016→SI018・SI016→SK015	

第17表　竪穴住居跡観察表（3）

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模（cm）	カマド		柱穴（cm）		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・（面積）	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
20	歌内	SI017	方形	420×360 (15.4)	東壁の北寄り	粘土 川原石	床面にピット 配置不明		N—61.5— W		土師器・須恵器・砥石	平安後半
21	歌内	SI018	方形	377×342 (34.0)	南壁の東寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N—9.5— W		土師器・紡錘車 C14測定値　1300±80y BP SI016・SK009→SI018	平安後半
22	歌内	SI019	方形	320×315 (10.3)	南壁の西寄り	粘土 土師器 片	壁際より確認 配置不明		N—27.5— E	浮石含む	土師器 C14測定値　1060±85y BP 壁溝はカマド部分を除き断続的に一巡 SI019→SD010	平安後半
23	歌内	SI020	方形	380×350 (13.5)	南壁の東寄り	粘土 川原石	床面に3個 配置不明		N—15—E	浮石含む	土師器 SI020→SD007	平安後半
24	歌内	SI021	方形	555× (　)	重複により確認されず		四隅とその中間、	四隅ピット ×30～40	N—17—E		土師器 SI021→SD006・007	平安後半
25	歌内	SI022	方形	436×364 (16.6)	南壁の西寄り	粘土 川原石	隅より少し離れた対角線上	対角線上ピット ×20～33	N—19—E	カマド内に浮石混入	土師器 SK(F)033→SI022→SD006	平安後半
26	歌内	SI023A	方形	372×354 (13.2)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×19～41	N—18—E	カマド内に浮石混入	土師器・砥石・小刀 SI023B→SI023A(増築)	平安後半
27	歌内	SI023B	方形	484×450 (22.8)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×30～36	N—19—E	カマド内に浮石混入	SI023B→SI023A(増築)	
28	歌内	SI024	方形	585×580 (33.2)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅と対角線上	四隅ピット ×26～49 対角線上ピット ×13～38	N—16—E		土師器 SK(F)033→SI024→SD007・012	
29	歌内	SI025	方形	315×310 (10.2)	南壁の東寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N—7.5— W		土師器・鉄釘 SI025→SI026	

第18表　竪穴住居跡観察表（4）

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模（cm）	カマド		柱穴（cm）		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
30	歌内	SI026	方形	476×432 (20.7)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅と対角線上	四隅ピット ×23～53 対角線上ピット ×39～40				平安後半
31	歌内	SI027	方形	400×375 (16.5)	南壁の東寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N−8.5−W		土師器・穂摘具 焼失家屋 SI027→SD003・004・015	平安後半
32	歌内	SI028	方形	235×260 (5.9)	南壁の東寄り	粘土 川原石	床面にピット 特定できず		N−15−E		土師器 焼失家屋 SI028→SD012・013・015	平安後半
33	歌内	SI029	不整形		中央付近に焼土		床面にピット 特定できず				土師器 攪乱により破壊が著しい	平安後半
34	歌内	SI030A	方形	275×270 (8.6)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×18～29	N−7.5−W		土師器	平安後半
35	歌内	SI030B	方形	435×430 (20.2)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×20～33	N−3.5−W	浮石含む	カマド内より木製品 焼失家屋 本住居はSI030Aを拡張したもの 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
36	歌内	SI031A	方形	460×448 (　)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×20～30	N−1−W		土師器・砥石・金属器 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
37	歌内	SI031B	方形	554×532 (　)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×6～8		浮石含む	土師器 本住居はSI031Aを拡張したもの 壁溝は東壁際・北西角にある	
38	歌内	SI032	方形	370×310 (11.8)	南壁の東寄り 煙道が長い	粘土 川原石	床面にピット (壁外か)		N−19−E	カマド内に浮石	土師器 SI032→SD006	
39	歌内	SI033	方形	370×350 (13.3)	南壁の東寄り	粘土 川原石	床面に1個のピット		N−13.5−E		土師器・鉄器	

第19表　竪穴住居跡観察表（5）

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模（cm）	カマド		柱穴（cm）		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
40	歌内	SI034	方形	480×445 (21.8)	南壁の西寄り		床面に 2 個のピット		N−22−E		土師器・鉄器 カマド部分を除き一巡	平安後半
41	歌内	SI035	方形	480×400 (19.5)	南壁の東寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N−19.5−E		土師器・紡錘車	平安後半
42	歌内	SI036	方形	320×308 (10.7)	南壁の東寄り	粘土 川原石	床面に 2 個のピット 柱配置特定できず				土師器 北壁際に壁溝あり	平安後半
43	歌内	SI037	方形	278×280 (8.3)	南壁の東寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N−10−W		土師器	平安後半
44	歌内	SI038	方形	340× (　)	南壁の東寄り		床面に 1 個のピット		N−10−E		土師器 農道・排水溝により北東部を消失	平安後半
45	歌内	SI039	方形	325×320 (10.8)	南壁の東寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N−26−E		土師器	平安後半
46	歌内	SI040	方形	309×256 (8.9)	南壁の東寄り	粘土	確認できなかった		N−25.5−E		土師器・穂摘具	平安後半
47	歌内	SI041	方形	520×450 (23.0)	南壁の東寄り 東壁の南寄り		四隅とその中間	四隅ピット ×23〜31	N−29−E	堆積土上層に浮石	カマド2基、新旧不明 土師器・紡錘車 焼失家屋 カマド部分を除き一巡	平安後半
48	歌内	SI042	方形	316× (　)			確認できなかった				農道により南側半分を消失	平安後半
49	歌内	SI045	方形				床面に 4 個のピット 柱配置特定できず				SI045→SD030・SK064	平安後半
50	歌内	SI046	方形	250×243 (12.7)	南壁の東寄り	粘土 川原石					土師器	平安後半

第20表　竪穴住居跡観察表（6）

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模（cm）	カマド		柱穴（cm）		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・（面積）	位置	構築材	配置	規模（径×深さ）				
51	歌内	SI047	方形	305×265 （8.4）	南壁の東寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N−31−E	浮石含む	土師器・垂飾品 壁溝はカマド・同西側、北西コーナーを除き確認された	平安後半
52	歌内	SI048	方形	335×345 （12.1）	南壁の東寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N−28.5−E		土師器 壁溝は南壁を除く各壁際で確認	平安後半
53	歌内	SI049	方形	260× （　）	南壁のほぼ中央	粘土 川原石	確認できなかった		N−26−E		土師器	平安後半
54	歌内	SI050	方形		南壁		四隅	四隅ピット ×50〜54	N−22−E		土師器 カマド部分を除き一巡か 南側を排水溝で消失	平安後半
55	歌内	SI051	方形	434× （　）			床面に2個 柱配置特定できず				土師器・硯(須恵器片を転用) 壁際に接して壁溝を確認 住居北側を消失	平安後半
56	飛鳥平	SI003	方形	560×548 （32.63）	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅		N−7−E	浮石含む	土師器 壁溝はカマド東側一部と北壁の一部を除き一巡	
57	飛鳥平	SI004	方形	487× （　）	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅＋南壁外にピット		N−3−E		土師器・石器 カマド部分を除き一巡	平安後半
58	飛鳥平	SI009	方形	443×439 （20.91）	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅とその中間		N−11−E		土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡 東側南半を拡幅	平安後半
59	飛鳥平	SI011	方形	497×485 （21.56）	南壁の西寄り	粘土 川原石	壁溝内に5個のピット 配置特定できず		N−15−W		土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
60	飛鳥平	SI012	方形	376×323 （12.83）	東壁の北寄り	粘土 川原石			N−5−W		C14測定値　790±75y BP	平安後半

第21表　竪穴住居跡観察表（7）

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模（cm）	カマド		柱穴（cm）		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・（面積）	位置	構築材	配置	規模（径×深さ）				
61	飛鳥平	SI013	方形	660×648 （42.15）	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅と対角線上		N−11−W	浮石含む	壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
62	飛鳥平	SI035	方形	375×202 （7.10）	南壁の西寄り	粘土 川原石			N−21−E	浮石含む	土師器	平安後半
63	飛鳥平	SI041	方形	412× （　）						浮石含む		平安後半
64	北の林Ⅰ	SI001	方形	387×361 （12.6）	南壁の東寄り	粘土	四隅とその中間	四隅ピット ×13〜54	N−0−S		土師器、鉄さい 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
65	北の林Ⅰ	SI002		×　（　）	南壁							平安後半
66	北の林Ⅰ	SI003	方形	697×695 （47.2）	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅と対角線上	四隅ピット ×60〜72 対角線上ピット ×57〜81	N−3−W	浮石含む	土師器、須恵器、砥石、鉄さい 壁溝はカマド部分を除き一巡 焼失家屋	平安
67	北の林Ⅰ	SI004	方形	626×625 （39.9）	南壁のやや東寄り	粘土	四隅と対角線上	四隅ピット ×30〜37 対角線上ピット ×10〜34	N−2−W	カマド内に浮石粒混入	土師器、須恵器、砥石、鉄さい 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI005→SI004	平安
68	北の林Ⅰ	SI005	方形	674×650 （44.3）	南壁の西寄り	粘土	四隅と対角線上	四隅ピット ×36〜55 対角線上ピット ×36〜60	N−3−W		土師器、鉄さい 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI005→SI004	平安
69	北の林Ⅰ	SI006	方形	373×353 （13.6）	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×28〜30	N−1−W		土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安

第22表　竪穴住居跡観察表（8）

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模（cm）	カマド		柱穴（cm）		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・（面積）	位置	構築材	配置	規模（径×深さ）				
70	北の林Ⅰ	SI007	方形	740×700 (49.4)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅とその間に3～4個のピット、対角線上	四隅ピット ×28～30 対角線上ピット ×51～72	N－1－E		重複・拡張の可能性がある SI007→SD008	平安
71	北の林Ⅰ	SI008A	方形	285×281 (8.4)	南壁の東寄り		四隅	四隅ピット ×21～26	N－5－W		壁溝はカマド部分を除き一巡 SI008A→SI08B	平安
72	北の林Ⅰ	SI008B	方形	352×337 (12.1)	南壁の東寄り	粘土	四隅	四隅ピット ×28～46	N－5－W	浮石多量混入	土師器、鉄さい 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI008A→SI08B	平安
73	北の林Ⅰ	SI009	方形	392×357 (13.4)	東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×25～31	N－91.5－E	浮石粒含む	土師器、須恵器 壁溝はカマド部分を除き一巡	
74	北の林Ⅰ	SI010	方形	417×396 (16.7)	南壁の西寄り	粘土	四隅	四隅ピット ×20～33	N－5－E		土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡 煙道が長い	
75	北の林Ⅰ	SI011	方形	364×360 (14.0)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×20～30	N－7.5－W	浮石粒混入	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡	
76	北の林Ⅰ	SI012A	方形	351×348 (12.0)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×10～50	N－1－W		土師器、鉄さい 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI012A→SI012B	
77	北の林Ⅰ	SI012B	方形	521×518 (22.6)	南壁の東寄り	粘土	四隅	四隅ピット ×20～40	N－1－W		土師器、須恵器 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI012A→SI012B カマドは継続使用	
78	北の林Ⅰ	SI013	方形	343×322 (10.8)	南壁の西寄り	粘土	四隅	四隅ピット ×37～52	N－13－E		壁溝はカマド部分を除き一巡	
79	北の林Ⅰ	SI014	方形	462×446 (21.0)	南壁の西寄り	粘土	四隅	四隅ピット ×36～46	N－13－E		土師器、須恵器 壁溝はカマド部分を除き一巡	

第23表　竪穴住居跡観察表（9）

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模（cm）	カマド		柱穴（cm）		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・（面積）	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
80	北の林Ⅰ	SI015A	方形	502×460 (19.9)	南壁の西寄り	粘土	四隅	四隅ピット ×30～42	N−7−W		土師器、須恵器 壁溝はカマド部分を除き一巡	
81	北の林Ⅰ	SI015B	方形	665×642 (43.6)	南壁の西寄り		四隅と対角線上	四隅ピット ×26～44 対角線上ピット ×36～57	N−13−W	浮石粒混入	壁溝はカマド部分を除き一巡 SK(T)003→SI015A→SI015B	
82	北の林Ⅰ	SI016	方形	361×350 (10.9)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×39～59	N−13−W	浮石粒混入	土師器、鉄さい、直刀 壁溝はカマド部分を除き一巡 焼失家屋	
83	北の林Ⅰ	SI017	方形	655×645 (41.8)	南壁の東寄り		四隅とその間に3個のピット、対角線上	四隅 ×21～56 対角線上 ×60～65	N−2−E	浮石粒混入	土師器	
84	北の林Ⅰ	SI018	方形	451×437 (22.1)	南東壁の南西寄り	粘土	四隅	四隅ピット ×16～33	N−21.5−W		土師器、鉄さい、 壁溝はカマド部分を除き一巡	
85	北の林Ⅰ	SI019	方形	470×468 (22.0)	南東壁の北西寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット ×31～57	N−13−W	浮石粒混入	土師器、須恵器、鉄さい、 壁溝はカマド部分を除き一巡	
86	北の林Ⅰ	SI020	方形	233×227 (6.0)	南壁の東寄り	粘土 黒色土			N−9−W	浮石層有り	土師器、須恵器	
87	北の林Ⅰ	SI021	方形	364×352 (13.2)	南壁の西寄りに焼土		四隅	四隅ピット ×14～42			土師器、須恵器	
88	北の林Ⅰ	SI022	方形	423×396 (15.6)			四隅	四隅ピット ×3～38			土師器、鉄さい	
89	北の林Ⅱ	SI001A	方形	452×447 (19.84)	南壁の東側	粘土 土師器	四隅		S−1−W	浮石粒混入	土師器(砂底あり) 壁溝はカマド部分を除き一巡	
90	北の林Ⅱ	SI001B	方形	452×447 (19.84)	南壁の西側		四隅		S−1−W		カマドは壁溝を埋め構築される。 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI001A→SI001B	

第24表　竪穴住居跡観察表(10)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
91	北の林II	SI002	方形	441×432 (19.44)	南壁の西寄り		四隅		S−1−W		土師器(木葉痕) 壁溝はカマド部分を除き一巡 焼失家屋	
92	北の林II	SI003	方形	452×406 (17.38)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅		S−6−W		土師器(木葉痕) 壁溝はカマド部分を除き一巡	
93	北の林II	SI004	方形	638×634 (40.48)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅、西壁と北壁溝にピット		S−6−E	カマド粘土に浮石粒	土師器(木葉痕) 壁溝はカマド部分を除き一巡	
94	北の林II	SI005	方形	342×326 (10.0)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅と各中間		S−5−W	浮石粒を多量に含む	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡	
95	北の林II	SI006	方形	457×450 (22.66)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅と各中間		S−11−E	浮石粒を多量に含む	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡 床の北東側に土坑	
96	北の林II	SI007	方形	457×450 (22.66)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅と各中間		S−7.45−W	浮石粒を多量に含む	土師器 壁溝は北壁・東壁・西壁一部 煙道部が長い	
97	北の林II	SI008	方形	336×309 (11.16)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅と各中間		S−2−W	浮石粒を多量に含む	土師器、須恵器 壁溝はカマド部分を除き一巡	
98	北の林II	SI009	方形	468×422 (19.2)	南壁の東寄り		四隅		S−6.3−E	浮石粒混入	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡	
99	北の林II	SI010	方形	371×350 (14.28)	南壁の西隅	粘土 川原石	四隅		S−3−E	浮石粒混入	土師器(木葉痕) 壁溝はカマド部分を除き一巡	
100	北の林II	SI013	方形	351×342 (10.0)	南壁の南西隅		四隅		S−10−E		壁溝はカマド部分を除き一巡	
101	小豆沢館	SI002	方形	232×226 (5.74)	付設されず				N−56−W		壁溝は一巡する可能性あり	平安
102	小豆沢館	SI004	方形	542×443 (20.54)	付設されず		特定できず		N−52.3−E			平安

第25表　竪穴住居跡観察表(11)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
103	小豆沢館	SI005	方形	416×400 (16.34)	付設されず		四隅とその中間		N－46.3－E		壁溝は一巡する可能性あり	平安
104	上葛岡IV	SI001	方形	514×486 (24.64)	東壁の北寄り		四隅とその中間	四隅ピット 25～29×23～27 中間ピット	N－99.5－W	堆積土・カマド粘土に浮石粒混入	土師器、須恵器、炭化堅果類(トチ) 壁溝はカマド部分を除き一巡	
105	上葛岡IV	SI002	方形	442×440 (18.72)	東壁の東寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット 14～30×22～37	N－2－W	堆積土・カマド粘土に浮石粒混入	土師器、土製玉 壁溝はカマド部分を除き一巡	
106	上葛岡IV	SI003	方形	498×498 (24.84)	西壁の北寄り	粘土	確認できず		N－108.5－E	浮石粒混入	土師器、鉄製品 壁溝はカマド部分を除き一巡	
107	上葛岡IV	SI004	方形	448× (　　)	東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット 15～20×20	N－83－W	浮石粒混入	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡	
108	上葛岡IV	SI005	方形	342×282 (8.08)	東壁の南寄り		住居外 特定できず		N－94－W		土師器 煙道部が長い	平安
109	上葛岡IV	SI006	方形	370×350 (12.08)	南壁の中央	粘土 川原石	確認できず		N－107－W	浮石粒混入	土師器	
110	上葛岡IV	SI007A	方形	456×449 (20.24)	東壁の南寄り		特定できず		N－85－W	浮石粒混入	土師器、鉄製品 SI007A→SI007B	
111	上葛岡IV	SI007B	方形	702×684 (39.6)	東壁の南寄り		特定できず		N－83.6－W	浮石粒混入	カマドはSI007Aと共用 SI007A→SI007B	
112	上葛岡IV	SI008	長方形	531×435 (20.0)	南壁の東・西寄りに2基		四隅	四隅ピット 20～24×11～27	N－7－E	浮石粒混入	南壁の東寄りのカマドが古い 土師器 煙道が長く、トンネル式	
113	上葛岡IV	SI009	長方形	565×464 (24.4)	東壁の南寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット 10～25×14～26	N－2－E	浮石粒多量混入	土師器、鉄製品 SI010→SI009	

第26表　竪穴住居跡観察表(12)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
114	上葛岡Ⅳ	SI010	方形	852×828 (64.16)	SI010 により崩壊		四隅と対角線上	四隅ピット 20～40×8～19 対角線上ピット 21～58×23～45	N−2.5−W		SI010→SI009 土師器、須恵器 壁溝はカマド部分を除き一巡か	
115	上葛岡Ⅳ	SI011	方形	564×530 (26.64)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット 19～23×12	N−1−E	浮石粒混入	土師器	
116	上葛岡Ⅳ	SI012	方形	596×504 (29.2)	南壁の西寄り		四隅	四隅ピット 24～33×14×25	N−6−E	浮石粒混入	土師器	
117	駒林	SI001	方形	370×358 (12.3)	南壁の東寄り	粘土 川原石			N−16−W	浮石粒混入	土師器、須恵器、砥石、フイゴ羽口 煙道が長く、トンネル式	
118	駒林	SI002	方形	470×438 (18.54)	南壁の西寄り	粘土 川原石	各隅の壁外	34～40×35×43	N−0.5−E	浮石粒混入	土師器、フイゴ羽口 煙道が長く、トンネル式 焼失家屋	
119	駒林	SI003	方形	388×332 (11.98)	南壁の西寄り	粘土 川原石	確認できず		N−19.5−W	浮石粒混入	土師器	
120	一本杉	SI003	方形	420.5×272.5 (16.56)	床面中央に地床炉		四隅とその中間に2個ずつ		S−24−E	浮石粒混入	土師器(墨書あり)	
121	一本杉	SI004	方形	318.5×249.0 (7.98)	南壁の東寄り	粘土 川原石	特定できず		S−3−W	浮石粒多量混入	土師器(墨書あり)、陶磁器 北東隅の床面壁寄りに壁溝あり	平安後半
122	一本杉	SI005	方形	329.5×318.5 (9.92)	南壁の東寄り 南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間		S−3.3−E	浮石粒多量混入	土師器 カマドの作り替えあり 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
123	一本杉	SI006	方形	587.5×562.5 (33.86)	南壁の西寄り	粘土 土師器	四隅		S−1−W	浮石粒多量混入	土師器	平安後半
124	一本杉	SI007	方形	552.5× (　　)	破壊されていた		四隅とその中間に数個ずつ				土師器	

第27表　竪穴住居跡観察表(13)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
125	一本杉	SI009	方形	341.5×320.5 (11.65)	付設されず		四隅とその中間				土師器	
126	一本杉	SI010	方形	《732.0×450.0》 (　　)	床面北東側に2基の地床炉		四隅とその中間に2個ずつ				土師器 調査担当者は柱配置から4棟の住居の存在を考えている。	
127	一本杉	SI011	方形	479.5×407.5 (19.65)	付設されず		四隅とその中間に数個ずつ		S—1—W	浮石粒混入	土師器、須恵器 SI012→SI011	
128	一本杉	SI012	方形	371.0×365.5 (13.63)	南壁の中央(重複により崩壊)		特定できず		S—3.3—W		土師器(墨書あり) SI012→SI011	
129	一本杉	SI013	方形	378.5×354.5 (14.02)	南壁の東寄り	粘土 川原石			S—2.3—W	浮石粒多量混入	土師器(墨書・砂底あり)、須恵器 焼失家屋 東・西壁際の一部に壁溝あり	
130	一本杉	SI014	方形	× (　　)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間		S—2—E		土師器、須恵器 壁溝はカマド部分を除き一巡か	
131	一本杉	SI015	方形	《315.5×254.5》 (9.08)	不明		四隅とその中間に数個ずつ		S—2—E		土師器	
132	一本杉	SI016	方形	453.5× (　　)	不明		四隅				土師器、陶磁器	
133	一本杉	SI017	方形	305.5×296.0 (8.70)	不明		特定できず				土師器、須恵器	
134	一本杉	SI018	方形	× (　　)	不明		特定できず			浮石粒多量混入	土師器	
135	一本杉	SI019	方形	× (　　)	不明		特定できず			浮石粒多量混入	土師器、須恵器 焼失家屋	
136	一本杉	SI020	方形	× (　　)	不明		四隅とその中間				土師器	
137	一本杉	SI021	方形	348.5× (　　)	不明		四隅とその中間				東壁際に壁溝	

第28表　竪穴住居跡観察表(14)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
138	一本杉	SI030	方形	306.5×279.5 (8.76)	東壁の北寄り 東壁の南寄り		特定できず		S－38.30－ E	浮石粒混入	土師器(砂底あり) 東寄りのカマドは撹乱により崩壊	
139	一本杉	SI031	方形	345.5×334.5 (10.44)	南壁の西寄り		特定できず		S－3－W	浮石粒混入	土師器、須恵器 東壁際に壁溝	
140	案内III	SI001	方形	525×508 (27.93)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅ピット 18～26×38～53 中間ピット 17～31×38～43	S－9－W	浮石多量混入	土師器(砂底あり)・須恵器・トチの実 壁溝はカマド部分を除くほぼ一巡 本住居のみが東壁にカマドが作られる	
141	案内III	SI002	方形	312×277 (9.38)	南壁の西寄り		住居外か		N－16－E	浮石多量混入	土師器・須恵器 廃棄後に焼失	平安前半
142	案内III	SI006	方形	319×318 (10.88)	東壁の南寄り	粘土 川原石			N－102 －E	浮石多量混入	土師器 床面に土坑2基 壁溝は南西隅のみ	
143	案内III	SI009	方形	452×377 (15.48)	西壁の北寄り	粘土 川原石			S－94－W	浮石ブロック混入	土師器・須恵器・フイゴ羽口	平安後半
144	案内III	SI010	方形	578×575 (31.64)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット 30～35×52～57	N－10.5 －E	浮石多量混入	土師器・須恵器・金属器(鉄鏃・鉄斧) 炭化物 焼失家屋、カマドの煙道が長い 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI011・012→SI010	
145	案内III	SI011	方形	403× (　　)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅か		N－8.5 －E	浮石多量混入	土師器(砂底あり)・須恵器・穂摘具 カマドの煙道が長い SI011・012→SI010	
146	案内III	SI012	方形	253×237 (5.89)	南壁の西寄り	粘土 川原石			N－10.5 －E	浮石多量混入	カマド煙道はトンネル式 SI011・012→SI010	
147	案内III	SI014	方形	502×451 (21.03)	南壁の西寄り	粘土 川原石	不明		N－6.5 －E	上層に浮石が多量混入	土師器(砂底あり)・須恵器・砥石・鉄製品 焼失家屋 壁溝はカマド部分を除き一巡	

第29表　竪穴住居跡観察表(15)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
148	案内III	SI015		371×329 (9.06)	南壁の西寄り	粘土 川原石				浮石多量混入	土師器(砂底あり)	
149	案内III	SI016	方形	386×305 (11.17)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅ピット 中間ピット 18～31×26～37	N−3.5−E	浮石多量混入		平安後半
150	案内III	SI017	方形	385×363 (13.54)	南壁の西寄り	粘土 川原石	特定できず		N−2.5−E	浮石混入	土師器 カマド煙道はトンネル式	平安後半
151	案内III	SI018	方形	378×348 (12.78)	南壁の東寄り	粘土 川原石			N−8−W	浮石多量混入	土師器(砂底あり) 壁溝は東・西・北壁際に造られる	平安後半
152	案内III	SI019	方形 (台形)	383×354 (12.41)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット 15～31×12～26	N−5−E	浮石多量混入	土師器(砂底あり)・須恵器・鉄製品 壁溝は東・西・北壁際に造られる	
153	中の崎	SI001	方形	658×631 (41.1)	南西壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に3本		N−21−E	浮石多量混入	土師器、鉄製品、羽口 壁溝はカマド部分を除き一巡	
154	中の崎	SI002	方形	531×500 (27.2)	南西壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間、対角線上		N−34−E	浮石混入	土師器(砂底あり)、砥石、櫛 壁溝はカマド部分を除き一巡	
155	中の崎	SI003	方形	325×338 (12.4)	南西壁の西寄り	粘土 川原石	四隅		N−52−E	浮石混入	土師器(砂底あり) 壁溝はカマド部分を除き一巡 溝状遺構が付設される	
156	中の崎	SI008	方形	282×254 (7.8)	南西壁の南寄り	粘土 川原石	確認できず		N−45−W	浮石多量混入	土師器(砂底あり) カマド煙道部はトンネル式	
157	中の崎	SI009	方形	450×441 (19.7)	南壁の西寄り	粘土	四隅		N−28−E	上層に浮石混入	土師器 壁溝は南・東壁際に造られ、北東隅から壁外に伸びる	
158	中の崎	SI012	方形	528×515 (28.9)	南西壁の南寄り	粘土 川原石	四隅とその中間		N−31−E	浮石多量混入	土師器、須恵器、砥石 焼失家屋 壁溝はカマド部分を除き一巡	

第30表　竪穴住居跡観察表(16)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
159	中の崎	SI018	方形	240×230 (5.2)	西壁の北端		確認できず		N−40−E	浮石混入	土師器 住居北端から溝状遺構が伸びる	
160	中の崎	SI034	方形	244×265 (7.1)	不明		四隅			上層に浮石混入	土師器	
161	中の崎	SI101	方形	446×452 (20.1)	不明		四隅		N−14−E		土師器 焼失家屋	
162	中の崎	SI102	方形	527×480 (24.8)	西壁の北寄り	粘土 川原石	四隅		N−27−E	カマド際に浮石	土師器(砂底あり) 壁溝はカマド部分を除き一巡	
163	中の崎	SI103	方形	409×380 (14.3)	南壁の東寄り	粘土 川原石	不明		N−32−E		土師器 各壁際に断続して壁溝	
164	中の崎	SI104	方形	377×318 (13.2)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅とその中間		N−21−E		土師器、石製品 焼失家屋 壁溝はカマド部分を除き一巡	
165	中の崎	SI106	方形	235×195 (4.5)	西壁の中央	粘土 川原石	四隅?		N−29−E	浮石混入	土師器	
166	中の崎	SI107	方形	608×540 (35.2)	南壁の中央		四隅とその中間		N−28−E		土師器(鍋あり) 焼失家屋 壁溝はカマド部分を除き一巡	
167	中の崎	SI108	方形	371×362 (15.2)	南壁の西寄り		四隅		N−32−E	浮石多量混入	土師器、砥石 壁溝はカマド部分を除き一巡	
168	中の崎	SI112	方形	632×608 (43.9)	南壁の西寄り 東寄り	粘土 川原石	四隅と対角線上		N−38−E	浮石混入	土師器 カマドは西寄り→東寄り、 壁溝はカマド部分を除き一巡	
169	中の崎	SI113	方形	300×285 (10.0)	西壁の北寄り		確認できず		N−40−E	浮石混入	土師器　　煙道が長い 東壁際に壁溝あり	
170	中の崎	SI117	方形	730× (　)	不明		四隅		N−32−E		土師器	

第31表　竪穴住居跡観察表(17)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
171	中の崎	SI117´	方形	497× (　)	不明		四隅		N−31−E		土師器	
172	中の崎	SI301	方形	435×420 (19.5)	南西壁の西寄り	粘土 川原石	四隅		N−29−E		土師器	
173	妻の神Ⅰ (Ⅰ郭)	SI101	方形	× (　)	確認できず		不明				土師器、須恵器 SI101´・SI110→SI101	
174	妻の神Ⅰ (Ⅰ郭)	SI101´	方形	× (　)	確認できず		不明				土師器 空堀に切られる SI101´・SI110→SI101	
175	妻の神Ⅰ (Ⅰ郭)	SI102	方形	450×427 (19.8)	確認できず		不明				土師器・砥石	
176	妻の神Ⅰ (Ⅰ郭)	SI103	方形	531× (　)	なし		不明				土師器・羽口 壁溝は西壁際にみられる SI103→SI105	
177	妻の神Ⅰ (Ⅰ郭)	SI105	方形	397× (　)	なし		不明				土師器 壁溝は東西壁際にみられる SI103→SI105	
178	妻の神Ⅰ (Ⅰ郭)	SI106	方形	408×370 (16.6)	南壁の西寄り とやや東寄り	粘土 川原石	不明		N−24−E		土師器 壁溝は各壁際に断続して	
179	妻の神Ⅰ (Ⅰ郭)	SI107	方形	636×545 (34.0)	なし		不明				土師器	
180	妻の神Ⅰ (Ⅰ郭)	SI108	方形	× (　)	東壁の南寄り	粘土 川原石	四隅とその中間		N−88−W	浮石混入	土師器(鍋あり) 北壁際に壁溝あり C14測定　1210±80y BP	
181	妻の神Ⅰ (Ⅰ郭)	SI109	方形	× (　)	なし						もう一棟重複するSI109´	
182	妻の神Ⅰ (Ⅰ郭)	SI110	方形	410× (　)	なし						土師器	

第32表　竪穴住居跡観察表(18)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
183	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI121	方形	575×511 (33.7)	東壁のやや西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間		N−59−W	浮石混入	土師器、把手付土器 北側で重複する土坑は出入口か	平安後半
184	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI123	方形	380×345 (15.7)	なし		不明			地山土混入	土師器	
185	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI124	方形	344×250 (9.0)	なし		不明				土師器	
185	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI125	方形	355× (　)	確認できず		なし					
186	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI126	方形	455× (　)						浮石多量混入	土師器 SK134・SD013→SI126	平安後半 同時期か
187	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI127	方形	×395 (　)	北壁		不明				土師器・須恵器 床面が2段構造となる。重複の可能性あり	
188	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI129	方形	205× (　)	確認できず		確認できず				土師器	
189	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI131	方形	513× (　)	南壁の東寄り		四隅と				土師器	
190	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI131´	方形	× (　)							土師器	
191	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI132	方形	250×232 (5.05)	なし		不明				土師器	
192	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI133	方形	× (　)	確認できず		不明				土師器	
193	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI137		× (　)							壁の一部が確認されたのみ	
194	妻の神Ⅰ (Ⅰ期)	SI138		× (　)							壁の一部が確認されたのみ	

第33表　竪穴住居跡観察表(19)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
195	妻の神Ⅰ (Ⅱ郭)	SI002	方形	× (　)	確認できず		不明				土師器	
196	妻の神Ⅰ (Ⅱ郭)	SI003	方形	699×639 (40.0)	北側の西寄り		四隅とその中間			浮石混入	土師器、把手付土器、須恵器、 木器、炭化米 SI005・006→SI003→SI008 C14測定　970±75y BP	
197	妻の神Ⅰ (Ⅱ郭)	SI005	方形	317× (　)	確認できず		四隅				SI005・006→SI003→SI008	
198	妻の神Ⅰ (Ⅱ郭)	SI006	方形	320× (　)	確認できず		確認できず				SI005・006→SI003→SI008	
199	妻の神Ⅰ (Ⅱ郭)	SI007	方形	440× (　)	東壁の北寄り		不明				土師器、須恵器 南壁際に壁溝あり SI007→SI008	
200	妻の神Ⅰ (Ⅱ郭)	SI008	方形	667×595 (48.4)	北東壁の中央	粘土 川原石	四隅とその中間・対角線上	いずれも掘り込みが深い	N−47−E		土師器、把手付土器 SI007→SI008 壁溝はカマド部分を除き一巡	
201	妻の神Ⅰ (Ⅱ郭)	SI009	方形	× (　)	東壁の北寄り		確認できず		N−68−W	浮石多量混入	土師器 SI009´→SI009	
202	妻の神Ⅰ (Ⅱ郭)	SI009´	方形	440× (　)	東壁の北寄り	粘土 川原石	確認できず		N−51−W		土師器、把手付土器 SI009´→SI009	
203	妻の神Ⅰ (Ⅱ郭)	SI020	方形	457× (　)	東部に地床炉						土師器	
204	孫右ェ文館	SI001	方形	312×298 (9.97)	東壁の北寄り	粘土 川原石	確認できず		N−19−W		土師器 焼失家屋	平安後半
205	案内Ⅰ	SI007	方形	472×461 (22.74)	南壁の西寄り	粘土 川原石	確認できず		N−4−E		土師器　煙道が長い 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
206	妻の神Ⅱ	SI001	方形	456×414 (19.781)	南東壁の南寄り	粘土 川原石	不明		N−21−W	堆積中に浮石層あり	土師器 SI002→SI001	平安前半

第34表　竪穴住居跡観察表(20)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
207	妻の神II	SI002	方形	614×612 (36.551)	南東壁の南寄り	粘土 川原石	四隅と東西壁の中間		N−21−W	浮石多量混入	土師器　焼失家屋 SI025→SI002　煙道が長い 壁溝はカマド部分を除き一巡	
208	妻の神II	SI003	方形	353×350 (12.64)	南壁の西寄り	粘土 川原石	不明		N−21−W	浮石混入	土師器、鉄製品 焼失家屋 壁溝は北東隅の壁に沿って存在	平安後半
209	下乳牛	SI01	方形	850×780 (　)	南壁の西寄り				S−N	堆積中に浮石層あり	土師器、木製品(皿・櫛)、石帯 焼失家屋	平安前半
210	下乳牛	SI02	方形	420×400 (　)	北壁の中央 東壁の中央 南壁の西寄りに2基	粘土 川原石 土師器					土師器 焼失家屋 カマドAを意識し、床面を2段構造とする。カマド煙道はトンネル式	
211	案内IV	SI01	方形	430×350 (11.4)	南壁のほぼ中央		不明		N−13−E		土師器 焼失家屋の可能性あり	
212	案内IV	SI03	方形	560×560 (32.6)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅		N−125−W	浮石をわずかに混入	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡	
213	案内IV	SI06	方形	320× (　)	確認できず		確認できず			堆積中に浮石層あり		
214	案内IV	SI09	方形	430×400 (17.3)	東壁の南寄り		不明		N−55−E	浮石をわずかに混入	土師器 カマドの煙道が長い	
215	案内V	SI02	方形	325×3.21 (12.69)	東壁の北寄り	粘土 川原石	確認できず		N−88−W	浮石混入		
216	案内V	SI03	方形	356×303 (10.79)	東壁の北寄り	粘土 川原石	不明		N−85−W		土師器　焼失家屋 壁溝はカマド部分を除き一巡すると考えられる	

第35表　竪穴住居跡観察表(21)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
217	案内V	SI05	方形	250× (　　)	東壁の北寄り	粘土 川原石	不明		N−87−E	浮石多量混入	土師器	
218	高屋館跡	SI03	方形	420×353 (　　)	南東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅	四隅ピット 19〜30×17〜41	N−113.5−E	浮石多量混入	土師器・須恵器 壁溝はカマド部分を除き一巡 白頭山火山灰が堆積	平安前半
219	鳥野遺跡	第1号	方形	350× (　　)	北壁のほぼ中央	粘土 川原石				浮石堆積層あり	土師器・紡錘車 煙道はトンネル式	奈良後半
220	源田平遺跡	第1号	方形	445×405 (　　)	東壁の南寄り	粘土 川原石	東側壁際と床面に各2個	東側壁際ピット ×40〜60 床面ピット ×55〜60	N−35−E	浮石堆積層あり	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安前半
221	源田平遺跡	第2号	方形	650×580 (　　)	東壁の南寄り	粘土 川原石	東側壁際と床面に各2個	東側壁際ピット ×45〜 床面ピット ×55〜70	N−50−W	浮石堆積層あり	土師器・砥石・鉄製品 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安前半
222	小平遺跡	第4号	方形	410×400 (　　)	南壁の西寄り	粘土 川原石	確認されなかった			浮石堆積層あり	土師器(墨書あり　元・日願・寺)	平安前半
223	堪忍沢遺跡	SI01	方形							浮石粒混入	土師器 壁溝が確認されている。	平安後半
224	堪忍沢遺跡	SI02	方形							浮石粒混入	土師器 壁溝が確認されている。	平安後半
223	堪忍沢遺跡	SI03	方形	350×370 (　　)	東壁の北寄り	粘土 川原石	確認されなかった			浮石粒混入	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
224	堪忍沢遺跡	SI04	方形	700× (　　)	東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅とその中間			全層に浮石粒混入	土師器・須恵器・羽口・鉄製品 焼失家屋 壁溝は東・北壁際につくられる。 床面にL字の溝	平安後半

第36表　竪穴住居跡観察表(22)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
225	堪忍沢遺跡	SI05	方形	270× (　　)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅			浮石粒混入	土師器	平安後半
226	堪忍沢遺跡	SI06	方形	470× (　　)	南東壁の東寄り	粘土 川原石	四隅			浮石粒混入	土師器・砥石・刀子 壁溝は東・北壁際にある	平安後半
227	御野遺跡		方形	350× (　　)	南東壁		対角線上				土師器・須恵器 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安前半
228	神田遺跡		方形	330× (　　)	東壁						土師器(墨書あり) 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安前半
229	太田谷内館跡	SI01	方形	270×260 (7.00)	西壁やや南寄り	粘土 川原石	不明				SI02・07→SI01	平安末葉
230	太田谷内館跡	SI07	長方形	315×265 (8.3)			四隅とその中間も				土師器(把手付土器)、須恵器、 南壁・西壁際に壁溝 SI02・07→SI01、焼失家屋	平安末葉
231	太田谷内館跡	SI02	長方形	260×200 (5.2)	西壁	粘土 川原石	不明				SI02・07→SI01、SI17とは不明	平安末葉
232	太田谷内館跡	SI17					不明				土師器 SI02と重複	平安末葉
233	太田谷内館跡	SI12	方形	275×240 (6.6)	西壁の北寄り	粘土	四隅				土師器 SI11・45→SI12→SK14	平安末葉
234	太田谷内館跡	SI11	長方形	430×365 (15.7)			四隅とその中間				土師器、フイゴ羽口、鉄製品、 SI13・15→SI11→SI12→SK14	平安末葉
235	太田谷内館跡	SI13					不明				SI13・15→SI11→SI12	平安末葉
236	太田谷内館跡	SI45	長方形	260×200 (5.2)			四隅				須恵器、フイゴ羽口	平安末葉
237	太田谷内館跡	SI16					不明				SI16→SI11	平安末葉

第37表　竪穴住居跡観察表(23)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
238	太田谷内館跡	SI23	方形	640×625 (40.0)	東壁 (複数あり)	粘土 川原石	四隅、対角線上とその中間に数個	×70～90		浮石粒混入	遺跡の中で最も新しいものと予想 SI25・42→SI24→SI23 土師器、須恵器、フイゴ羽口、鉄製品	平安末葉
239	太田谷内館跡	SI24					四隅とその中間に数個				土師器 SI25・42→SI24→SI23	平安末葉
240	太田谷内館跡	SI25					不明				土師器 SI25・42→SI24→SI23	平安末葉
241	太田谷内館跡	SI42	方形	295×270 (8.0)			四隅				遺跡内で中でも古い段階のものと想定 SI25・42→SI24→SI23	平安末葉
242	太田谷内館跡	SI21					不明				SI20・52→SI21	平安末葉
243	太田谷内館跡	SI20					不明				須恵器、鉄製品 焼失家屋、SI20→SI21・52→44	平安末葉
244	太田谷内館跡	SI52	方形	300×280 (8.4)			不明				手捏ね土器 SI52→SI44	平安末葉
245	太田谷内館跡	SI44	長方形	440×320 (14.1)	東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅と南・西壁の中間				土師器、把手付土器、須恵器、鉄器 SI20→SI21・52→44→SI22	平安末葉
246	太田谷内館跡	SI22					不明				須恵器 SI20→SI21・52→44→SI22	平安末葉
247	太田谷内館跡	SI27	隅丸長方形	510×450 (23.0)			四隅	四隅 ×50～60			鉄器(鋤) 焼失家屋	平安末葉
248	太田谷内館跡	SI54					四隅とその中間	四隅 ×30～40				平安末葉
249	太田谷内館跡	SI132					四隅とその中間					平安末葉
250	太田谷内館跡	SI29	長方形	350×295 (10.3)	床面中央東寄り	粘土 川原石	不明				土師器、フイゴ羽口、鉄器 SI106→SI29	平安末葉

第38表　竪穴住居跡観察表(24)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
251	太田谷内館跡	SI70	方形	420×400 (18.4)	床面中央南寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅 ×60			土師器、 出入り口施設、SI78→SI70	平安末葉
252	太田谷内館跡	SI78	方形	470×460 (21.6)			四隅	四隅 ×60			土師器、鉄器 SI78→SI70	平安末葉
253	太田谷内館跡	SI85					不明				SI70・71と重複、新旧不明	平安末葉
254	太田谷内館跡	SI71					不明				SI71→SI33・70・75・78・85 焼失家屋	平安末葉
255	太田谷内館跡	SI33	方形	285×270 (13.4)			四隅とその中間				土師器、把手付土器 SI71→SI33→SI75	平安末葉
256	太田谷内館跡	SI75	長方形	6.00×535 (32.1)	床面の北西隅	粘土	四隅とその中間に数個				土師器 壁溝は南壁の東側を除きほぼ一巡 SI71・33・106・142→SI75	平安末葉
257	太田谷内館跡	SI106					不明				SI106→SI75・29・70	平安末葉
258	太田谷内館跡	SI107					四隅とその中間に数個				SI142・75と重複、新旧不明	平安末葉
259	太田谷内館跡	SI142			南壁		四隅とその中間に数個	×20～30				平安末葉
260	太田谷内館跡	SI144					四隅とその中間に数個					平安末葉
261	太田谷内館跡	SI74	長方形	490×430 (21.1)			四隅とその中間に数個	四隅 ×40～60			土師器、雁股鏃 SI74→SI107・142・144	平安末葉
262	太田谷内館跡	SI143					不明					平安末葉
263	太田谷内館跡	SI47	長方形	630×440 (27.7)	西壁のやや北寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に数個	×40～70			土師器、フイゴ羽口、鉄器 煙道は長いタイプ	平安末葉

第39表　竪穴住居跡観察表(25)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
264	太田谷内館跡	SI40	長方形	360×430 (10.8)	南壁のやや北寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に数個	四隅 ×30～50			土師器、砥石 SI145→SI40、煙道はトンネルタイプ	平安末葉
265	太田谷内館跡	SI145	長方形	260×230 (6.0)			四隅	四隅 ×30～35			SI145→SI40、	平安末葉
266	太田谷内館跡	SI91	長方形	600×510 (30.6)	東壁の北寄り		四隅とその中間	四隅 ×40～50			土師器、把手付土器、フイゴ羽口、鉄器 焼失家屋、壁溝がほぼ一巡 SI91→SI108	平安末葉
267	太田谷内館跡	SI108	長方形	650×580 (37.7)			四隅とその中間に数個	×30～60			土師器、把手付土器、鉄器 SI91→SI108	平安末葉
268	太田谷内館跡	SI121	方形	550×540 (29.7)	東壁		四隅とその中間に数個	×20～60			SI121→SI91→SI108	平安末葉
269	太田谷内館跡	SI79					不明				SI108→SI121・108	平安末葉
270	太田谷内館跡	SI60	長方形	530×450 (23.9)			四隅とその中間に数個				SI126→SI60→SI61	平安末葉
271	太田谷内館跡	SI126	長方形	630×500 (31.5)			四隅とその中間に数個	×25～40			東・西壁際に壁溝 SI126→SI60→SI61	平安末葉
272	太田谷内館跡	SI56	方形	400×390 (15.6)	東壁の北寄り	粘土	四隅とその中間	×15～30			土師器、鉄器 SI90→SI56→SI97	平安末葉
273	太田谷内館跡	SI90					四隅とその中間に数個				壁溝は連続しないが各壁際に存在 SI90・56→SI57	平安末葉
274	太田谷内館跡	SI57					不明				土師器 SI90・56→SI57	平安末葉
275	太田谷内館跡	SI97					四隅とその中間に数個	×20			SI90・56・60・126→SI97	平安末葉
276	太田谷内館跡	SI61	長方形	650×540 (35.1)	東壁の北寄り	粘土	各壁際に数個	×20～60			土師器、把手付土器、鉄器	平安末葉

第40表　竪穴住居跡観察表(26)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
277	太田谷内館跡	SI105	長方形	410×310 (12.7)			四隅とその中間					平安末葉
278	太田谷内館跡	SI137									SI137→SD100	平安末葉
279	太田谷内館跡	SI141									SI141→SD100	平安末葉
280	太田谷内館跡(2次)	SI150	方形	483×395 (19.0)	南壁の南西隅寄り	粘土	四隅と対角線上	四隅 ×10～19	N−20−E	浮石粒を多量混入	土師器、須恵器、鉄滓	平安後半
281	太田谷内館跡(2次)	SI151	方形	495×495 (20.0)	南壁の南西隅寄り	粘土 川原石	壁溝内にあるが特定できず		N−5−W	浮石粒を多量混入	土師器、フイゴ羽口、鉄滓 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
282	太田谷内館跡(2次)	SI152	隅丸方形	395×385 (　)	東壁の北東隅寄り	粘土 川原石	東壁際に2本、床面に2本	×35～52	N−80−E	浮石粒を多量混入	土師器、須恵器	平安後半
283	太田谷内館跡(2次)	SI157	方形	370×340 (14.0)	南壁の南西隅寄り	粘土 川原石	四隅と東・西壁際	四隅 ×16～20	S−15−E	浮石粒を多量混入	土師器、須恵器　焼失家屋 壁溝はカマド部分を除き一巡 白頭山・苫小牧火山灰が堆積する	平安後半
284	太田谷内館跡(2次)	SI158	方形	214× (　)	南壁の南東隅寄り	粘土 川原石	四隅	四隅 ×12～16	N−7−W	浮石粒を多量混入	土師器　焼失家屋 白頭山・苫小牧火山灰が堆積する	平安後半
285	柴内館跡	SI156a	方形	486×482 (　)	南壁の西側	粘土 川原石	四隅	四隅 ×12～57		浮石粒を多量混入	土師器、砥石、鉄製品　焼失家屋 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI156b→SI156a	平安後半
286	柴内館跡	SI156b	方形	366× (　)	検出できず		四隅	四隅 ×　～47			土師器　焼失家屋 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI156b→SI156a	平安後半
287	柴内館跡	SI157	方形	600×528 (　)	南壁の西側	粘土 川原石	四隅	四隅 ×　～48		浮石粒を多量混入	土師器、土玉 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
288	柴内館跡	SI158	方形	532×506 (　)	南壁の東側		四隅とその中間	×6～57		浮石粒を多量混入	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半

第41表　竪穴住居跡観察表(27)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
289	柴内館跡	SI450a	方形	933×930 (　)	南壁の西側		四隅とその中間	×6～72		浮石粒を多量混入	土師器、須恵器、鉄製品 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI450b→SI450a(SI450bを改築) 住居外南側に付属する掘立柱建物跡	平安後半
290	柴内館跡	SI450b	方形	933×930 (　)	南壁の東側		四隅とその中間	×6～72			土師器、須恵器、鉄製品、鉄滓 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI450b→SI450a(SI450bを改築)	平安後半
291	柴内館跡	SI807	方形	662× (　)	南壁の西側		四隅	×12～64		浮石粒を多量混入	土師器、砥石、鉄滓 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
292	柴内館跡	SI851	方形	460× (　)			特定できず				土師器、砥石、鉄製品	平安後半
293	柴内館跡	SI1029a	方形	× (　)						浮石粒を多量混入	土師器、砥石 SI1029b→SI1029a	平安後半
294	柴内館跡	SI1029b	方形	278× (　)						浮石粒を多量混入	SI1029b→SI1029a	平安後半
295	柴内館跡	SI1200	方形	740×704 (　)	南壁の西側	粘土 川原石	四隅とその中間	×30～68		浮石粒を多量混入	土師器、鉄製品(穂摘み具)、鉄滓 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
296	柴内館跡	SI1264	長方形	434×340 (　)			特定できず	×2～35		浮石粒混入	土師器、須恵器、鉄滓 SI1265→SI1264	平安後半
297	柴内館跡	SI1265	方形	483× (　)							土師器、鉄滓 SI1265→SI1264 壁溝は壁際を一巡か	平安後半
298	柴内館跡	SI1269b	方形	440×405 (　)	南壁の西側		特定できず	×9～41		浮石粒を多量混入	土師器、竈壁の破片、鉄滓 SI1269b→SI1269a(中世)	平安後半
299	柴内館跡	SI1623	方形	225×215 (　)	南東壁のやや南西寄り					浮石層が堆積	土師器、陶磁器	平安後半

第42表　竪穴住居跡観察表(28)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
300	物見坂III	SI303	方形	560×560 (　　)	南壁の南東寄り	粘土 川原石	特定できず			浮石粒混入	土師器(鍋あり) 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
301	物見坂III	SI310	方形	270× (　　)						浮石粒混入		平安後半
302	御休堂	SI01	方形	362×360 (12.44)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅	四隅 ×8 ～16	N−6−W		土師器 カマド煙道が長いタイプ	
303	御休堂	SI03	方形	397×359 (14.52)	南壁の東寄り	粘土	特定できず		N−87−E	浮石粒混入	土師器、鉄製品	
304	御休堂	SI04	方形	788×701 (51.40)			壁際に数本か		N−24−E	浮石粒混入	砥石	
305	天戸森	ST01	方形	365×320 (8.20)	南壁のやや西寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N−0−E (N−S)	浮石層が堆積する	土師器	
306	天戸森	ST02	方形	360×350 (10.8)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅	四隅 ×13 ～20	N−0−E (N−S)	浮石粒混入	土師器	
307	天戸森	ST03	方形	420×416 (16.5)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅 ×14～23	N−13−E	浮石粒を多量混入	土師器 カマドが構築される壁際を除き壁溝が作られる	
308	高市向館跡	SI01	方形	627×524 (23.9)	東壁の中央	粘土 川原石	四隅	四隅 ×21～35	N−67−E		カマド部分を除き壁溝が一巡	平安後半
309	高市向館跡	SI02	方形	502×390 (19.6)	東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅 ×25～35	N−4−E		土師器 SI05→SI04→SI02	平安後半
310	高市向館跡	SI03	方形	253×250 (6.3)	東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に1～3個	四隅 ×44～50	N−5−W	浮石粒混入	土師器 カマド部分を除き壁溝が一巡	平安後半
311	高市向館跡	SI04	方形	574×504 (28.9)	北東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に2～3個	四隅 ×11～28	N−61−E		土師器 SI05→SI04→SI02	平安後半
312	高市向館跡	SI05	方形	602×544 (32.7)	東壁の北寄り	粘土	四隅とその中間に2～3個	四隅 ×23～65	N−24−E		土師器 SI06→SI04	平安後半

第43表　竪穴住居跡観察表(29)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
313	高市向館跡	SI06	方形	478×466 (22.3)	東壁の北寄り		四隅とその中間に3～4個	四隅 ×27～43	N−4−E			平安後半
314	高市向館跡	SI09	方形	508×464 (23.6)	南壁のやや東寄り		四隅と東西壁の中程	四隅 ×26～59	N−2−W		カマド部分を除き壁溝がほぼ一巡 SI09→ST01・13(中世)	平安後半
315	高市向館跡	SI10	方形	600×568 (34.1)	東壁の南寄り		四隅とその中間に数個	四隅 ×30～54	N−87−W		土師器(把手付土器) SK03→SI10→ST21→ST07	平安後半
316	高市向館跡	SI12	方形	520×513 (26.7)	南東壁の南寄り		四隅と対角線上か	四隅 ×26～33	N−50−W		土師器 カマド部分を除き壁溝が一巡 南東壁の東側にスロープ上の出入口	平安前半
317	高市向館跡	SI13	方形	370×350 (13.0)	南壁のほぼ中央	粘土 川原石	特定できず		N−5−W			平安後半
318	高市向館跡	SI14	方形	936×824 (77.1)	北東壁のやや北寄り		四隅と対角線上	四隅 ×27～71	N−26−W		土師器。小刀 カマド部分を除き壁溝がほぼ一巡 床面の溝から2時期が想定される ST20→SI14→ST16	平安後半
319	高市向館跡	SI15	方形	788×760 (59.9)	北東壁のやや北寄り		四隅と対角線上	四隅 ×32～72	N−40−W		紡錘車、火箸 焼失家屋 カマド部分を除き壁溝がほぼ一巡	平安後半
320	高市向館跡	SI16	方形	527×506 (26.7)	南東壁の西寄り				N−22−W			平安後半
321	高市向館跡	SI17	方形	860×781 (67.2)	東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅と対角線上	四隅 ×29～65 対角線上 ×52～65	N−11−W		土師器、砥石、小刀 カマド部分を除き壁溝がほぼ一巡	平安後半
322	高市向館跡	SI18	方形	588×557 (32.8)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅 ×6～31	N−88−W		土師器 東壁にスロープ状の出入口	平安後半
323	高市向館跡	SI19	方形	456×360 (16.4)	南西壁の西寄り				N−70−E		須恵器	平安後半

第44表　竪穴住居跡観察表(30)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
324	高市向館跡	SI21	方形	423×360 (15.2)	東壁の北寄り				N−83−E		土師器、須恵器、砥石、紡錘車、小刀 SI21→ST11・12→SD01	平安前半
325	高市向館跡	SI22	方形	516×501 (25.9)	南西壁の西寄り		四隅とその中間に3個	四隅 ×32〜46	N−23−E		SI22→SD03	平安後半
326	高市向館跡	SI23	方形	593×573 (34.0)	東壁の北寄り		四隅とその中間に3個	四隅 ×42〜63	N−77−E		土師器、鉄器 SI28→SI23	平安後半
327	高市向館跡	SI24	方形	418×418 (17.5)	南東壁の南寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅 ×23〜73	N−24−W		土師器	平安後半
328	高市向館跡	SI25	方形	503×496 (24.9)	南壁の西寄り		特定できず		N−16−W		土師器 カマド部分を除き壁溝がほぼ一巡	平安後半
329	高市向館跡	SI26	方形	500×486 (24.3)	東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅	四隅 ×30〜50	N−101−W		土師器(木葉痕あり)	平安後半
330	高市向館跡	SI27	方形	506×504 (25.1)	南東壁の南寄り		特定できず		N−45−W		土師器(砂底あり)、鉄製品	平安後半
331	高市向館跡	SI28	方形	573×545 (31.2)	南壁の西寄り		四隅と対角線上	四隅 ×39〜58	N−26−W	浮石多量混入	土師器 北・西壁際に沿って壁溝あり SI28→SI23	平安後半
332	高市向館跡	SI29	方形	268×266 (7.1)	東壁の北寄り	粘土 川原石			N−78−E	浮石混入		平安後半
333	高市向館跡	SI30	方形	430×392 (16.9)	南壁の西寄り		四隅とその中間	四隅 ×58〜73	N−4−E		土師器	平安後半
334	高市向館跡	SI31	方形	300×260 (7.8)	南東壁に2基	粘土 川原石			N−46−W	浮石の堆積層あり	土師器、須恵器 カマドから2時期を想定(A→B) 煙道は長く、川原石で構築される	平安前半
335	下沢田	SI01	長方形	438×270 (11.78)	南壁の東側	粘土 川原石	特定できず		N−12−W	浮石混入	土師器、鉄製品	平安後半
336	下沢田	SI02	方形	414×312 (13.5)	東壁の北寄り	粘土 川原石	特定できず		N−77−W	浮石混入	土師器	平安後半

第45表　竪穴住居跡観察表(31)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
337	下沢田	SI03 A～C	方形	724×600 (41.8)	南東隅の床面	粘土 川原石	四隅とその中間に1～2個	四隅 ×28～54	N−15−W	浮石混入	土師器、紡錘車、刀子 重複・拡張を行う。 SI03C→SI03B→SI03A	平安後半
338	下沢田	SI04	方形	380×325 (9.95)	住居中央より東寄り床面	川原石	南北壁際の中央に1個		N−17−W	浮石混入	土師器(把手付土器)、穂摘み具 カマドは石組による	平安後半
339	下沢田	SI06	方形	342×320 (9.14)	西壁の北寄り	粘土 川原石	対角線上	対角線 ×10～29	N−120−E	浮石混入	土師器	平安後半
340	下沢田	SI07	方形	762×740 (56.0)	南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅	四隅 ×55～85	N−23−E	浮石混入	土師器(把手付土器)、紡錘車 壁溝はカマド部分を除き一巡 2時期の可能性がある	平安後半
341	下沢田	SI08	方形	398×314 (11.56)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅か	四隅 ×33～46	N−16−E	浮石混入	土師器(支脚) SI10→SI08	平安後半
342	下沢田	SI09	方形	426×342 (13.7)	南壁の東寄り	粘土 川原石	南・北壁際に沿って相対する8個	×10～18	N−10−E	浮石混入	土師器(把手付土器)、 SI11→SI09	平安後半
343	下沢田	SI10	方形	306×304 (9.02)	南壁の西寄り	粘土 川原石	特定できず		N−8−E		西壁際に壁溝 SI10→SI08	平安後半
344	下沢田	SI11	方形	562× (　)	東壁の北寄り	粘土 川原石	対角線上	対角線 ×67～78	N−88−W	浮石混入	土師器(把手付土器)、 SI11→SI09	平安後半
345	地羅野館跡	SI03	方形	680× (　)			対角線上	対角線 50～55×63～77			須恵器、土師器(把手付土器)、鉄製品 壁溝は一巡か SI07→SI03	平安後半
346	地羅野館跡	SI07	方形	750×720 (　)	南壁の西寄り		四隅と対角線上か	四隅 ×60			土師器、 壁溝はカマド部分を除き一巡 南壁に張出施設を持つ	平安後半
347	用野目川向Ⅲ	SI01	方形	642×630 (　)	確認できなかった		四隅とその中間に3個	四隅 ×31～45		浮石混入	土師器、須恵器、鉄滓　焼失家屋 SK07・14→SI01→SI02・ST03	平安後半

第46表　竪穴住居跡観察表(32)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
348	用野目川向III	SI02	方形	498×494 (　)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅	四隅 50×42～57	N－9－E	浮石多量混入	土師器、須恵器、フイゴ羽口　焼失家屋 SK07・14→SI01→SI02・ST03	平安後半
349	用野目川向III	SI03	方形	228×180 (　)	確認できず		特定できず			浮石多量混入	土師器、須恵器 SI01・02→SI03→SK08	平安後半
350	用野目川向III	SI06	方形	800× (　)			四隅とその中間に数個	四隅 ×27～28		浮石混入	焼失家屋 土師器、須恵器	平安後半
351	小枝指館跡	SI101	方形				特定できず			浮石多量混入	土師器、須恵器 焼失家屋	平安前半
352	小枝指館跡	SI102	方形	550× (19.8)	北壁の中央	粘土 川原石	対角線上	対角線 ×	N－14－W	浮石混入	土師器(丸底の坏)、紡錘車 焼失家屋、SI102→SI104→SI103	奈良
353	小枝指館跡	SI103	方形	440× (16.7)	東壁の北寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に1個	四隅 13～25×5～10	N－106－E	浮石混入	土師器(丸底の坏) SI102→SI104→SI103	奈良
354	小枝指館跡	SI104	方形	× (　)	南壁の東寄り		四隅	四隅 14～25×16～53	N－29－W		SI104→SI103	奈良
355	赤坂B	SI02	方形	502×488 (20.3)	南壁の西寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N－11－W	浮石多量混入	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡 東壁から住居中央まで溝が造られる	平安後半
356	赤坂B	SI03	方形	340×328 (9.60)	南壁の西寄り		確認できなかった		N－1－W	浮石多量混入		平安後半
357	赤坂B	SI04	方形	440×427 (15.8)	南壁の西寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N－S	浮石多量混入	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡 北壁に平行して2条の溝	平安後半
358	赤坂B	SI05	方形	548× (　)						浮石混入	土師器 壁溝はほぼ一巡か	平安後半
359	赤坂B	SI06	方形	364×356 (12.1)	東壁の北寄り	粘土 川原石	住居外	15～25×19～23	N－100－W	浮石混入	土師器 焼失家屋、煙道が長い	平安後半

第47表　竪穴住居跡観察表(33)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
360	赤坂B	SI07A	方形	720× (　)	南壁のやや西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に数個、対角線上			浮石混入	土師器、須恵器、フイゴ羽口 カマドは4期(A～D)にわたり使用 南壁の東側に出入口施設 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI07D→SI07C→SI07B→SI07A	
361	赤坂B	SI07B	方形	720× (　)	南壁のやや西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に数個、対角線上			浮石混入	カマドは4期(A～D)にわたり使用 南壁の東側に出入口施設 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
362	赤坂B	SI07C	方形	610× (　)	南壁のやや西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に数個			浮石混入	カマドは4期(A～D)にわたり使用 南壁の東側に出入口施設 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
363	赤坂B	SI07D	方形	600× (　)	南壁のやや西寄り	粘土 川原石					カマドは4期(A～D)にわたり使用 南壁の東側に出入口施設 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
364	赤坂B	SI08	方形	525×523 (25.5)	南壁の東寄り	粘土 川原石	対角線上	対角線上 25～30×39～58	N－6－E	浮石混入	土師器(把手付土器)、砥石	平安後半
365	赤坂B	SI09	方形	390×305 (10.9)	南壁の西寄り	粘土 川原石	住居外の対角線上とその中間	対角線上 22～30×20～30	N－5－E	浮石混入	土師器、砥石	平安後半
366	赤坂B	SI10	方形	430× (　)			四隅	四隅 20×6				平安後半
367	赤坂B	SI11	方形	280×275 (6.40)	南壁のやや東寄り	粘土 川原石	確認できなかった		N－18－W		土師器	平安後半
368	赤坂B	SI12	方形	492×454 (17.6)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅 25～30×16～20	N－5－W	浮石混入	土師器、紡錘車 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
369	赤坂B	SI13	方形	383×362 (12.8)	南壁の西寄り		確認できなかった		N－3－W	浮石混入	土師器、煉瓦(セン)	平安後半

第48表　竪穴住居跡観察表(34)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
370	赤坂B	SI14	方形	456× (　)			四隅とその中間	四隅 20～30×13～60		浮石混入	土師器 拡張されている。SI15→SI14 壁溝は壁際を一周か	平安後半
371	赤坂B	SI15	方形	590×510 (27.4)	南壁の西寄り	粘土 川原石	確認できなかった			浮石混入	土師器 SI15→SI14	平安後半
372	赤坂B	SI105	方形	413× (　)	南西側の床面	粘土 川原石	確認できなかった			浮石混入	土師器	平安後半
373	花輪古館 B区	SI101	方形	420× (　)	南壁のほぼ中央		確認できなかった		N−11−E	浮石多量混入	壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
374	花輪古館 C区	SI301	方形	626×550 (　)	南壁の西寄り	粘土 川原石	対角線上	対角線 35前後×30前後	N−15−W	浮石多量混入	土師器、須恵器	平安後半
375	赤坂A(1次)	SI01 A・B	方形	600×545 (29.43)	南壁の中央よりやや西寄り	粘土 川原石	四隅		N−8−W		土師器、鉄滓 カマド部分を除き断続的に一巡 東側に張り出し施設	平安後半
376	赤坂A(1次)	SI02	方形	396× (　)			確認できなかった				土師器、砥石 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
377	赤坂A(1次)	SI04	方形	492×384 (17.0)	東壁の北側	粘土 川原石	四隅		N−94−W	上層に浮石多量混入	土師器、須恵器、小刀、鉄滓 SK39→SK50=SI04→SI05 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
378	赤坂A(1次)	SI05	方形	675× (　)	南壁の中央西寄り	粘土 川原石	四隅と対角線上		N−10−E	浮石多量混入	土師器、須恵器、鉄滓 壁溝はカマド部分を除き一巡 SK39→SK50=SI04→SI05	平安後半
379	赤坂A(1次)	SI06	方形	527× (　)	南壁の中央西寄り	粘土 川原石			N−16−E	浮石混入	土師器	平安後半
380	赤坂A(1次)	SI07	方形	397×360 (12.86)	南壁の中央やや東寄り	粘土 川原石	四隅		N−2−E	浮石多量混入	土師器、須恵器、石製品、鉄滓 壁溝はカマド部分を除き一巡 SI08→SI07	平安後半

第49表　竪穴住居跡観察表(35)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
381	赤坂A(1次) (2次)	SI08	方形	397×320 (　　)	南壁	粘土 川原石			N−1−E		土師器、フイゴ羽口 SI08→SI07	平安後半
382	赤坂A(1次)	SI09	方形	294×286 (7.57)	南西部床面に焼土				N−9−W	浮石混入	土師器、鉄製品	平安後半
383	赤坂A(1次)	SI10	方形	610×518 (28.44)	南壁の中央西寄り	粘土 川原石	四隅と対角線上		N−6−E	浮石多量混入	土師器、須恵器、鉄滓 大湯浮石層を掘り込む SK79→SI10=SK76・77→SI15	平安後半
384	赤坂A(1次)	SI12	方形	602×582 (31.53)	南壁の中央西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間		N−14−E		土師器、須恵器、鉄製品、鉄滓 大湯浮石層を掘り込む 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
385	赤坂A(1次)	SI15	方形	381× (　　)	西壁の北寄り	粘土 川原石	四隅		N−86−E		土師器 大湯浮石層を掘り込む SK79→SI10=SK76・77→SI15	
386	赤坂A(2次)	SI101	方形	640× (　　)	南壁の東側	粘土 川原石	配置特定できず		N−36−W		土師器、鉄滓	
387	赤坂A(2次)	SI102	方形	593× (　　)	南壁の西寄り 南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に数個		N−17−W	浮石混入	土師器、須恵器、鉄滓 カマドA→B 壁溝はカマド部分を除き一巡	
388	赤坂A(2次)	SI103	方形	260× (6.08)	南壁の中央西寄り	粘土 川原石	確認できず		N−15−E	浮石混入	土師器	
389	赤坂A(2次)	SI104	方形	310×288 (8.03)	南壁の中央西寄り	粘土 川原石	確認できず		N−10−E		土師器、鉄製品、鉄滓	
390	新斗米館跡 (II次)	SI01	方形	340×260 (8.03)	東壁の南寄り	粘土 川原石	特定できず		N−71−E		土師器	
391	物見坂III	SI02	方形	392×358 (　　)	西壁のほぼ中央	粘土 川原石	対角線上				土師器(丸底の坏) 焼失家屋。煙道が長い。	奈良
392	物見坂II	SI03	方形	372×360 (　　)	東壁の南寄り	粘土 川原石	壁中にあるが特定できず			大湯浮石層が堆積	土師器	平安前半 浮石直前

第50表　竪穴住居跡観察表(36)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
393	菩提野	1号									凹地として確認	
394	菩提野	2号									凹地として確認	
395	菩提野	3号									凹地として確認	
396	菩提野	4号									踏査したが調査時発見できず	
397	菩提野	5号									凹地として確認	
398	菩提野	6号									凹地として確認	
399	菩提野	7号									踏査したが調査時発見できず	
400	菩提野	8号									踏査したが調査時発見できず	
401	菩提野	9号	方形	720× (　　)	南壁のやや西寄り	川原石	柱基石				土師器、鉄器 焼失家屋	奈良
402	菩提野	10号									踏査したが調査時発見できず	
403	菩提野	11号									踏査したが調査時発見できず	
404	菩提野	12号									踏査したが調査時発見できず	
405	大湯周辺分布	N6遺構	方形							浮石多量混入	土師器、須恵器、フイゴ羽口	平安前半
406	大湯周辺分布	OUN28	方形								土師器、鉄製品	平安前半
407	大湯4次 (D1区)	SI201	方形	519×509 (25.00)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間に2個	四隅 ×26～48	N−24−W	浮石混入	土師器(砂底あり)、鉄滓 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安後半
408	大湯4次 (D1区) 大湯13次 (F4区)	SI202 SI09	方形	453× (　　)			四隅とその中間	四隅		浮石混入	土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡か	平安後半
409	大湯4次 (D1区) 大湯10次 (D3区)	SI203 SI304		× (　　)						浮石混入	土師器 壁溝は一部	平安後半

第51表　竪穴住居跡観察表(37)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
410	大湯4次 (F1区)	SI401	方形	337×300 (8.01)	南壁の西寄り	粘土 川原石	確認できず		N−70−W	浮石混入	土師器 焼失家屋。煙道が長い	平安後半
411	大湯6次 (F1区)	SI402	方形	400×361 (12.9)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅 ×8〜19	N−21−W	浮石混入	土師器、木製品 焼失家屋。	平安後半
412	大湯6次 (F1区) 大湯4次 (F1区)	SI404 SI03	方形	680×670 (　)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅 33〜35×17〜39	N−5−W	浮石混入	土師器、鉄製品、鉄滓 焼失家屋	平安後半
413	大湯6次 (F1区)	SI409		× (　)						浮石混入	土師器 焼失家屋、壁溝は一部	平安後半
414	大湯10次 (D3区)	SI301	方形	420× (　)						浮石混入	土師器	平安後半
415	大湯10次 (D3区)	SI302	方形	270× (　)						浮石混入		
416	大湯10次 (D3区)	SI303	方形	500×400 (　)			床面に1個		N−33−W	浮石多量混入	東壁・北壁に壁溝 SI304→SI303	
417	大湯13次 (F4区)	SI01	方形	425×345 (　)	南壁の西寄り	粘土 川原石	南北壁の延長線上		N−S		土師器、セン 焼失家屋	平安前半
418	大湯13次 (F4区)	SI02	方形	×268 (　)	南壁の東寄り	粘土 川原石	確認できず		N−33−W	床面に浮石層	土師器、セン	平安前半
419	大湯13次 (F4区)	SI04	方形	432×356 (　)	南壁の西寄り	粘土 川原石	四隅とその中間	四隅 28前後×	N−12−W	床面に浮石層	土師器	平安前半
420	大湯13次 (F4区)	SI05	方形	460×430 (　)	北壁の東寄り	粘土 川原石			N−13−W	床面に浮石層	土師器、フイゴ羽口	平安前半
421	大湯13次 (F4区)	SI06	方形	470×390 (　)	南壁の西寄り	粘土 川原石 セン			N−15−W	壁溝内に浮石	土師器 焼失家屋 壁溝はカマド部分を除き一巡	平安前半

第52表　竪穴住居跡観察表(38)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
422	大湯13次 (F4区)	SI07	方形	×720 (　)	南壁の西寄り 南壁の東寄り	粘土 川原石	四隅と対角線上		N−25−W	浮石多量混入	土師器、須恵器鉄製品 壁溝はカマド部分を除き一巡	
423	大湯13次 (F4区)	SI08	方形	430×410 (　)	南壁の西寄り	粘土 川原石	床面に1個		N−15−W	浮石多量混入	壁溝はカマド部分を除き一巡	
424	大湯13次 (F4区)	SI10	方形	520×500 (　)	南壁の西寄り 南壁の東寄り	粘土 川原石			S−21−W		未調査で平面プランのみ確認	
425	大湯13次 (F4区)	SI11	方形	540×510 (　)	南壁の東寄り				S−30−W			
426	大湯13次 (F4区)	SI12	方形	540×510 (　)	南壁の東寄り				S−33−W			
427	大湯19次 (D9区)	SI10	方形		南壁					浮石混入	土師器	平安後半
428	大湯19次 (D9区)	SI11	方形		南壁の東寄り						土師器 壁溝はカマド部分を除き一巡か	
429	大湯19次 (D9区)	SI12									壁溝が存在	
430	大湯19次 (D9区)	SI13								浮石層を切る		平安後半
431	大湯19次 (D9区)	SI14								浮石層を切る		平安後半
432	玉内	SI118	方形	380×375 (　)			確認されず				北壁際に確認できる程度 SI118→SI116→SI112→SI110	
433	玉内	SI116	略方形	320以上×320 (　)							焼失家屋 西壁際に壁溝に一部を確認	
434	玉内	SI112		310× (　)							土師器	
435	玉内	SI110	略方形	400×365 (　)	東壁の北寄り 東壁の南寄り	粘土 川原石					土師器、鉄製品、鉄塊 東壁を除く壁際に壁溝	

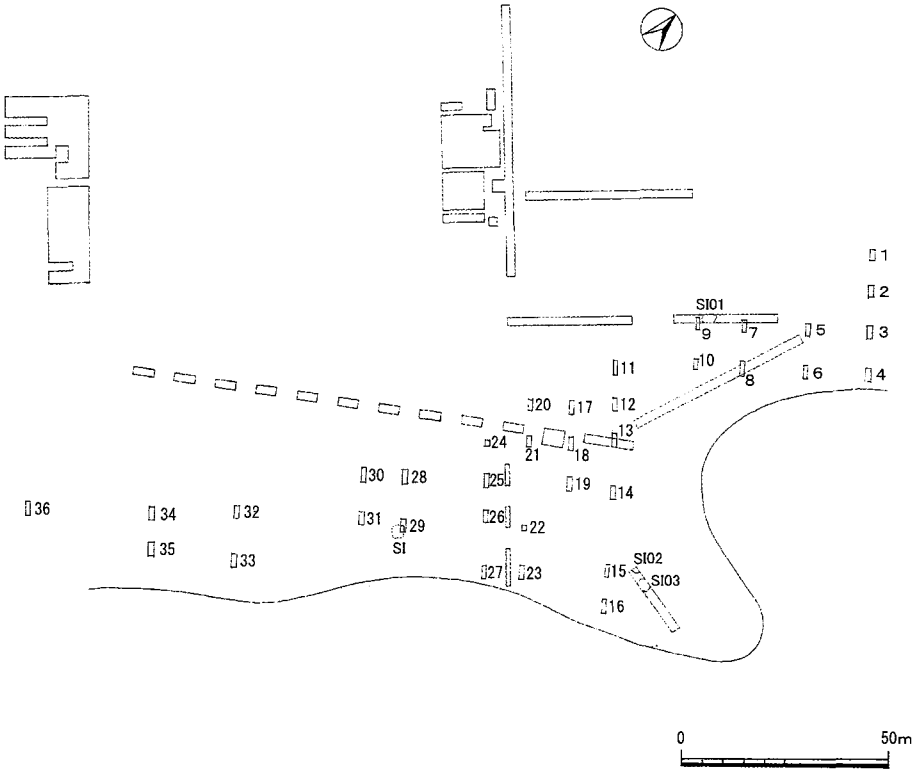
第53表　竪穴住居跡観察表(39)

No.	遺跡名	遺構名	平面形	規模(cm)	カマド		柱穴(cm)		長軸方向	堆積状況	出土遺物・特記事項・新旧関係	構築時期
				長軸×短軸・(面積)	位置	構築材	配置	規模(径×深さ)				
436	玉内	SI117	方形	280～290×(　　)	東壁の北寄り	粘土				大湯浮石層を切る	土師器	平安後半
437	鹿角沢Ⅱ	SI01	方形	490×470	南壁の西寄り	粘土 川原石	確認できず			大湯浮石が堆積		平安前半
438	鹿角沢Ⅱ	SI02	方形	680×670	北壁中央	粘土 川原石	対面線上の床面			大湯浮石が堆積	土師器高坏２点	奈良
439	鹿角沢Ⅱ	SI03	方形		西壁	粘土	確認できず					奈良
440	鹿角沢Ⅱ	SI04	方形									
441	鹿角沢Ⅱ	SI05	方形	360×350	東壁の北寄り	粘土 川原石	確認できず				ガラス玉１点	平安前半
442	鹿角沢Ⅱ	SI06	方形									
443	鹿角沢Ⅱ	SI07	方形	690×(　　)	東壁の南寄り	粘土	四隅					平安前半

第Ⅴ章　調査のまとめ

特別史跡大湯環状列石は、鹿角市十和田大湯字万座、字野中堂、字一本木後ロに所在する縄文時代後期前葉から平安時代にかけての複合遺跡である。縄文時代後期前葉から中葉にかけては大規模な「マツリと祈りの場」として万座環状列石、野中堂環状列石を中心に、建物跡や配石遺構群、フラスコ状土坑などのさまざまな遺構が構築されていたことが明らかとなっている。また、史跡西側台地の縁には平安時代の集落とともに墓域が形成されたとみられ、竪穴住居跡や円墳などが検出されている。

今年度の調査区は、史跡の北東側に位置するＡ６区・Ａ７区である。史跡北東側には一本木後ロ配石遺構群があり、昭和59年から３年にわたるＡ１区～Ａ３区の調査で弧状に分布する配石遺構群であることが確認されている。この３年間の調査以来、史跡北東部については調査が行われておらず、一本木後ロ配石遺構群の周辺における分布状況は不明なままであった。平成17年には一本木後ロ配石遺構群の南西側の調査を行い、配石遺構13基、配石に伴う土坑１基、焼土遺構40基、平安時代前半以前の道路状遺構１条を確認した。今年度は、一本木後ロ配石遺構群の北東側について、一本木後ロ配石遺構群の分布の有無、分布状況の確認、地形の確認を



第36図　調査区北東部竪穴住居跡分布状況

主な目的として調査を行った。

調査の結果、配石遺構３基、焼土遺構22基、平安時代前半の竪穴住居跡３棟が確認された。

配石遺構は、いずれも一本木後ロ配石遺構群の隣接地点から検出された。配石は耕作により動かされ、その形態を分類するには至らなかったが、構築された位置からみて、一本木後ロ配石遺構群の一部と考えられる。また、隣接地点以外からの配石遺構の検出はなく、一本木後ロ配石遺構群が史跡北東側にその分布域を広げることはないことが確認された。

調査区北東側端では、弥生土器の破片がまとまって確認された。トレンチ設定箇所では遺構は確認されなかったが、周辺に遺構の存在が考えられる。

竪穴住居跡は、調査区北東側の台地縁辺部で確認された。地形調査により、北東側台地縁辺部は沢状の地形があり、斜面には湧水があることが判明した。また、平成10年に行われた試掘調査においても、北東側台地縁辺部から竪穴住居跡が１棟検出されている。このことから、北東側台地縁辺部には、沢を囲むように集落が作られていたことが確認された。史跡内では、北側の台地縁辺部において集落と考えられる竪穴住居跡が検出されているが、今回確認された竪穴住居跡は、史跡北側の竪穴住居跡と比べて規模が小さいことがわかる。史跡の北側と北東側に集落を構築した人々の違いについて、今後の課題のひとつとしたい。

調査区の地形については、調査区北東側台地縁辺部にむかってなだらかに下っている状態が確認された。北東側斜面には湧水も認められ、沢状の地形であることが確認された。

参　考　文　献

鈴木克彦　『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣　2001年

成田滋彦　「青森県の土器」『縄文文化の研究４　縄文土器Ⅱ』雄山閣　1981年

高橋忠彦　「秋田県の縄文時代後期の土器」『研究紀要　第４号』
秋田県埋蔵文化財センター　1989年

文化財保護委員会　『大湯町環状列石』1953年

秋田県教育委員会　『大湯環状列石周辺遺跡分布調査概要』　1975年
秋田県教育委員会・鹿角市教育委員会
『大湯環状列石周辺遺跡緊急分布調査報告書』　1974年

鹿角市　『鹿角市史　第Ⅰ巻』　1982年

鹿角市教育委員会　『昭和50年度大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報』　1976年

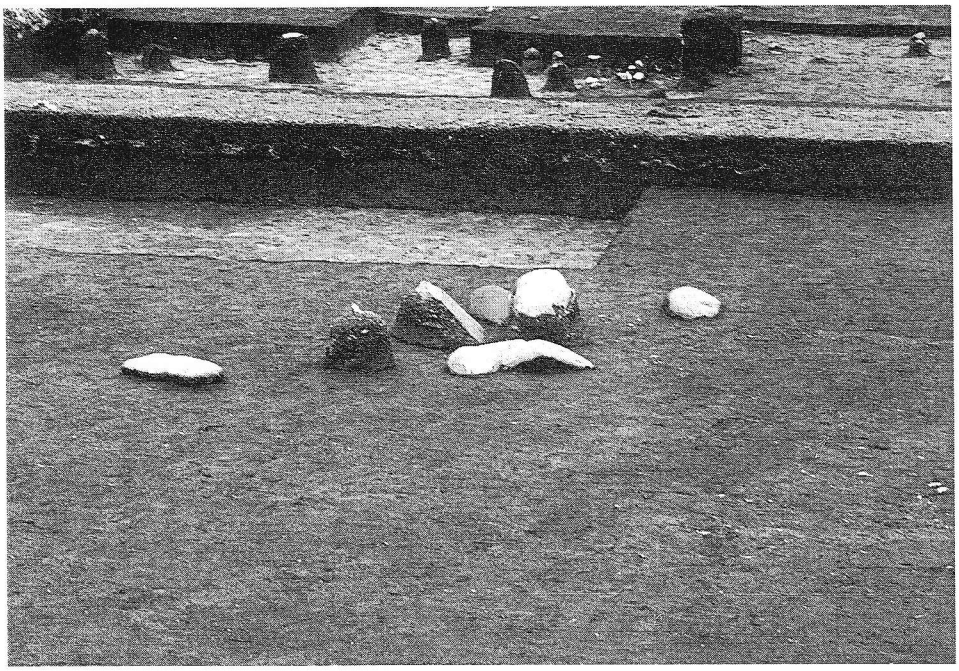
鹿角市教育委員会　『昭和51年度大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報』　1977年

鹿角市教育委員会　『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)～(6)』　1985年～90年

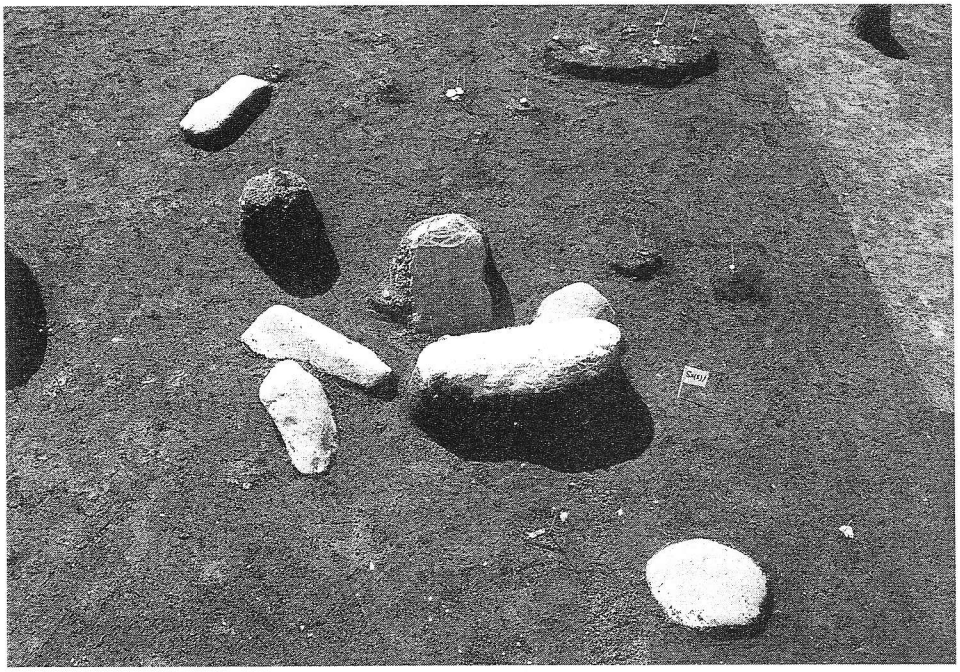
鹿角市教育委員会　『大湯環状列石発掘調査報告書(7)～(8)』　1991年～92年

鹿角市教育委員会　『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(9)～(22)』　1993年～2005年

鹿角市教育委員会　『特別史跡大湯環状列石（Ⅰ）』　2005年

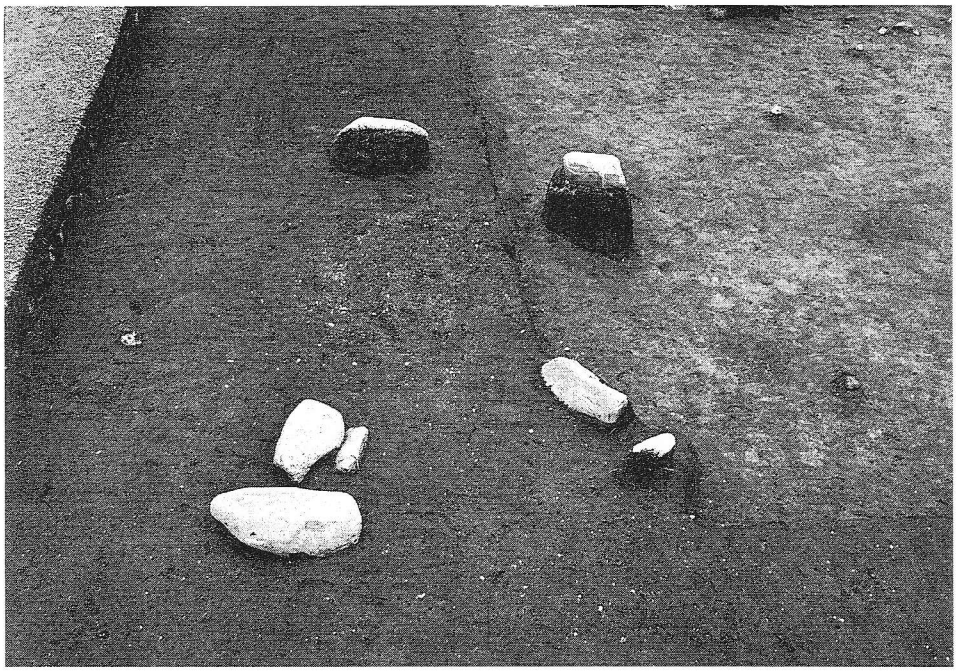


SX(S) 01

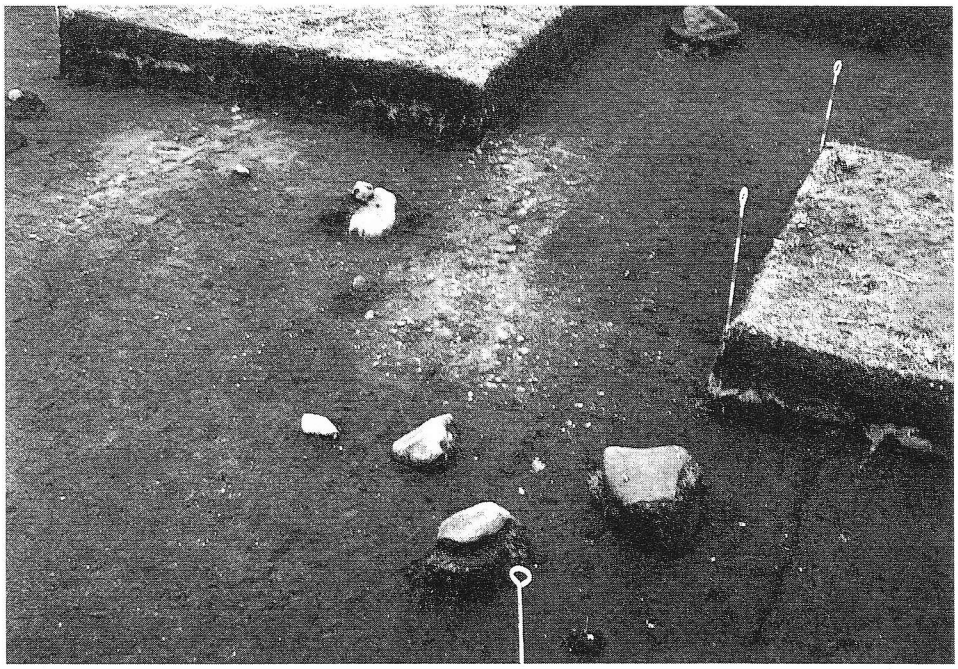


SX(S) 01

PL 1　配　石　遺　構(1)

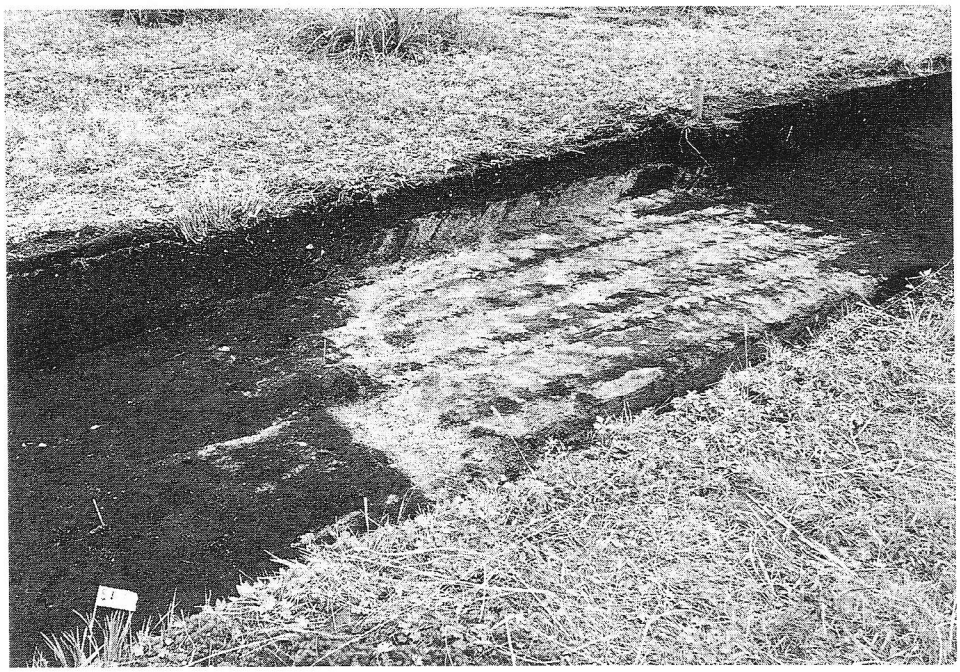


SX(S) 02

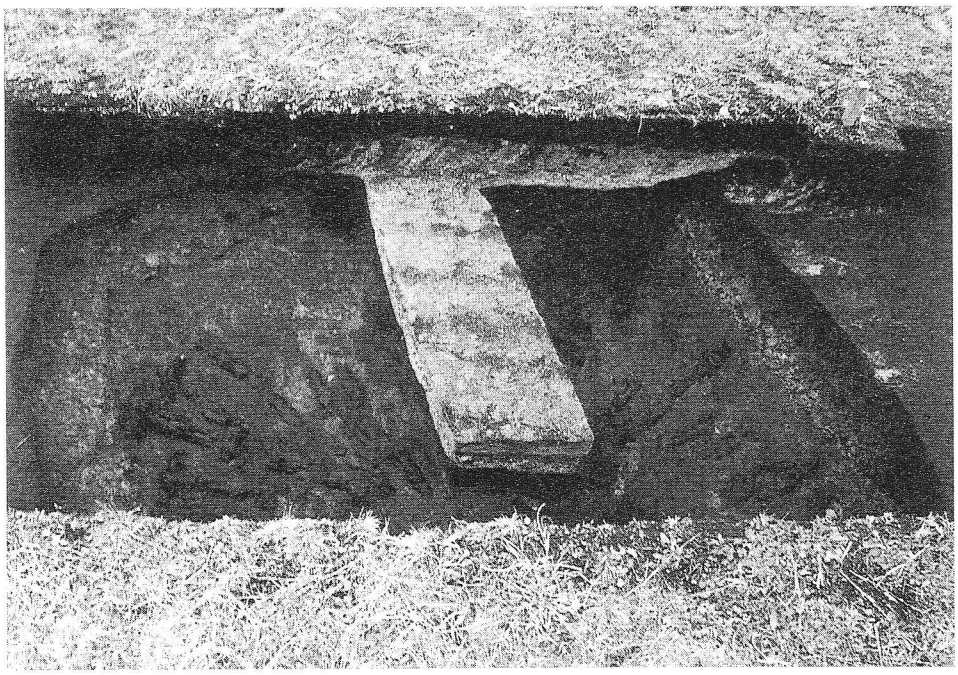


SX(S) 03

PL2　配　石　遺　構(2)

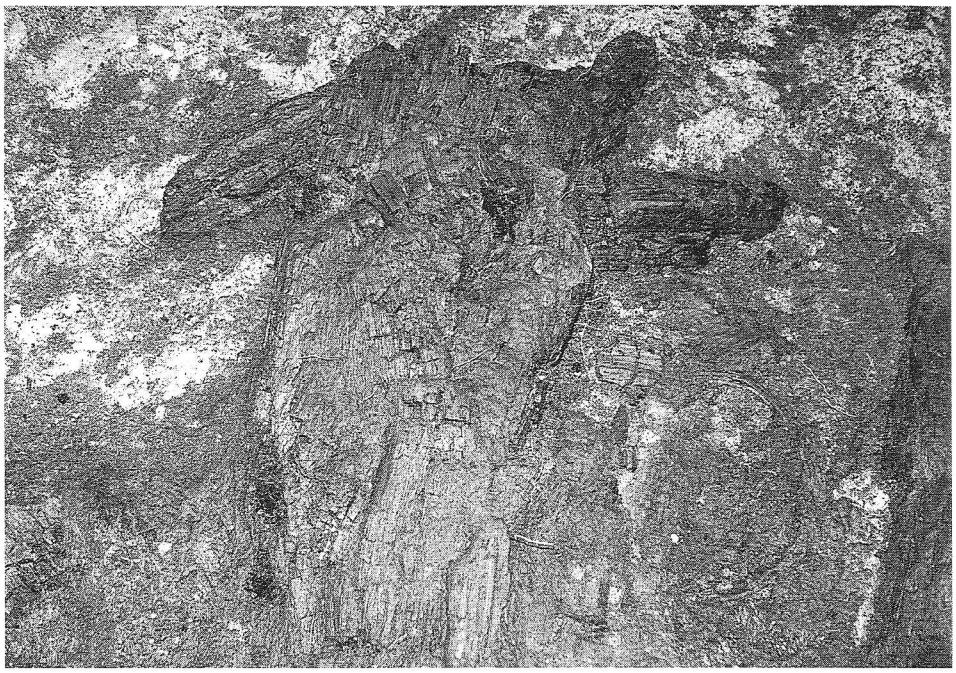


SI01確認状況



SI01

PL3　竪穴住居跡(1)

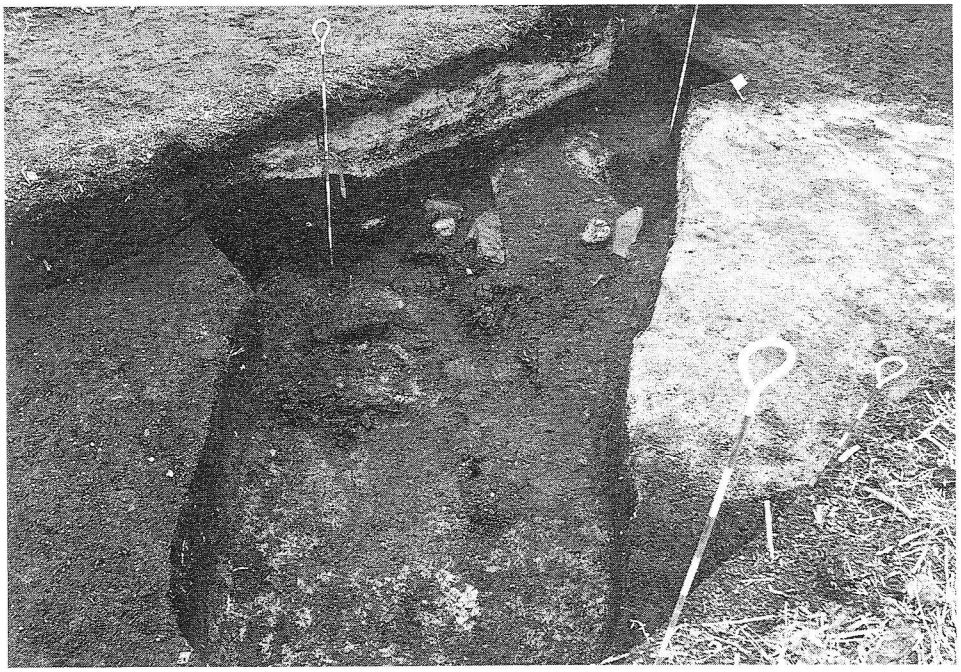


SI01出土炭化物

SI01出土炭化物

PL4　竪穴住居跡(2)

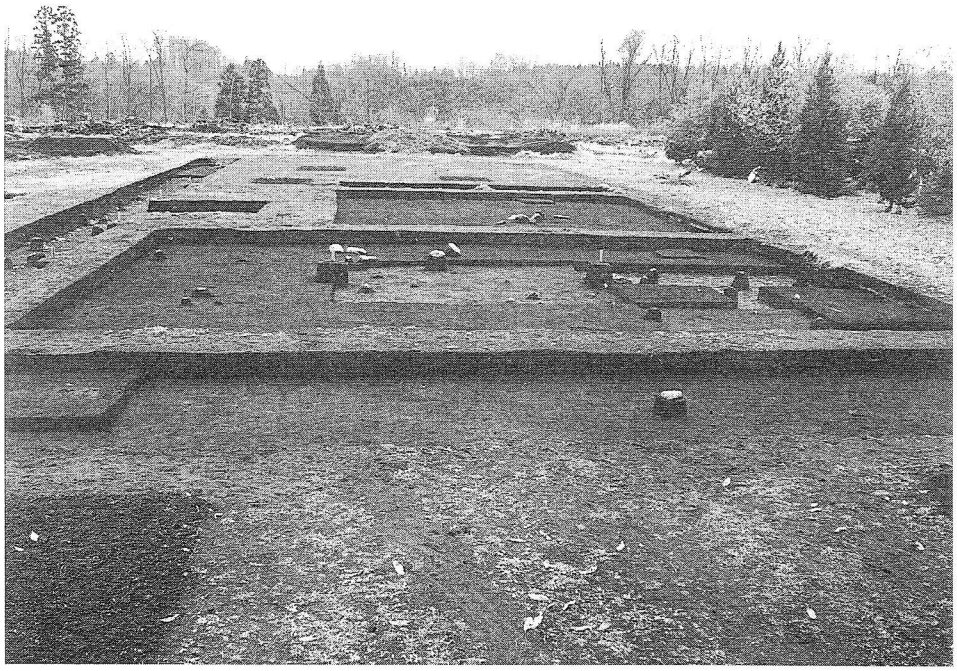
SI02



SI03

PL5　竪穴住居跡(3)

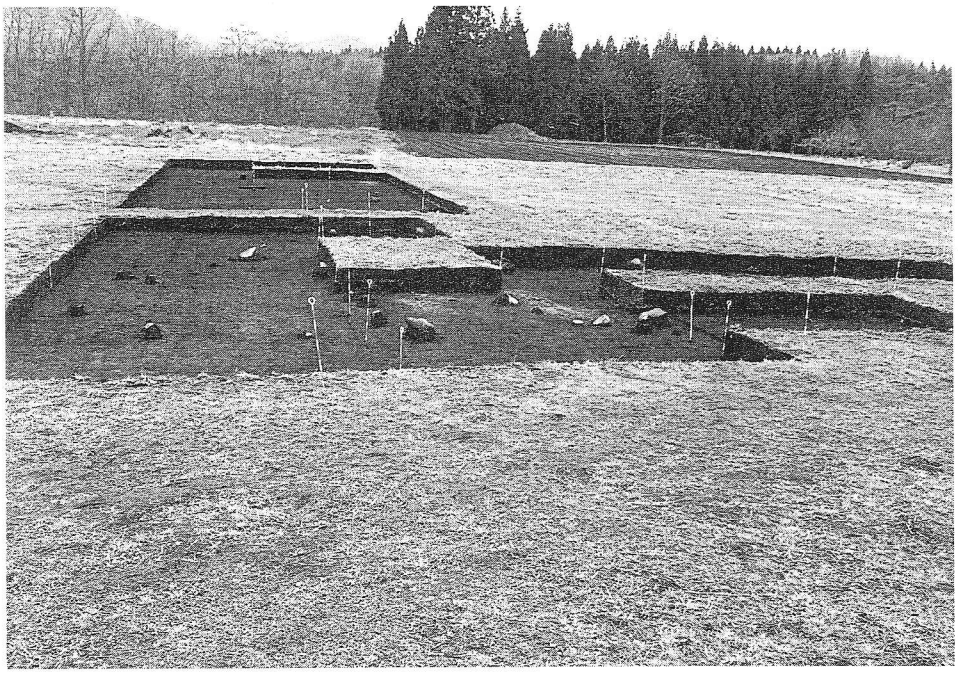
調査区西側遠景



調査区西側全景

PL6　調 査 区 西 側

調査区南側遠景



調査区南側全景

PL7　調 査 区 南 側

調査区北東側

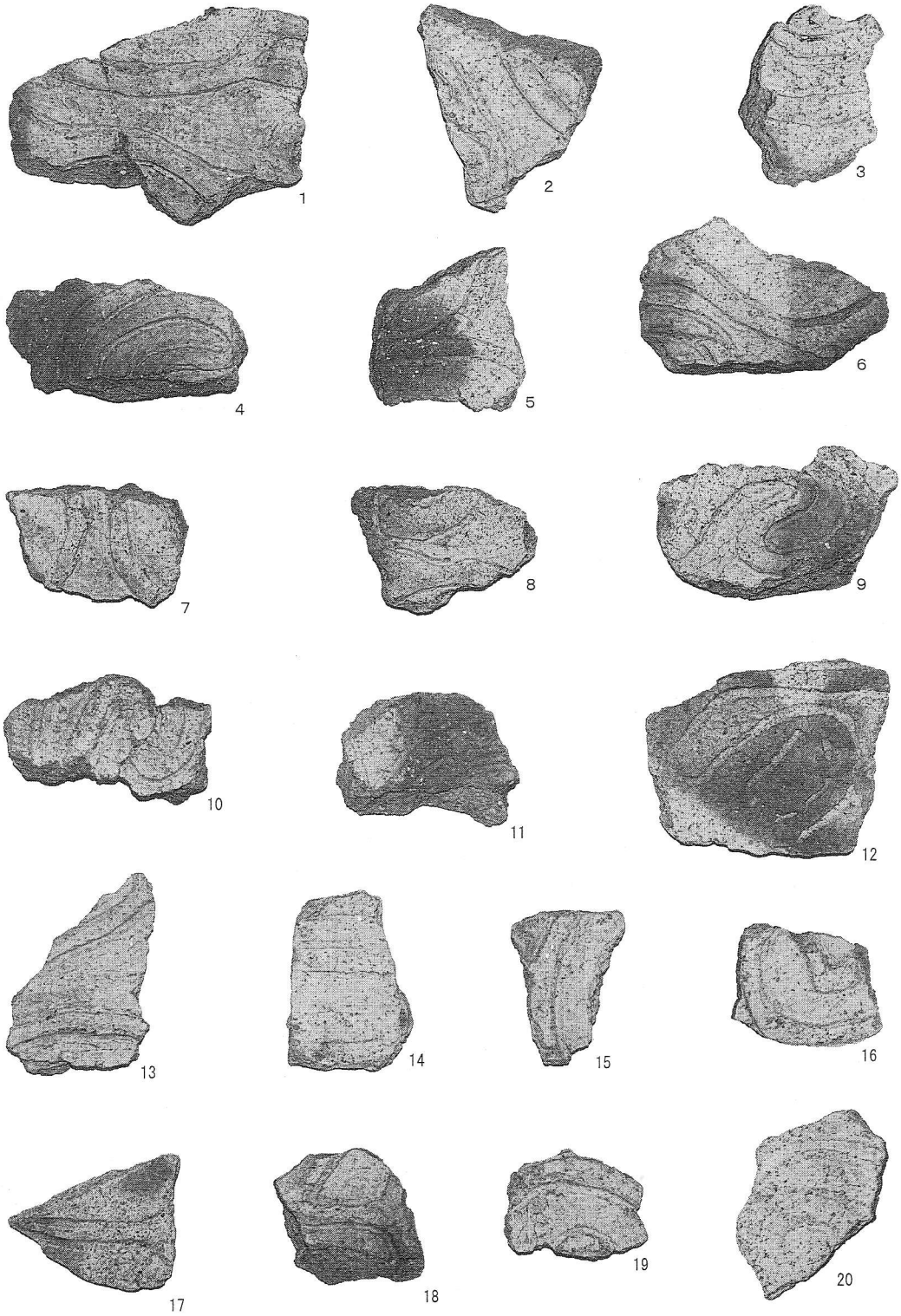
調査区北東端盛り土

PL８　調査区北東側

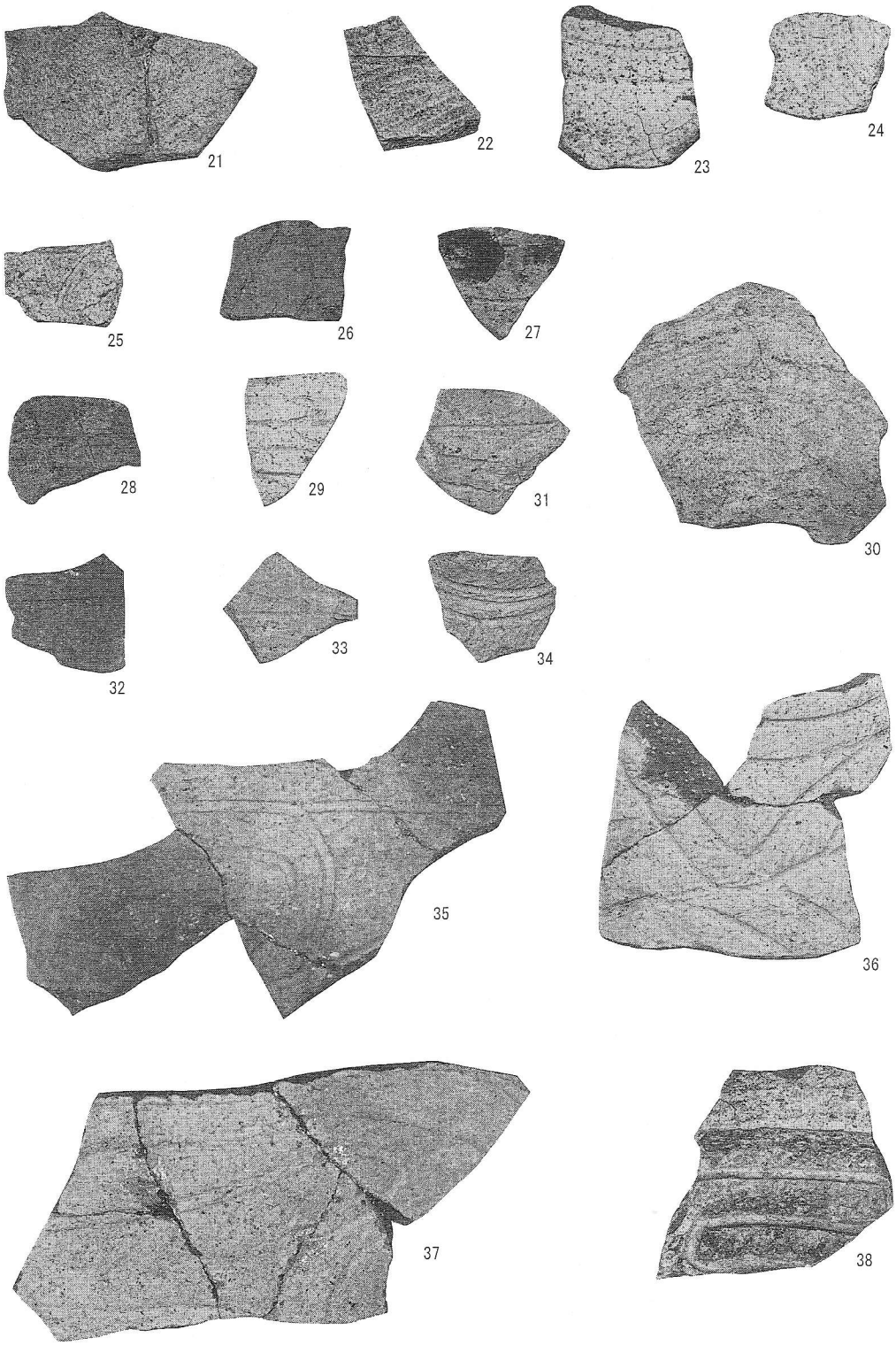
盛り土トレンチ

盛り土トレンチ

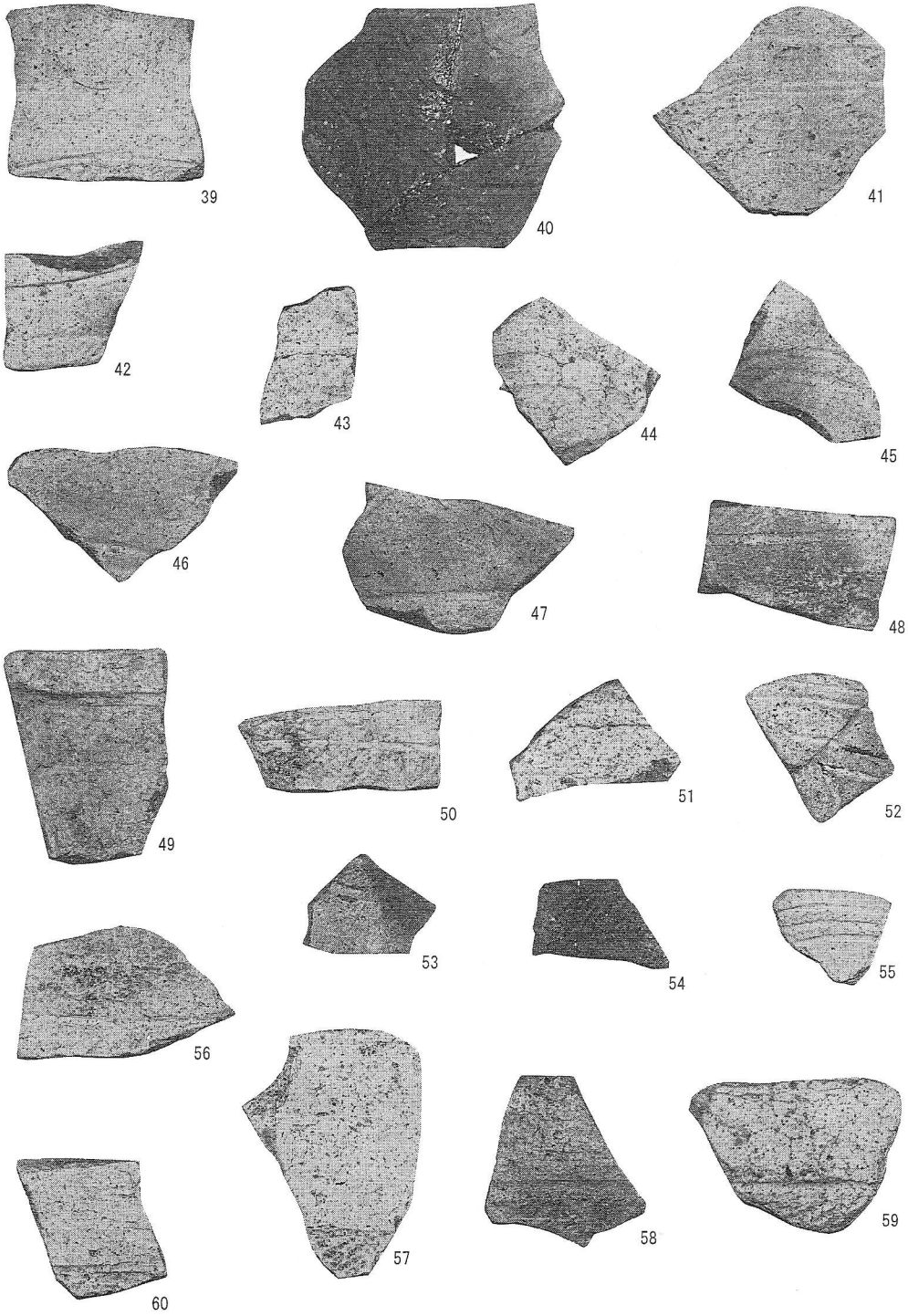
PL9　盛り土調査



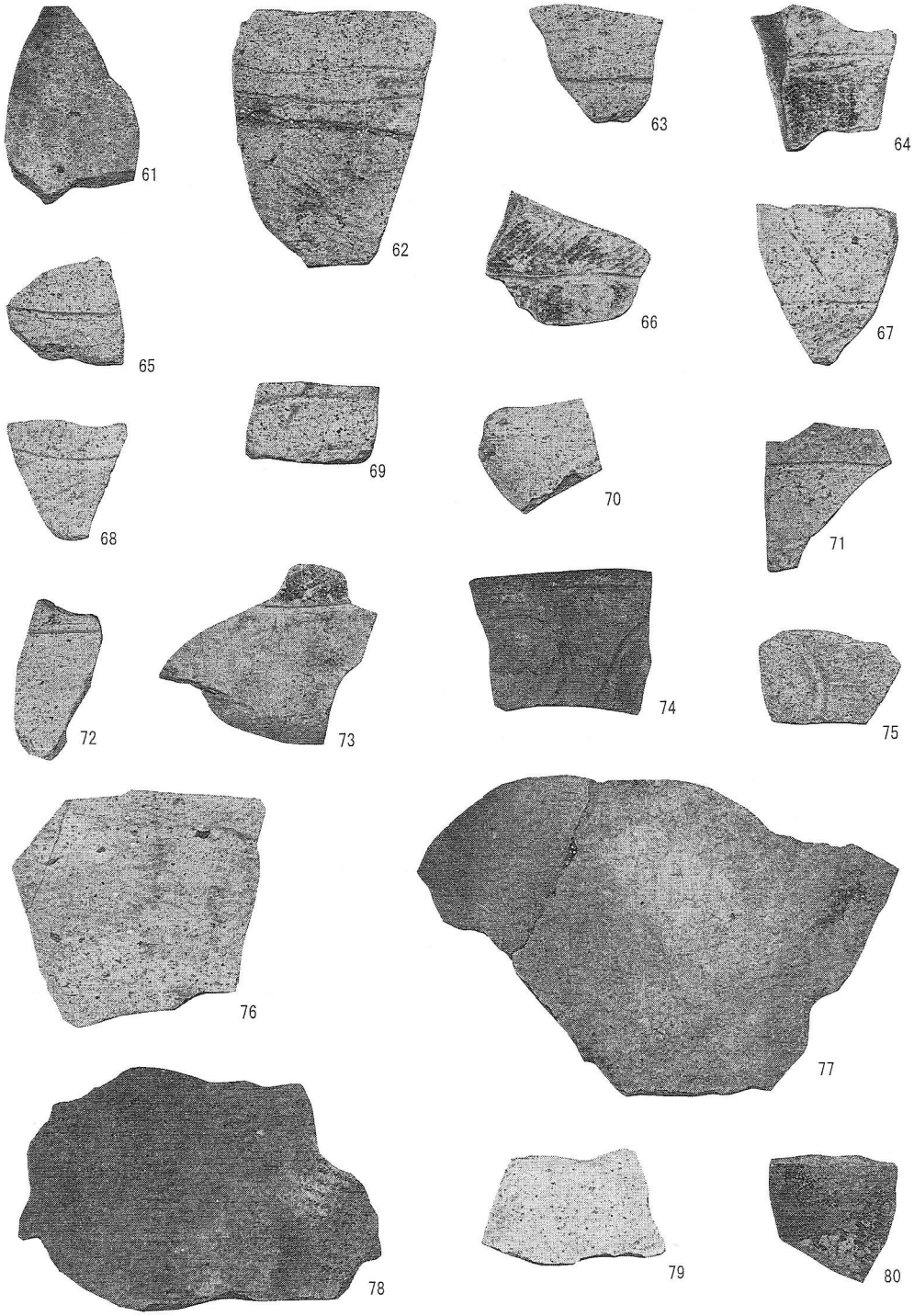
PL10 出 土 土 器(1)



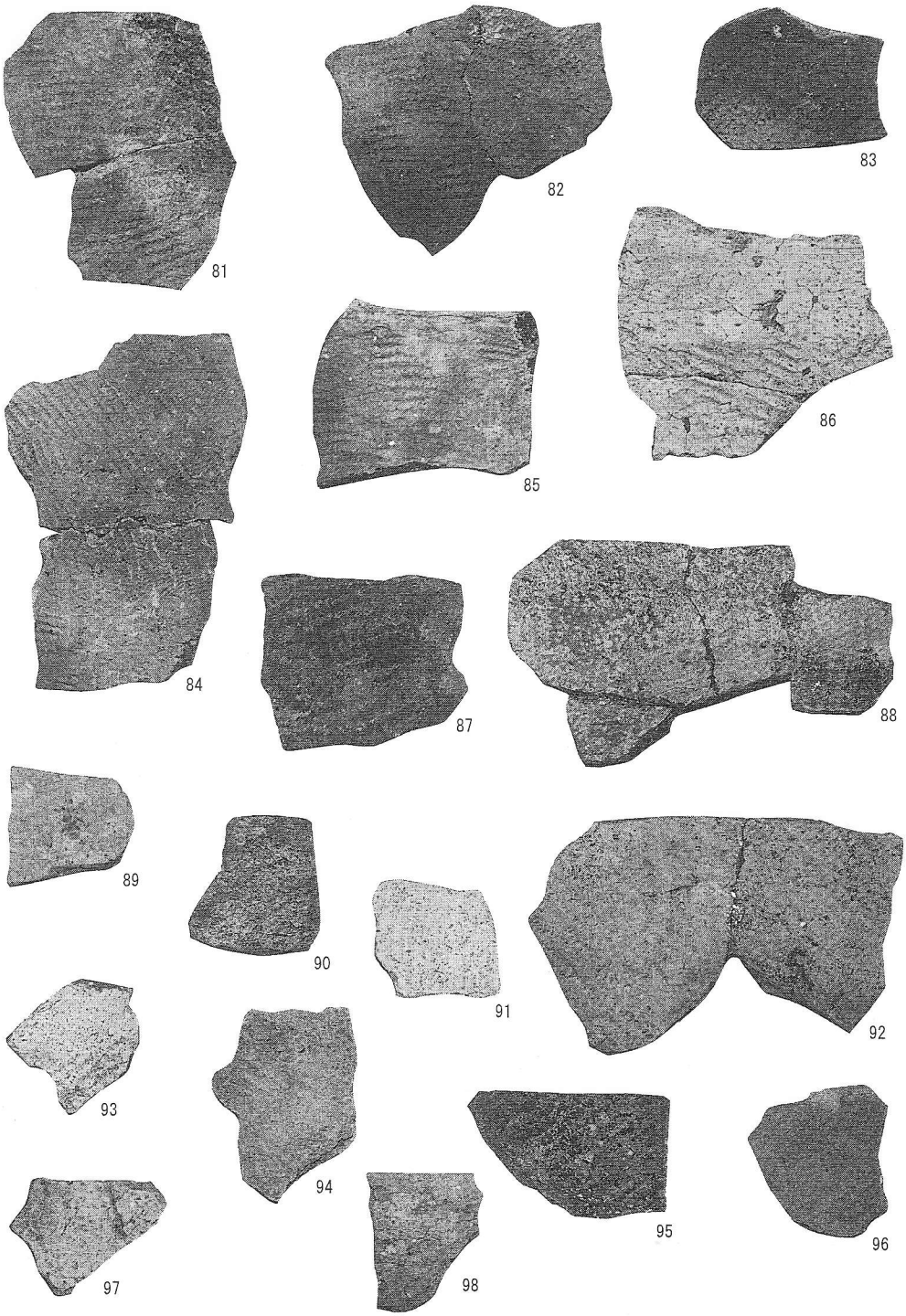
PL11 出 土 土 器(2)



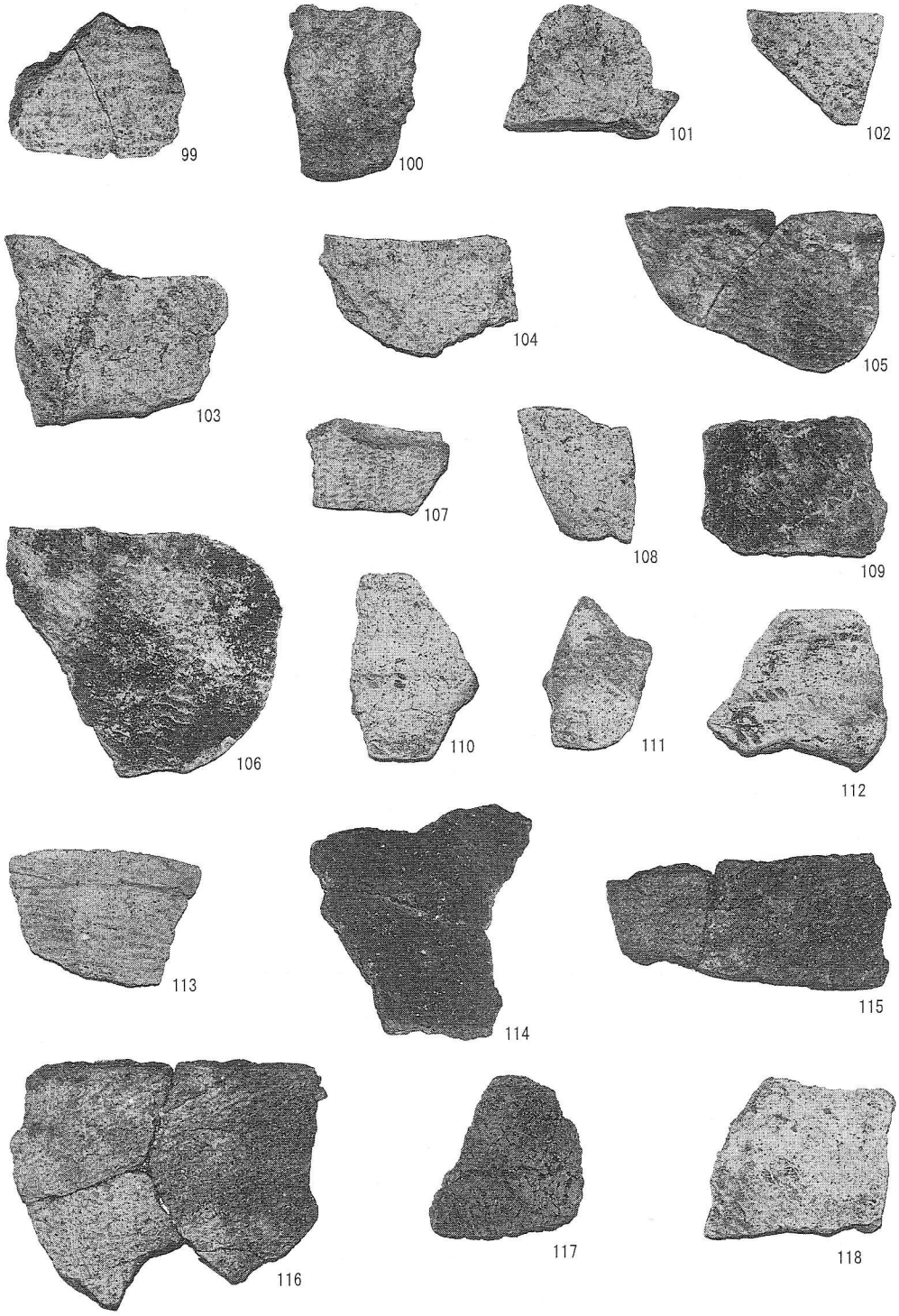
PL12 出 土 土 器(3)



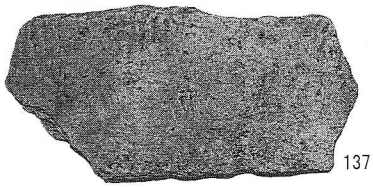
PL13 出 土 土 器(4)

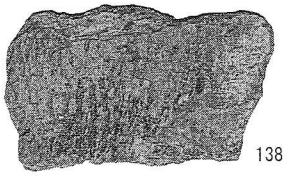


PL14 出 土 土 器(5)

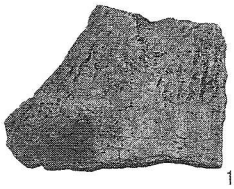

99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118

PL15 出 土 土 器(6)

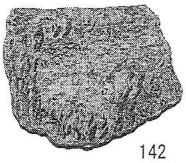

137

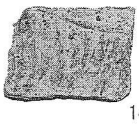

138

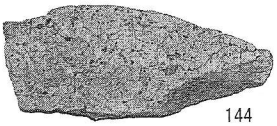
139

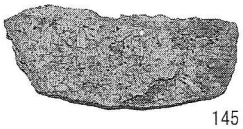

140

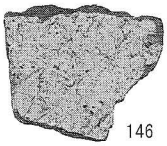
141

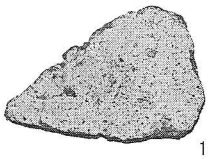

142


143

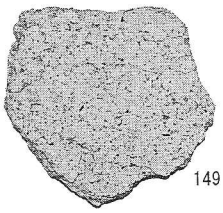

144

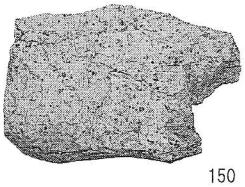

145

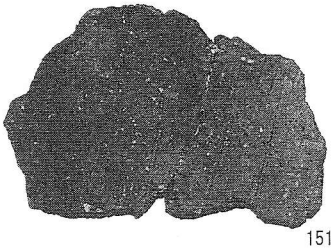

146

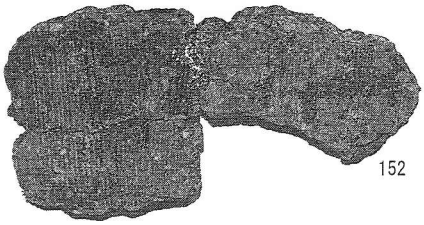

147

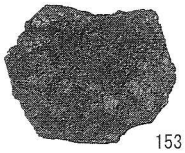
148


149

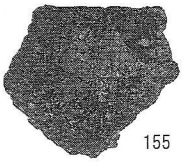

150

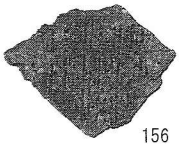

151


152

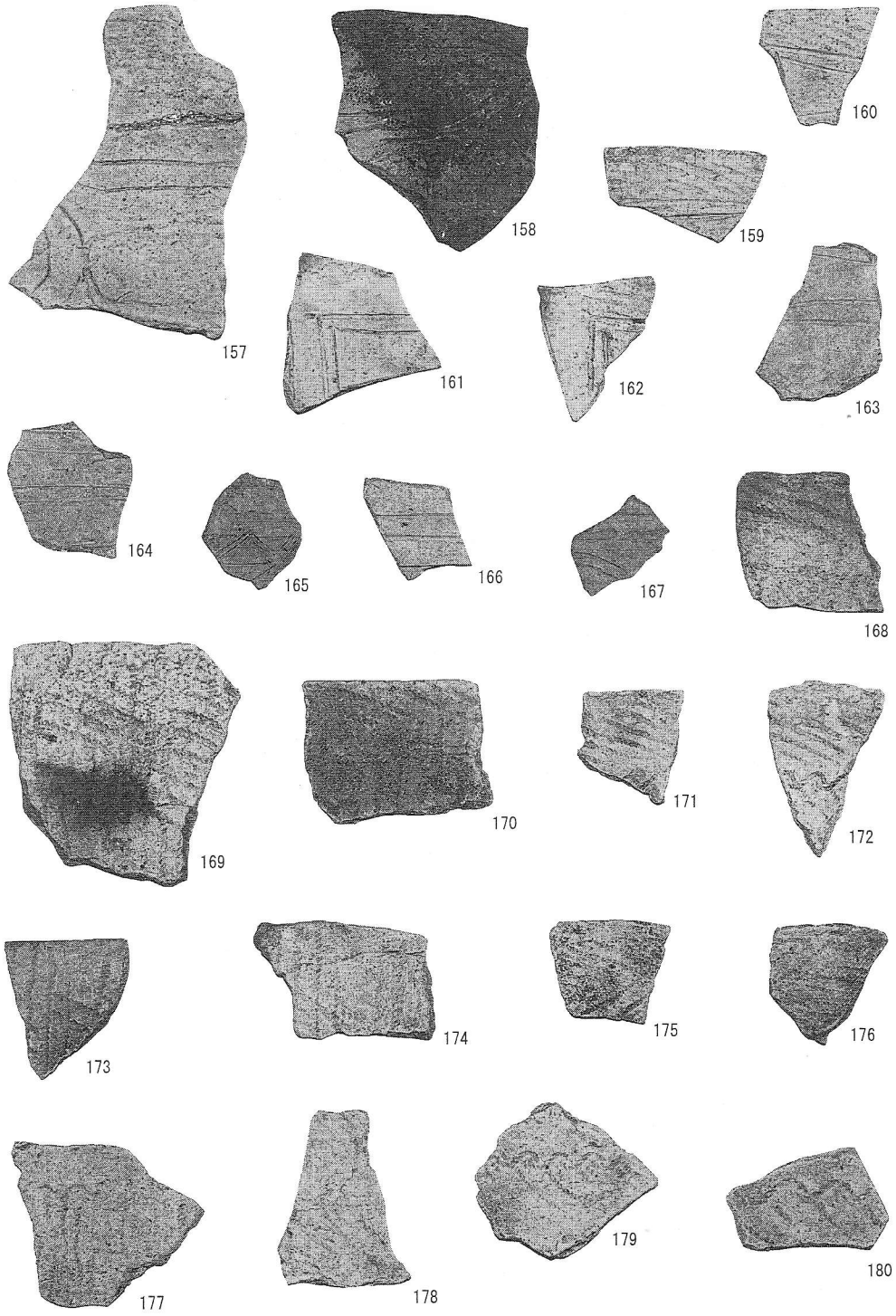

153

154

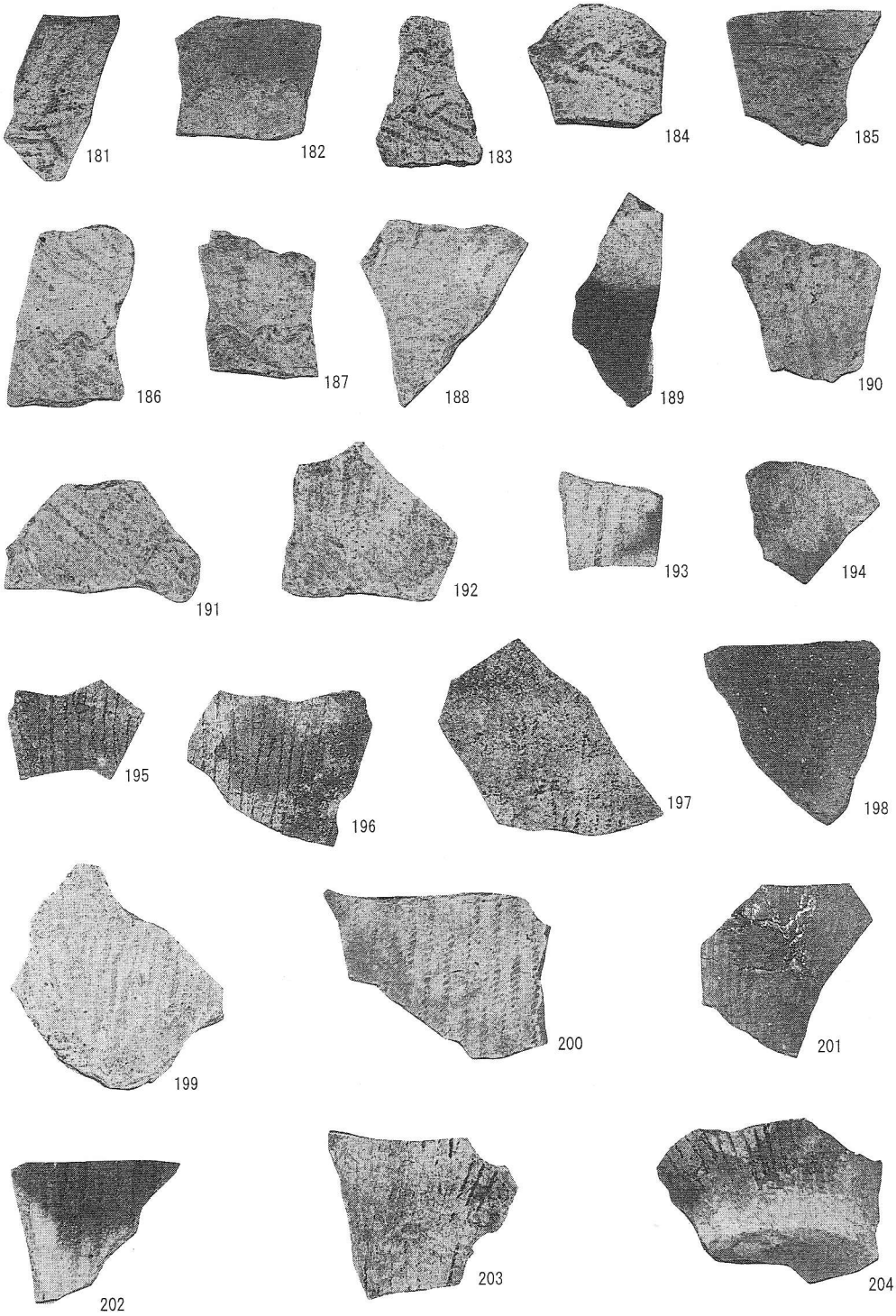

155


156

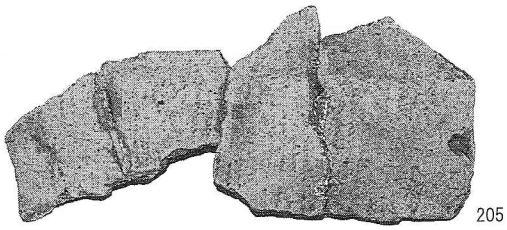
PL17 出 土 土 器(8)


157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180

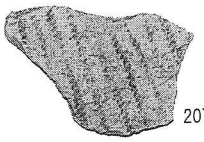
PL18 出 土 土 器(9)

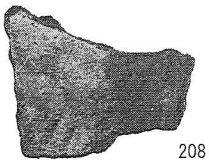

181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204

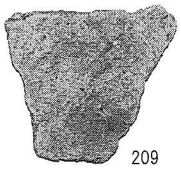
PL19 出 土 土 器(10)


205

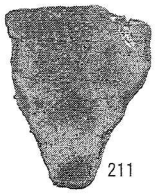
206

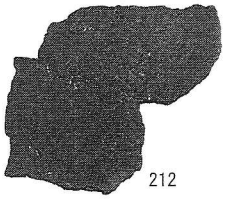

207

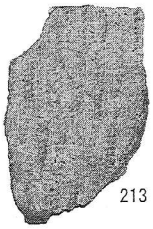

208

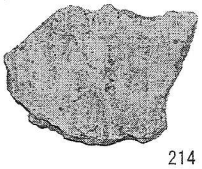

209

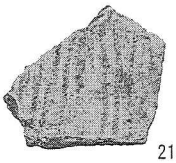
210


211

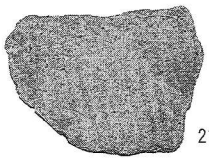

212


213

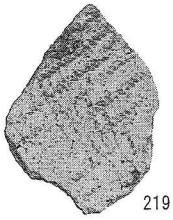

214


215

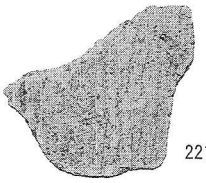
216


217

218

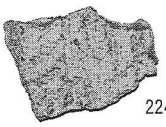

219

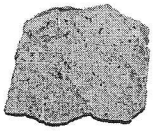
220


221

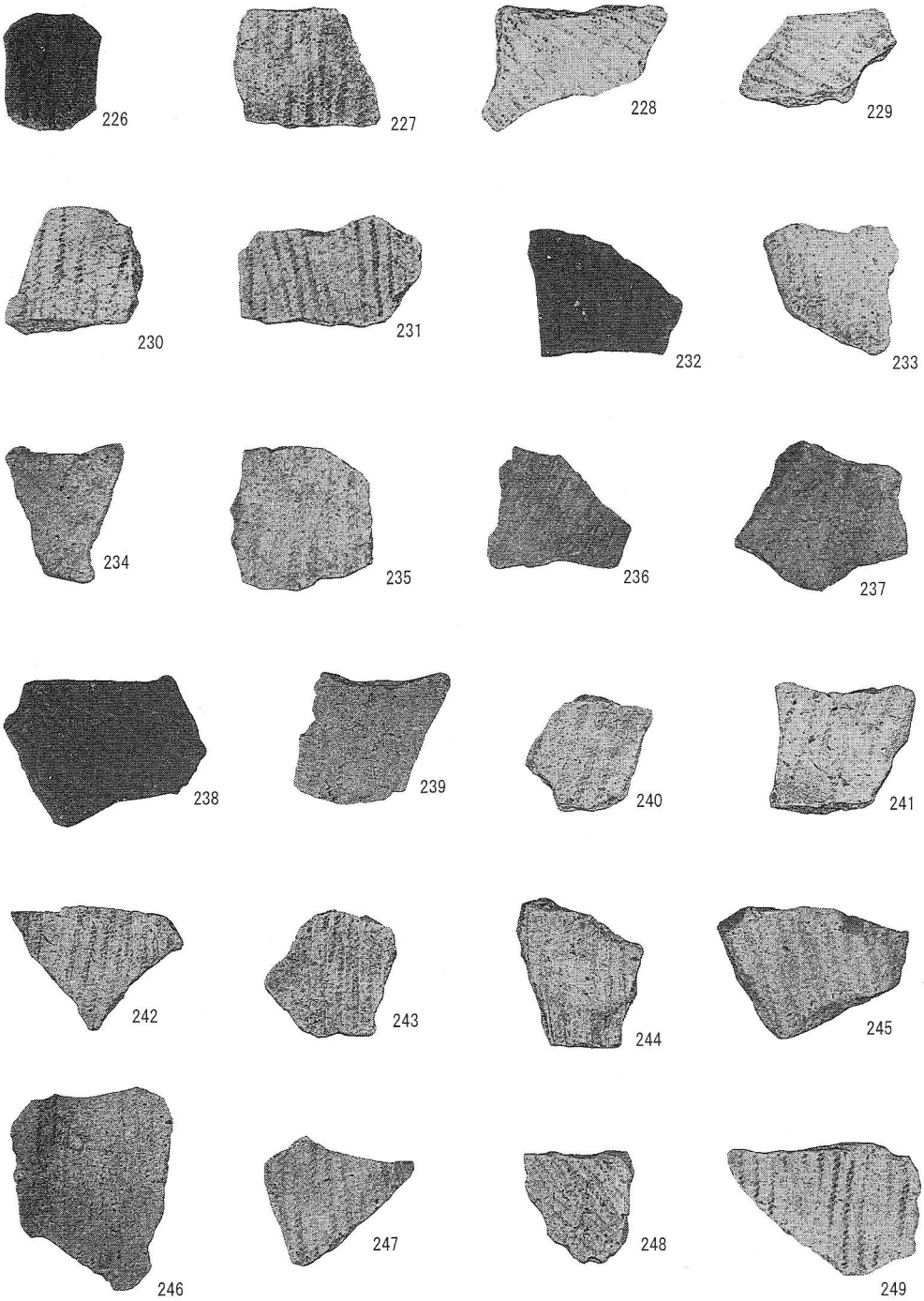
222

223

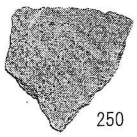

224


225

PL20 出 土 土 器(11)

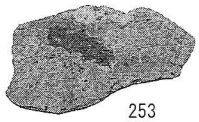

226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249

PL21 出 土 土 器(12)

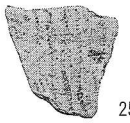

250

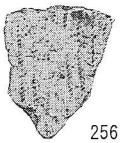
251

252


253

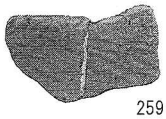
254

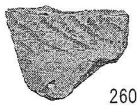

255


256

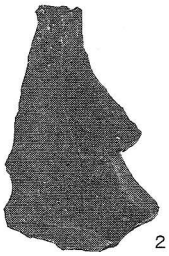
257

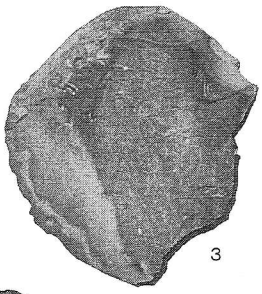
258


259

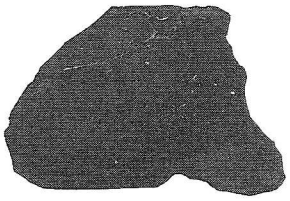

260

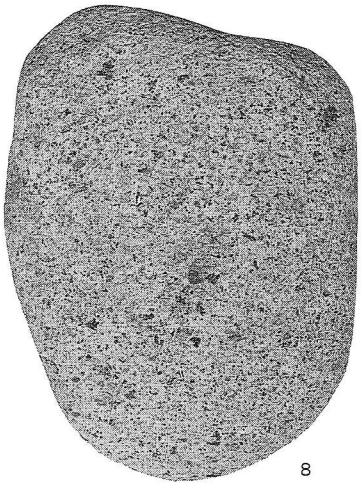
1


2

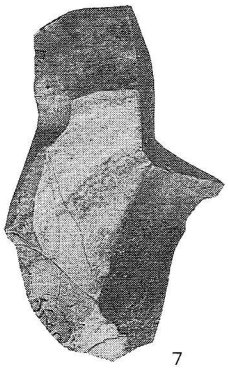

3

4


6


8

5


7

PL22　出土土器・石器

報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせき　おおゆかんじょうれっせき　はっくつちょうさほうこくしょ
書名	特別史跡　大湯環状列石　発掘調査報告書(23)
副書名	
巻次	
シリーズ名	鹿角市文化財調査資料
シリーズ番号	87
編著者名	鹿角市教育委員会（生涯学習課）
編集機関	鹿角市教育委員会（生涯学習課）
所在地	〒018-5292　秋田県鹿角市花輪字荒田４番地１
発行年月日	西暦2007年３月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
特別史跡 大湯環状列石	秋田県鹿角市十和田大湯字万座、字野中堂、字一本木後ロ	05209	123	40度 16分 21秒	140度 48分 50秒	2006 8.17 ～ 2006 12.12	1,340㎡	環境整備事業に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
特別史跡 大湯環状列石	環状列石	縄文時代後期 前葉～中葉 平安時代	配石遺構 竪穴住居跡	縄文土器 石器 弥生土器 土師器	一本木後ロ配石遺構群は二重の弧状を呈する確率が高くなった。 また、史跡の東側に入り込んだ沢頭を囲んで平安時代の集落が確認された。

鹿角市文化財調査資料87

特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(23)

発行年月日　平成19年３月30日
発　行　者　鹿角市教育委員会
〒018-5292
秋田県鹿角市花輪字荒田４番地１
TEL　0186-30-0294(生涯学習課文化財班)
印　刷　所　株式会社　米代新報社